

千葉ニュータウン 埋蔵文化財調査報告書 XXIV

－印西市天王台西遺跡－

平成23年10月

独立行政法人都市再生機構

財団法人 千葉県教育振興財団

千葉ニュータウン 埋蔵文化財調査報告書 XXIV

いんざい てんのうだいにし
—印西市天王台西遺跡—



序 文

財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを目的とし、昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第669集として、独立行政法人都市再生機構の千葉北部地区新住宅市街地開発事業に伴って実施した印西市天王台西遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、旧石器時代の石器をはじめ、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代の住居跡、中世の方形竪穴群が検出されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。この報告書が学術資料として、また地域の歴史解明の資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成23年10月

財団法人 千葉県教育振興財団
理事長 赤羽 良明

凡 例

- 1 本書は、独立行政法人都市再生機構による千葉北部地区新住宅街地開発事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県印西市(旧本埜村)竜観寺宇天王台西208他に所在する天王台西遺跡(遺跡コードCN617)である。
- 3 発掘調査から報告書刊行に至る業務は、独立行政法人都市再生機構の委託を受け、財団法人千葉県教育振興財団が実施した。
- 4 発掘調査および整理作業の担当者、実施期間は本文中に記載した。
- 5 本書は、第1章・第2章を副所長高橋博文、第3章から第7章までを上席研究員古内 茂が執筆した。
- 6 発掘調査から報告書刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部及び印西市教育委員会の御指導、御協力を得た。
- 7 石材については、有限会社考古石材研究所 柴田 徹氏の鑑定による。
- 8 中世陶器については、愛知学院大学藤澤良祐氏に御教示を賜った。
- 9 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
 - 第1図 国土地理院発行 1/50,000 「小林」(NI-54-19-14-3)
 - 第2図 印西市役所発行 1/2,500 印西市都市計画基本図
- 10 周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による平成16年撮影のものを使用した。
- 11 本書で使用した座標値は、日本測地系に基づく平面直角座標で、図面の方位はすべて座標北である。
- 12 挿図に使用したスクリーントーンは焼土・灰跡を示したものである。

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査の経過と概要	1
第2節 遺跡の位置と周辺環境	1
1 遺跡の地理的環境	1
2 遺跡周辺の歴史的環境	1
第2章 旧石器時代	6
第1節 概要	6
第2節 基本層序	6
第3節 遺構と遺物	6
1 第1地点	6
2 第2地点	20
3 第3地点	22
4 第4地点	24
5 第5地点	29
6 単独出土の石器群	29
第3章 縄文時代	36
第1節 概要	36
第2節 遺構と遺物	36
1 炬穴	36
2 陥穴	44
3 土坑	46
4 縄文土器包含層と石器製作跡	51
5 グリッド出土遺物	54
第4章 古墳時代	77
第1節 概要	77
第2節 遺構と遺物	77
第5章 奈良・平安時代	99
第1節 概要	99
第2節 遺構と遺物	99
第6章 中世・近世	103
第1節 概要	103
第2節 遺構と遺物	103
1 方形竪穴	103
2 地下式坑	104
3 土坑	105
4 溝	106
5 井戸状遺構	108
6 掘立柱建物跡	108
7 グリッド出土遺物	108
第7章 結語	143
報告書抄録	巻末

挿 図 目 次

- | | | | |
|------|----------------------|------|-------------|
| 第1図 | 周辺の地形と遺跡 | 第36図 | 上層遺構全体図 |
| 第2図 | 天王台西遺跡とその周辺 | 第37図 | 上層遺構部分図(1) |
| 第3図 | 上層確認調査トレンチ配置図 | 第38図 | 上層遺構部分図(2) |
| 第4図 | 下層確認調査・石器分布地点 | 第39図 | 炬穴平・断面図(1) |
| 第5図 | 基本土層図 | 第40図 | 炬穴平・断面図(2) |
| 第6図 | 第1地点石器分布図 | 第41図 | 炬穴出土石器 |
| 第7図 | 1-A地点石材・器種別出土状況図 | 第42図 | 陥穴平・断面図 |
| 第8図 | 1-A地点出土石器(1) | 第43図 | 土坑平・断面図(1) |
| 第9図 | 1-A地点出土石器(2) | 第44図 | 土坑平・断面図(2) |
| 第10図 | 1-B地点石材・器種別出土状況図 | 第45図 | 土坑平・断面図(3) |
| 第11図 | 1-B地点出土石器(1) | 第46図 | 土坑出土石器 |
| 第12図 | 1-B地点出土石器(2) | 第47図 | グリッド出土石器(1) |
| 第13図 | 1-B地点出土石器(3) | 第48図 | グリッド出土石器(2) |
| 第14図 | 1-B地点出土石器(4) | 第49図 | グリッド出土石器(3) |
| 第15図 | 1-B地点出土石器(5) | 第50図 | グリッド出土石器(4) |
| 第16図 | 1-C地点石材・器種別出土状況図 | 第51図 | グリッド出土石器(5) |
| 第17図 | 1-C地点出土石器 | 第52図 | グリッド出土石器(6) |
| 第18図 | 1-D地点石材・器種別出土状況図 | 第53図 | グリッド出土石器(7) |
| 第19図 | 1-D地点出土石器 | 第54図 | グリッド出土石器(8) |
| 第20図 | 第2地点石材・器種別出土状況図 | 第55図 | グリッド出土石器(1) |
| 第21図 | 第2地点出土石器 | 第56図 | グリッド出土石器(2) |
| 第22図 | 第3地点石材別出土状況図 | 第57図 | グリッド出土石器(3) |
| 第23図 | 第3地点器種別出土状況図 | 第58図 | グリッド出土石器(4) |
| 第24図 | 第3地点出土石器(1) | 第59図 | グリッド出土石器(5) |
| 第25図 | 第3地点出土石器(2) | 第60図 | グリッド出土石器(6) |
| 第26図 | 第3地点出土石器(3) | 第61図 | グリッド出土石器(7) |
| 第27図 | 第3地点出土石器(4) | 第62図 | グリッド出土石器(8) |
| 第28図 | 第4地点石材・器種別出土状況図 | 第63図 | グリッド出土石器(9) |
| 第29図 | 第5地点石材・器種別出土状況図 | 第64図 | 030号住居跡 |
| 第30図 | 第4地点出土石器 | 第65図 | 031号住居跡 |
| 第31図 | 第5地点・単独出土石器 | 第66図 | 032号住居跡 |
| 第32図 | 単独出土石器石材・器種別出土状況図(1) | 第67図 | 033号住居跡 |
| 第33図 | 単独出土石器石材・器種別出土状況図(2) | 第68図 | 034号住居跡 |
| 第34図 | 単独出土石器石材・器種別出土状況図(3) | 第69図 | 035号住居跡 |
| 第35図 | 単独出土石器 | 第70図 | 366号住居跡 |

第71図	401号住居跡	第90図	方形竪穴（3）
第72図	402号住居跡	第91図	方形竪穴（4）
第73図	403号住居跡	第92図	方形竪穴（5）
第74図	404号住居跡	第93図	方形竪穴の規模と周溝の有無
第75図	405号住居跡	第94図	地下式坑
第76図	406号住居跡	第95図	土坑（1）
第77図	407号住居跡	第96図	土坑（2）
第78図	408号住居跡	第97図	土坑（3）
第79図	409号住居跡	第98図	土坑（4）
第80図	住居跡出土遺物（1）	第99図	土坑（5）
第81図	住居跡出土遺物（2）	第100図	土坑（6）
第82図	住居跡出土遺物（3）	第101図	土坑（7）
第83図	住居跡出土遺物（4）	第102図	土坑（8）
第84図	199号住居跡	第103図	土坑（9）
第85図	200号住居跡	第104図	溝土層断面・井戸状遺構
第86図	436号住居跡	第105図	溝・掘立柱建物跡周辺図
第87図	住居跡出土遺物	第106図	掘立柱建物跡（SB001・SB002）
第88図	方形竪穴（1）	第107図	中・近世遺構出土遺物
第89図	方形竪穴（2）		

表 目 次

第1表	天王台西遺跡発掘調査・整理経過	第5表	方形竪穴一覧
第2表	炉穴一覧	第6表	中世土坑一覧
第3表	土坑一覧	第7表	溝一覧
第4表	石器・石材一覧		

図 版 目 次

図版1	航空写真1 天王台西遺跡とその周辺	図版6	単独出土の石器（6G-20）、同上（5G-02）、同上（9B-30）
図版2	航空写真2 遺跡遠景（北から）	図版7	第1-A地点出土石器（上）、第1-C地点出土石器（下）
図版3	航空写真3 遺跡近景（上・北から、下・南から）	図版8	第1-B地点出土石器（1）
図版4	土層断面（10E-28グリッド）、第1地点石器群出土状況（西から）、第2地点石器群出土状況（東から）	図版9	第1-B地点出土石器（2）
図版5	第3地点石器群出土状況（東から）、第4地点石器群出土状況（西から）、第5地点石器群出土状況（東から）	図版10	第1-D地点出土石器（上）、第2地点出土石器（中）、単独出土の石器（下）
		図版11	第3地点出土石器（1）
		図版12	第3地点出土石器（2）（上）、第4地点

- 出土石器(中)、第5地点出土石器(下)
- 図版13 炉穴全景・遺物出土状況(1)
- 図版14 炉穴全景・遺物出土状況(2)
- 図版15 陥穴・土坑全景(1)
- 図版16 陥穴・土坑全景(2)
- 図版17 縄文土器包含層(1)
- 図版18 縄文土器包含層(2)
- 図版19 縄文土器包含層(3)
- 図版20 遺構出土土器(炉穴・土坑)
- 図版21 グリッド出土土器(1)
- 図版22 グリッド出土土器(2)
- 図版23 グリッド出土土器(3)
- 図版24 グリッド出土土器(4)
- 図版25 グリッド出土土器(5)
- 図版26 グリッド出土土器(6)
- 図版27 グリッド出土土器(7)
- 図版28 グリッド出土土器(8)、グリッド出土石器(1)
- 図版29 グリッド出土石器(2)
- 図版30 グリッド出土石器(3)
- 図版31 グリッド出土石器(4)
- 図版32 グリッド出土石器(5)
- 図版33 031号住居跡全景・同上土層断面・同上遺物出土状況
- 図版34 032号住居跡全景・同上土層断面・同上遺物出土状況
- 図版35 033号住居跡全景・同上土層断面・同上遺物出土状況
- 図版36 034号住居跡全景・同上土層断面・同上遺物出土状況
- 図版37 035号住居跡全景・同上遺物出土状況、366号住居跡全景
- 図版38 403号住居跡遺物出土状況、404号住居跡全景・同上遺物出土状況
- 図版39 405号住居跡全景・同上土層断面・同上遺物出土状況
- 図版40 405号住居跡炭化物検出状況、406号住居跡全景・同上遺物出土状況
- 図版41 407号住居跡遺物出土状況、408号住居跡土層断面、409号住居跡土層断面
- 図版42 199号住居跡全景・同上カマド検出状況・同上土層断面・同上遺物出土状況
- 図版43 200号住居跡全景・同上土層断面・同上カマド検出状況、同上カマド内遺物出土状況・同上遺物出土状況
- 図版44 436号住居跡全景・同上土層断面・同上遺物出土状況・同上カマド遺物出土状況
- 図版45 030号・031号・032号・033号住居跡出土遺物
- 図版46 034号・035号・402号・403号住居跡出土遺物
- 図版47 404号・405号・406号住居跡出土遺物
- 図版48 407号・408号・199号・200号・436号住居跡出土遺物
- 図版49 019号～025号方形竪穴全景、022号・277号・301号方形竪穴全景、026号・027号方形竪穴全景
- 図版50 028号・029号方形竪穴全景、055号方形竪穴全景、054号・059号方形竪穴全景、060号方形竪穴全景、067号・068号方形竪穴全景、171号方形竪穴全景、052号方形竪穴全景、115号方形竪穴全景
- 図版51 161号方形竪穴全景、012号・013号・022号方形竪穴土層断面、023号方形竪穴土層断面、024号・025号方形竪穴土層断面、026号・027号方形竪穴土層断面、028号方形竪穴土層断面、059号方形竪穴土層断面、060号方形竪穴土層断面
- 図版52 067号方形竪穴土層断面、171号方形竪穴土層断面、277号方形竪穴土層断面、301号方形竪穴土層断面、411号方形竪穴土層断面、412号方形竪穴土層断面、413号方形竪穴土層断面、416号方形竪穴土層断面

- 図版53 012号地下式坑全景、012号・013号地下式坑土層断面、012号・013号地下式坑全景、013号地下式坑周辺
- 図版54 土坑群近景（1）、9G-35グリッド周辺、9G-43グリッド周辺、9G-82グリッド周辺、同上
- 図版55 土坑群近景（2）、10G-13グリッド周辺、10G-56グリッド周辺、同上
- 図版56 土坑群近景（3）、11F-86グリッド周辺、11G-22グリッド周辺、11G-50グリッド周辺
- 図版57 土坑群近景（4）、12G-42グリッド周辺、12G-65グリッド周辺、12G-95グリッド周辺
- 図版58 009号全景、010号全景、041号全景、042号全景、202号全景、421号全景、479号全景、480号全景
- 図版59 201号全景、475号全景、477号全景、482号全景、483号全景、484号全景、081号粘土検出状況、319号遺物出土状況
- 図版60 029号土層断面、045号土層断面、055号土層断面、088号土層断面、086号土層断面、090号土層断面、098号土層断面、201号土層断面
- 図版61 溝（1）、002号（南西から）、003号（南東から）、061号・062号・063号（北西から）
- 図版62 溝（2）、320号（南から）、486号（西から）・同上遺物出土状況
- 図版63 溝（3）、486号・487号（南西から）、488号（南西から）、490号（南から）
- 図版64 溝（4）、001号土層断面、002号土層断面、061号・063号土層断面、002号遺物出土状況、062号・063号土層断面、480号土層断面
- 図版65 方形竪穴（024号・411号）出土遺物
- 図版66 地下式坑・溝・グリッド出土遺物

第1章 はじめに

第1節 調査の経過と概要

千葉北部地区新住宅市街地開発事業関連の埋蔵文化財調査は、財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）が、当初千葉県企業庁の委託を受けて開始した。その後、事業者が独立行政法人都市再生機構に代わったが、業務委託を受けて継続して発掘調査を実施してきたものである。

本書に収録した天王台西遺跡の発掘調査は、平成元年度に遺跡の中央部周辺から開始され、途中中断をはさみながら平成19年度までの6次にわたる調査により完了した。

調査の結果、北に延びる舌状台地の東において旧石器時代の石器集中地点と縄文時代の炉穴群・遺物包含層などが確認され、近接する南西地点では古墳時代の堅穴住居跡群が検出された。さらに南の台地奥部では古墳時代の住居跡群とともに本地域では例をみない中世遺構群が検出されている。遺構としては方形堅穴・土坑・掘立柱建物跡・溝などで構成され、中世前半期の村落の一端が本調査によって明らかとなった。

整理作業は平成17年度に図面整理や出土遺物の水洗など基礎的な部分を実施し、平成19年度から本格的な整理へと移行し、同20年度には原稿執筆の一部を残し、整理作業もほぼ終了を向かえた。なお、発掘調査及び整理作業に関係する各年度の組織・担当職員及び作業内容は第1表のとおりである。

第2節 遺跡の位置と周辺の環境

1 遺跡の地理的環境（第1図）

天王台西遺跡が所在する地区は、千葉県の北部に広がる洪積台地である下総台地の北端に近く西印旛沼の北に位置する。現利根川本流から南へ7kmほど離れており、印旛沼に注ぐ小河川によって開析された谷津を北に望み、本遺跡の立地する台地の標高は27m～29mとなる。

2 遺跡周辺の歴史的環境（第2図）

水源を求めろいにしえの人のびとにとって印旛沼周辺は住環境に恵まれた地域となっていたものと思われる。印旛沼を取り囲む台地上では数多くの遺跡が残されている。特に本遺跡（1）周辺のように、印旛沼に接近する地域は遺跡が密集する場所でもある。

本遺跡の立地する台地は印旛沼からみればやや奥に位置しており、南には向辺田遺跡（6）、角田台遺跡（3）、雨古瀬遺跡（2）、北西には五斗蒔遺跡（7）、向原遺跡（8）などが所在する。向辺田遺跡では旧石器時代の石器群、縄文時代の炉穴群、奈良・平安時代の小規模な集落といったような遺跡構成がみられ、角田台遺跡は弥生時代と奈良・平安時代の集落と中世では井戸状遺構・土坑・台地整形といった集落の一端を形成する遺構が検出されており、両遺跡とも本遺跡と共通する時代の遺構・遺物が出土している。

そこで上記以外の遺跡分布について、分布地図（注1）を参考として時系列的にみると以下のようになる。

旧石器時代：遺跡の分布は概して少ない。これは分布調査における確認の難しさといえよう。しかし、本遺跡を含む千葉ニュータウン関連の発掘調査では出土例が多く、今後も増加することが予測される。

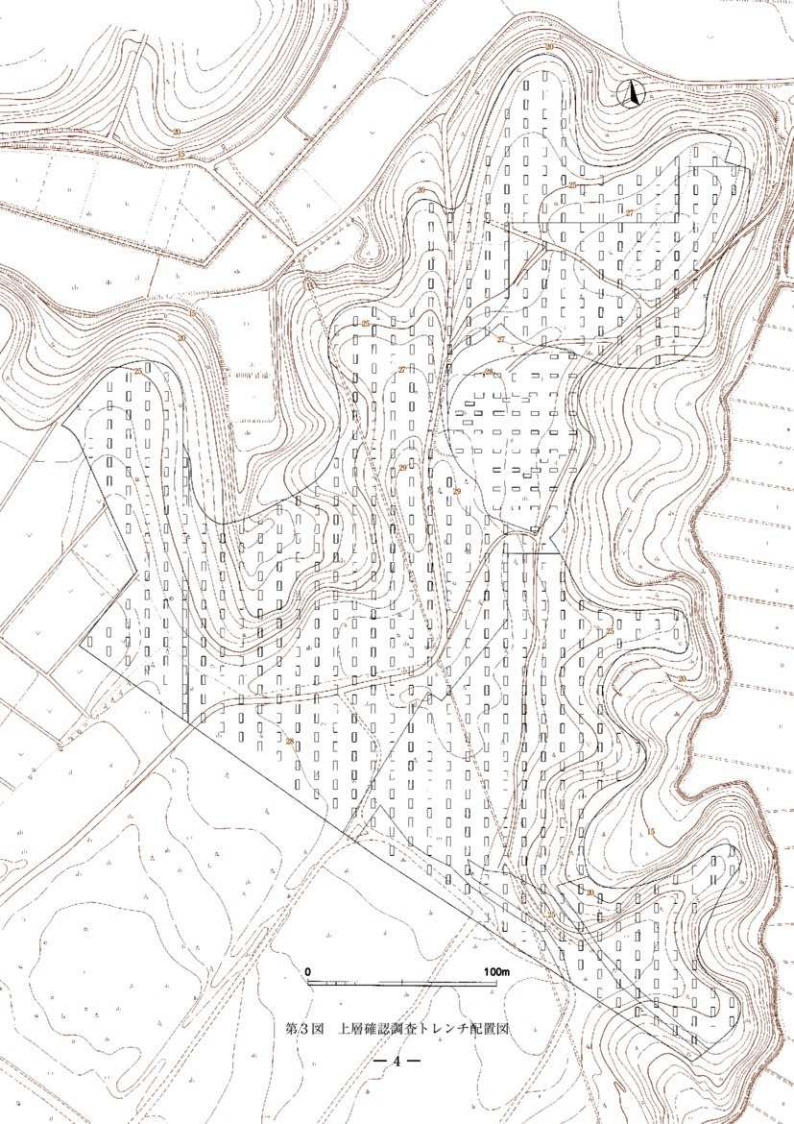


第1図 周辺の地形と遺跡 (1/25,000)

- | | |
|-----------|------------|
| 1. 天王台西遺跡 | 6. 向辺田遺跡 |
| 2. 雨古瀬遺跡 | 7. 五斗峠遺跡 |
| 3. 角田台遺跡 | 8. 向原遺跡 |
| 4. 式卜込遺跡 | 9. 向原北遺跡 |
| 5. 荒ヶ道跡 | 10. 地岡穴台遺跡 |



第2図 天王台西遺跡とその周辺



第3図 上層確認調査トレンチ配置図

縄文時代：この時代の遺跡は多くみられ、時期的な分布状況を見ると、早期・中期・後期に属する遺構が検出され出土遺物も多型式にわたる。また早期や中期には貝塚も形成されている。

弥生時代：印旛沼周辺、特に南部域での分布は多く、大規模な集落を展開する遺跡もみられる。時期的には後期に属する遺跡が主となる。また印旛沼から利根川に至る地域での集落の規模は小さい。

古墳時代：古墳は印旛沼や手賀沼を望む台地縁辺に多数が造営されており、その周辺には集落が展開する。希に泉北側第2遺跡（注2）のように古墳と距離をおく集落も検出されているがそうした遺跡数は少ない。

奈良・平安時代：縄文時代には及ばないものの比較的多くの遺跡が分布し、墨書土器の出土とともに大きな集落を形成する遺跡もみられる。

中・近世：中世の印旛沼周辺では見晴らしの良好な高台に城館が築かれ、近世には広範な地に放牧を目的とした野馬土手が巡り、千葉ニュータウン関連の発掘調査でも多数の報告例がある。

注

- 1 千葉県文化財センター1997 『千葉県埋蔵文化財分布地図（1）』－東葛飾・印旛地区（改訂版）－
- 2 高橋博文1991 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書X』（財）千葉県文化財センター

第1表 天王台西遺跡発掘調査・整理経過

年度	期間	対象 (㎡)	上層 (㎡)		下層 (㎡)		調査(研究) 部長	所長 (班長*)	担当職員
			確認 本調査	580 0	確認 本調査	232 324			
平成元	4/10～7/27	15,800	確認 本調査	580 0	確認 本調査	232 324	堀部昭夫	上野純司*	郷堀英司
平成10	4/6～3/25	61,200	確認 本調査	6,120 25,300	確認 本調査	- -	沼澤 豊	折原 繁	岡田誠造 猪股昭喜 竹田良男
平成11	4/6～6/30	12,000	確認 本調査	- -	確認 本調査	536 640	沼澤 豊	折原 繁	岡田誠造
平成13	9/3～10/31	6,850	確認 本調査	- -	確認 本調査	274 0	佐久間豊	石田広美	金丸 誠 木下圭司
平成17	4/6～9/21	35,550	確認 本調査	- -	確認 本調査	1,048 1,120	矢戸三男	古内 茂	岡田誠造 土屋潤一郎 森本和男
平成19	10/1～1/31	8,480	確認 本調査	- -	確認 本調査	236	矢戸三男	豊田佳伸	鈴木弘幸
平成17	2/15～3/31	53,350	水洗・注記から記録整理まで				矢戸三男	古内 茂	-
平成19	7/1～3/31	53,350	記録整理の一部から挿図・図版作成の一部まで				矢戸三男	豊田佳伸	高橋博文 雨宮龍太郎 田形孝一
平成20	4/1～10/31 1/4～1/31 3/1～3/31	68,680	挿図・図版作成の一部から原稿執筆・編集の一部まで				大原正義	豊田佳伸	高橋博文 宮 重行 香取正彦 井上哲朗
平成21	9/1～3/31	68,680	原稿執筆・編集の一部まで				及川淳一	野口行雄	高橋博文
平成23	6/1～12/28	68,680	報告書・印刷刊行				及川淳一	白井久美子	古内 茂

第2章 旧石器時代

第1節 概要

本遺跡では6次にわたる調査により北側の台地先端部から南に散在するような形で5か所の石器集中地点が確認された(第4図)。他に単独出土が8地点でみられ、計13地点において旧石器時代人の痕跡をたどることができた。石器群の多くはAT層(始良丹沢火山灰層)を包含する第Ⅵ層から第Ⅸ層にかけて出土している。また単独で出土した石器は第Ⅲ層から第Ⅴ層に包含されたものが多かった。石器群の規模は後述するように第1地点が最大で計232点の石器群で構成されていた。次いで第3地点で104点が出土しているが、他の地点での規模は小さなものであった。

第2節 基本層序(第5図、図版4)

本遺跡では、周辺地区も含め耕作などによって攪乱が著しく表土層から良好な堆積層順を示す場所は少なかった。そこで基本層順として比較的良好的な堆積を示していた9G-42グリッドと4I-00グリッドの層順を図示したが、第1層(表土層)と第2層は省略した。

第Ⅲ層 褐色土、いわゆるソフトローム層である。

第Ⅳ層 明褐色土、硬質ロームで第Ⅲ層が入り込む。本層の断面ではブロックが連続するようにもみえる。

第Ⅴ層 褐色土、硬質ロームで赤色スコリアと微量のガラス質粒子を含む。本層は地点により把握できない場所もあった。

第Ⅵ層 明褐色土、硬質ロームでAT層を包含する。

第Ⅶ層 暗褐色土、第Ⅸ層への漸移層で第Ⅸ層よりも若干明るい。

第Ⅷ層 暗褐色土、いわゆる第2暗色帯で赤色・黒色のスコリアを含み、場所によっては2～3層に細分できる。

第Ⅸ層 黄褐色土、スコリアは減少し、第Ⅸ層と比較すると若干軟らかい層となる。

第Ⅹ層 武蔵野ローム層

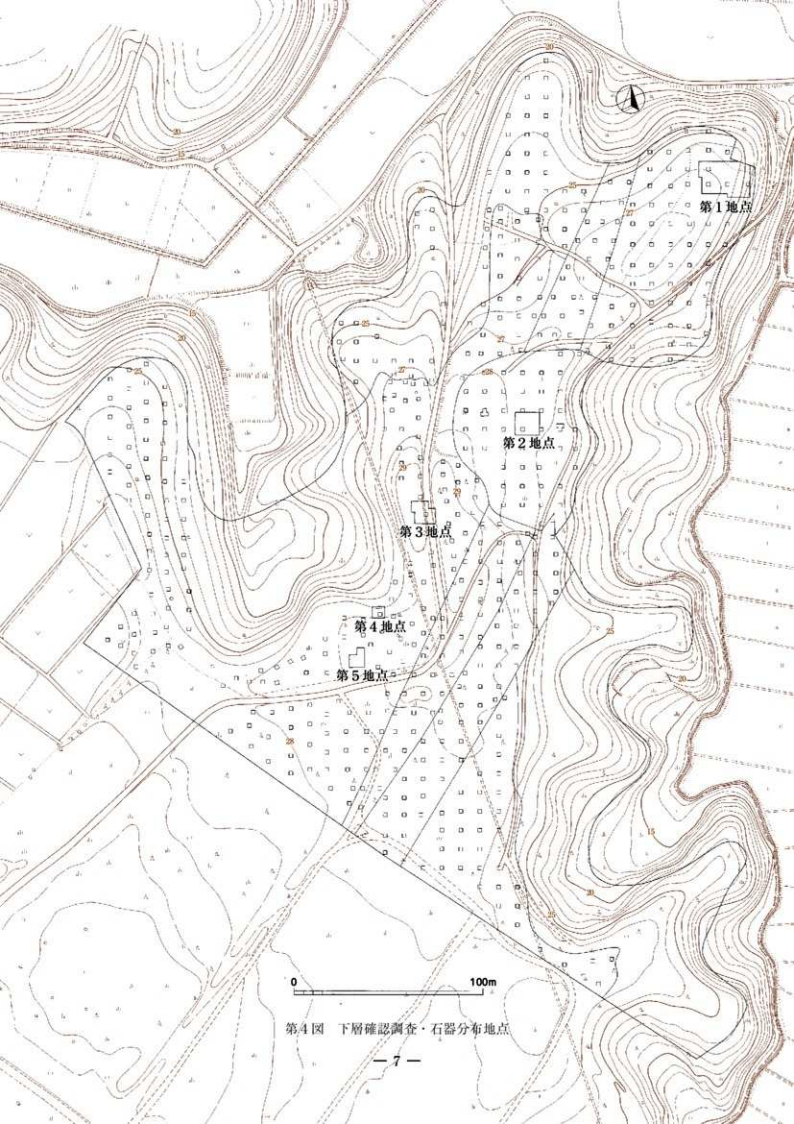
以上、立川ローム層を中心として基本層序について述べたが、場所によっては第Ⅲ層から第Ⅴ層や第Ⅸ層の細分などに変化が認められるが、立川ローム層以下に堆積する武蔵野ローム層についてはほぼ全域で確認されている。

第3節 遺構と遺物

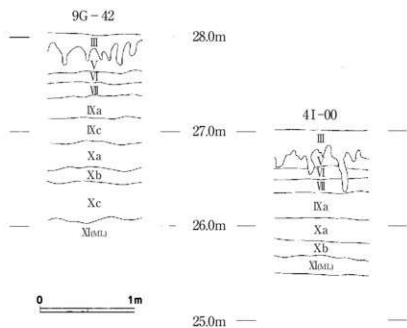
本遺跡では、前述したように石器集中地点が5か所、単独出土で8か所の計13地点で総計380点余に及ぶ石器群が出土した。これまでに調査された千葉ニュータウン関連の遺跡と比較すればそれほど多いとはいえない。以下、石器群が集中した5地点と単独で出土した石器群について述べることにしたい。

1 第1地点(第6図、図版4)

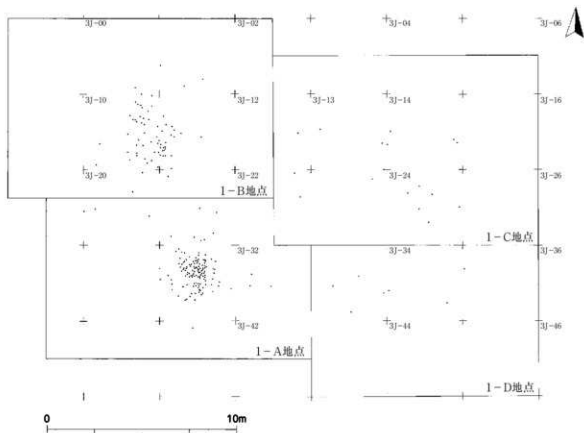
本地点は3J区の北西部において出土したもので、その出土数は232点に達して最大の規模を有するものとなった。石器群の分布域は広範に及び長径で20m、短径で16mを計測する。出土層位は第Ⅶ層から第



第4図 下層確認調査・石器分布地点



第5图 基本土层图



第6图 第1地点石器分布图

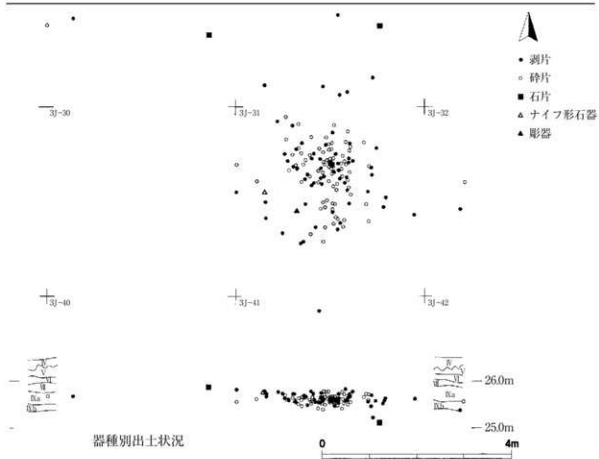
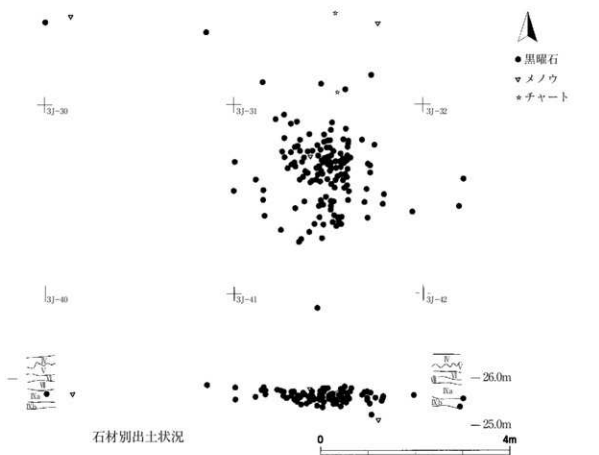
IX層ととらえることができた。また明確な集中地点が2か所で認められ、その間に空白部分も存在しており、小規模な環状石器群としてもとえられた。そのため整理の段階では、これを4分割し、それぞれ1-A地点から1-D地点としてまとめた。

1-A地点（第7図） 本地点は、3J-31グリッドおよびその周辺において黒曜石を主体とした石器群で構成されていたもので、とりわけ3J-31グリッドでの分布は濃密であった。そのため、このグリッドを第1地点の中心として考え1-A地点とした。出土した石器群についてみると、定型石器といえるものは少なくナイフ形石器・搔器・彫器が各1点出土しているものの剥片・破片の類が大半を占める石器群の構成となっていた。また他地点出土の石器群と比較すると、石核が5点と多いため、ここで黒曜石を母岩とした剥片剥離がおこなわれていたことは間違いあるまい。3J-31グリッドの集中地点では剥片・破片類が主体を占めていることもその事実を裏付けるものとなろう。このため出土数のわりに図示できた石器類は16点と少ない。

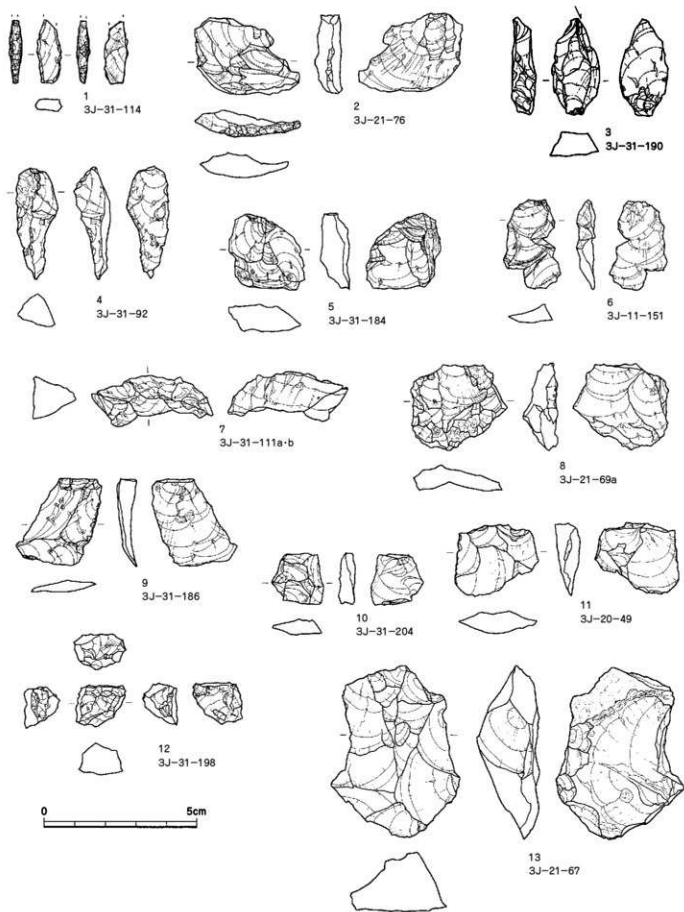
ここで採用されている石材は黒曜石の他にメノウ3点とチャート2点がみられた。図示した石器は11・13のメノウを除いてすべて黒曜石となる。なお、チャートについては破片であったため図化は省略した。黒曜石の石質について触れると、表面観察では内部に気泡や小石といった不純物が認められた。しかし使用された石器では比較的異物の混入は少なかったため、剥離された剥片でも不純物の少ない剥片を選択して成品としていたものであろう。

石器（第8・9図1～16、図版7） 1は先端部を欠失しているが小型のナイフ形石器としてよいであろう。横長の剥片を採用し、両側面はきれいに調整が施されている。基部は折断後に調整剥離を加えている。2は幅広の剥片を利用したもので、下端部を広い範囲で剥離し刃部としているようである。側縁での加工はみられない。裏面での整形も認められるため搔器のように使用されたものか、あるいは搔器の未成品といえよう。3の先端は若干欠損するが彫器となろう。厚手の剥片を素材としており、打面部は削除されている。側縁での加工は認められないが、右側先端にはファット痕が認められる。4は縦長剥片で表面には自然面がみられる。異物の混入が著しい。5や8は石器として加工するは十分な大きさであるが調整等の痕跡は認められない。9は縦長の剥片を素材としたもので右側縁に微細な調整痕が認められる。道具として使用されたことは間違いあるまい。11は幅広の剥片で裏面下端に微細な剥離がみられる。石材は良質なメノウである。12は残核で打面の一部には調整剥離が施されている。13はメノウで平坦な自然面を打面とし、周囲から剥片を剥取している。打面の一部には打面調整の痕跡も認められる。14は角柱状の石核で打面に適する平坦面は4面存在するが、異物の混入が顕著であり剥片剥離途中で放棄されたものと思われる。15は柱状に遺存した石核で、まだ剥片剥離は可能と思われるものであるが気泡や不純物が多いため放棄されたものであろう。16の打面は平坦に調整剥離が施され、表裏面から剥片が剥取されている。下端部では異物の混入が著しいため、ここで石核としての役目が終了したものと思われる。

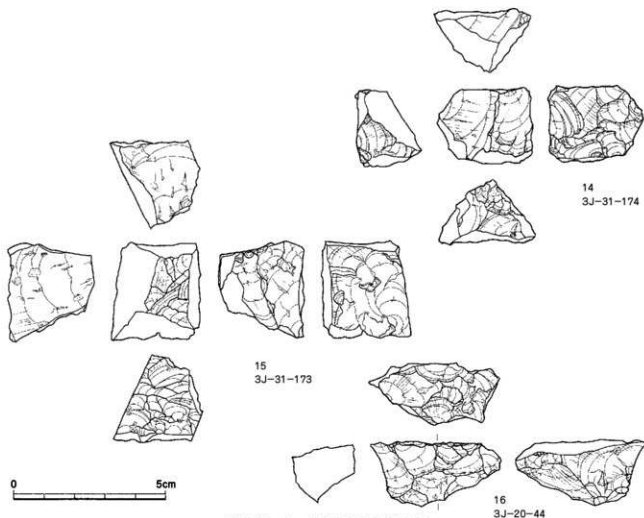
1-B地点（第10図） A地点の北に所在し、3J-10・11グリッドを中心として出土している。出土層位については、かなりの高低差が認められるため時期的に異なる可能性も否定できない。ここでも定型石器の器種は少なくナイフ形石器のみとなる。一方、接合資料は多くメノウ製の大型石核（第15図）は原石に近い形にまで復原できた。本地点でみられる石材はチャート・メノウが中心となり、黒曜石は少ない。図示については12点となるが、11・12については多数の剥片が接合した資料となる。石材は1～5が黒曜石、6は赤色チャート、7～9・12はメノウ、10は砂岩、11はチャートとなる。



第7図 1-A地点石材・器種別出土状況図

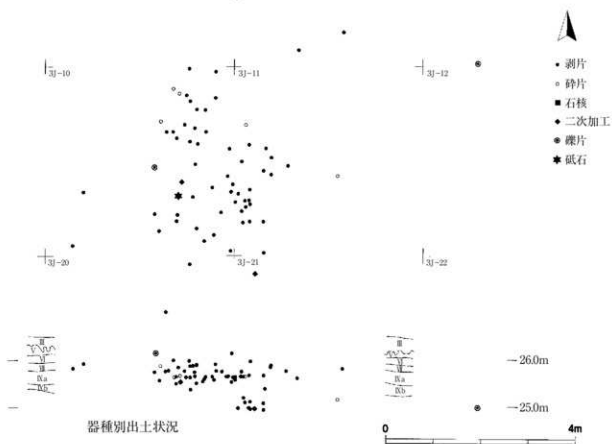
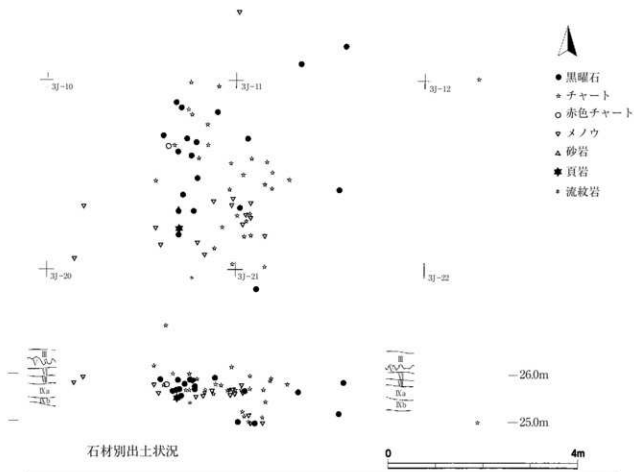


第8图 1-A地点出土石器(1)

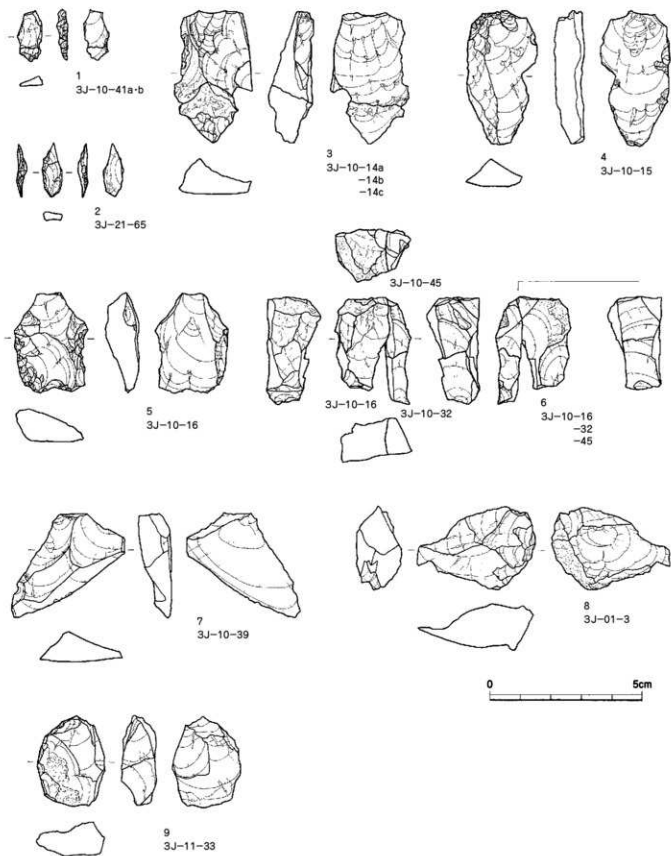


第9図 1-A地点出土石器(2)

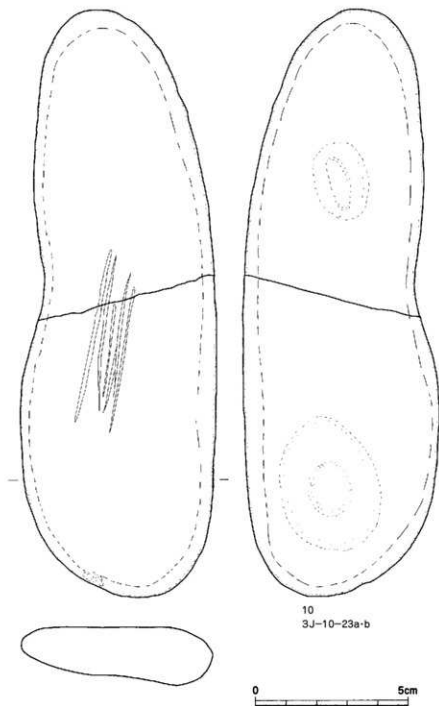
石器(第11~15図1~12、図版8・9) 1は先端部が欠損しているが右側面の調整からナイフ形石器となろう。2も小型品で細石器を想起させるものである。薄い横長剥片を素材としており、背面加工も緻密におこなわれている。3は自然面を残すものの異物の混入が著しい。4は縦長の剥片で側縁に若干の調整痕が認められる。形状も整っており石器として使用されたものであろう。5は右側縁に表裏からの調整剥離が認められる。楔形石器としての使用も考えられる。6は同一グリッドから出土した接合例で残核の一部となろう。7は良質なメノウで右側縁には刃こぼれ痕が認められる。石器として使用したものであろう。8は一部に自然面を残す。色調は白濁色を呈しており、他のメノウとは色調が異なる。10は薄く扁平な川原石を利用したもので、表面の中央には数条の擦痕がみられ、表裏面の下部には明確な使用による摩耗痕が残されている。特に裏面ではややくぼんでいるため石皿のような道具として使用された可能性を指摘できる。いずれにせよ類例の少ない石器といえよう。11はチャートの接合例で3J-10・11グリッドから出土したものである。16点が接合しており剥離の順序も観察できる程度に復原できた資料である。原石の大きさは拳大ほどとなろうが石器に加工されているものは存在しなかった。12も3J-10・11グリッドから出土したもので7点が接合した。原石の大きさは子供の頭大ほどとなろう。打面部を観察すると打面調整を施しつつ剥片を剥離したようであるが、表皮部分では不純物も多く含まれており、また内部でも多数の節理面が認められるため良好な剥片は得られなかったものと思われる。そのため剥離作業の途中で放棄されたものと考えられる。



第10図 1-B地点石材・器種別出土状況図



第11图 1-B地点出土石器(1)

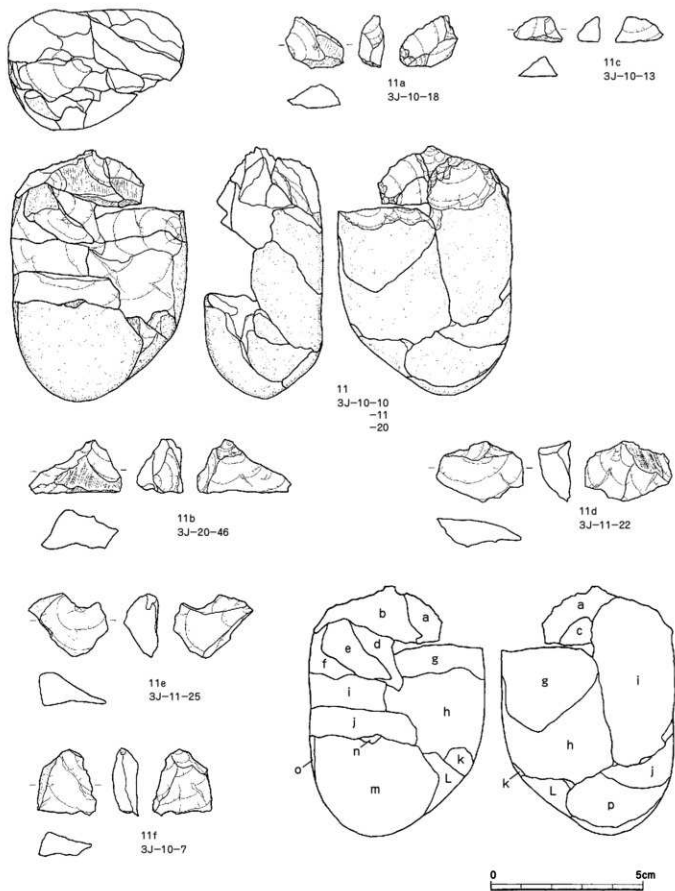


10
3J-10-23a-b

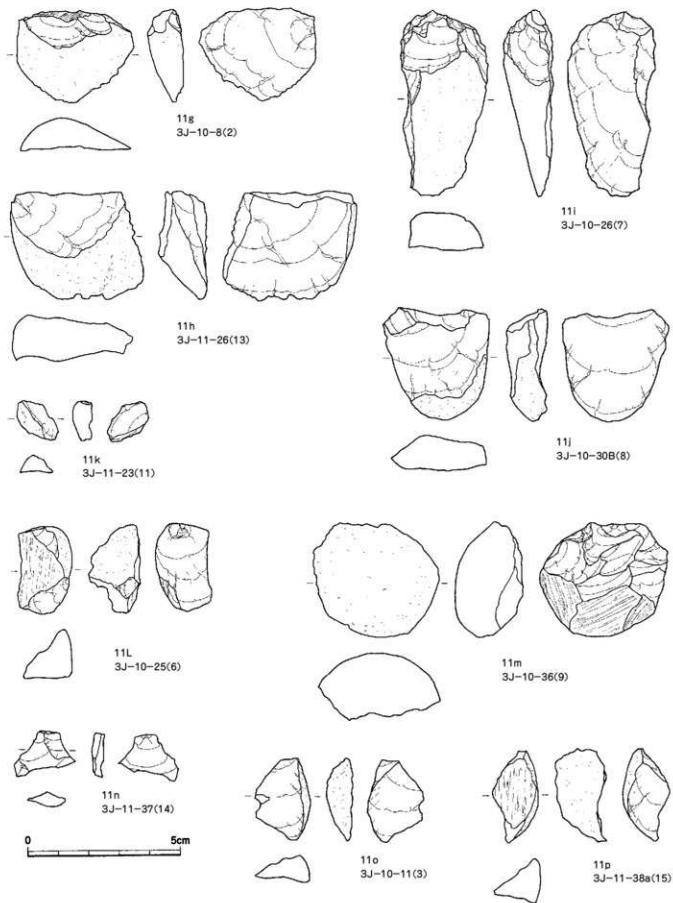
第12図 1-B地点出土石器(2)

1-C地点(第16図) 本地点は3J-23・24グリッドとその周辺で出土した石器群を便宜上区分しただけのもので前述したA・B地点のように遺物の集中する場所は存在しない。出土層位も多少の差異はあるが概ね第Ⅸ層と捉えられる。石材は黒曜石がやや多いが、珪質頁岩・メノウ・チャートなどによって構成される。石器類についてみると、成品はみられないものの破片は少なかった。図示した石器は5点で1・3が珪質頁岩、2がメノウ、4・5が黒曜石となる。

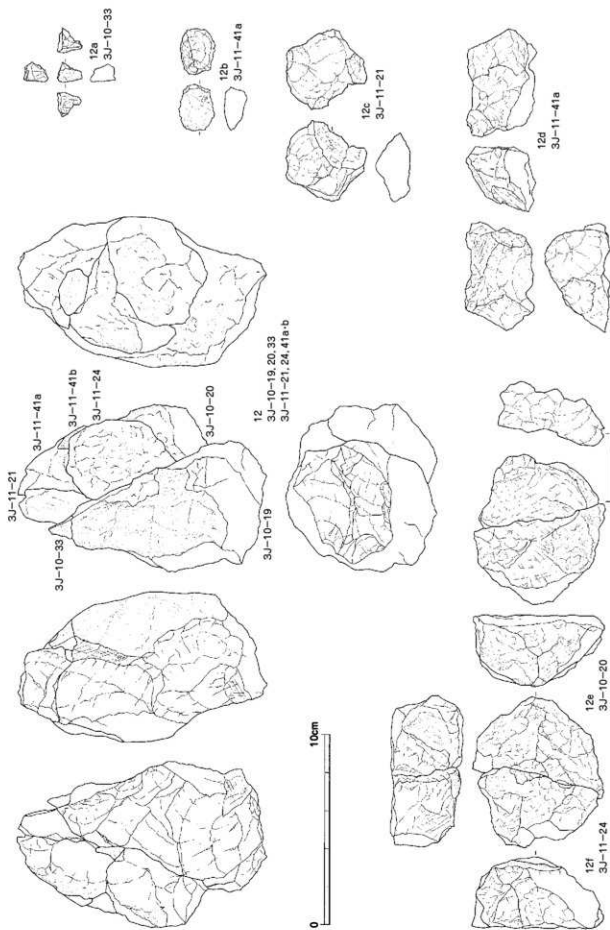
石器(第17図1~5、図版7) 1は横長の剥片で石器製作には十分な形状を有しているが、加工や刃こぼれ等の痕跡はみられない。2はB地点にみられた白濁色を呈したメノウであり、母岩は同一とも思われる。特に加工痕等は認められない。3は薄手の剥片で右側縁中央部に刃こぼれ痕と下部に若干の調整剥離痕が認められる。石器として使用したことは確かであろう。4は残核であり、異物の混入も認められるが



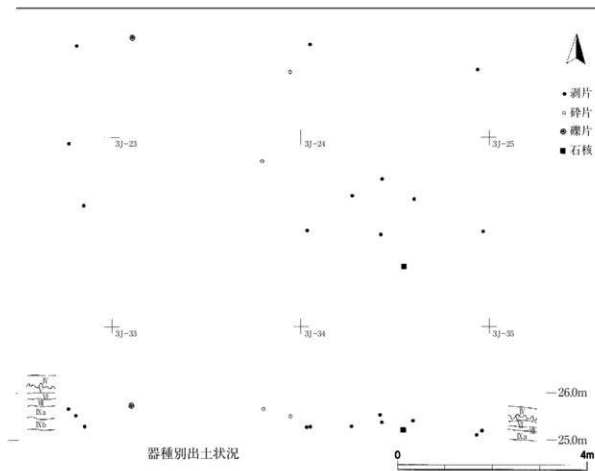
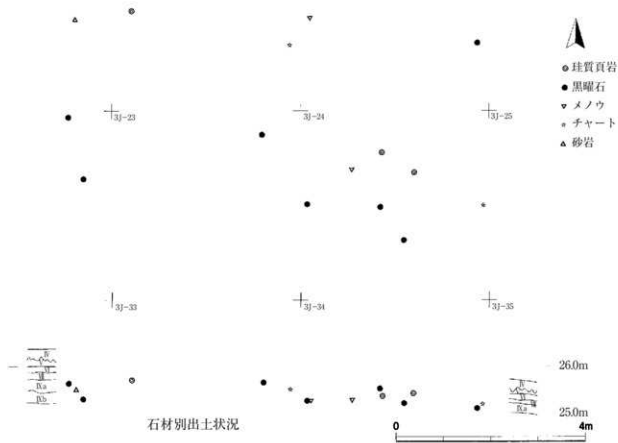
第13图 1-B地点出土石器(3)



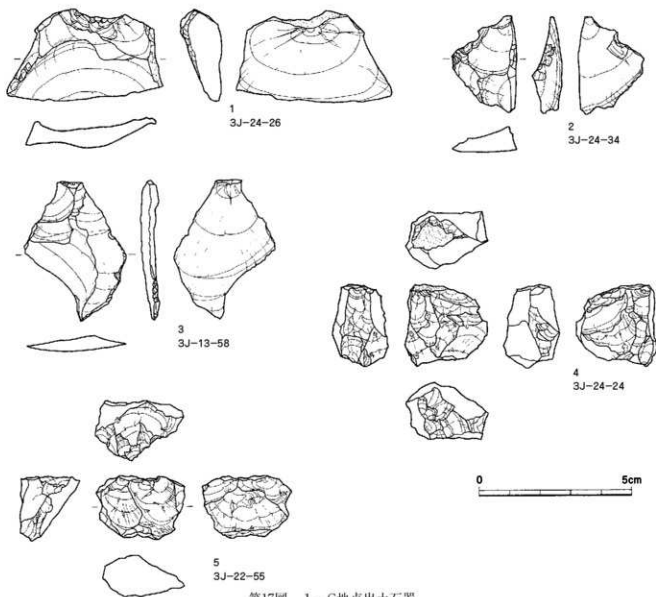
第14图 1-B地点出土石器(4)



第15图 1-B地点出土石器(5)



第16図 1-C地点石材・器種別出土状況図



第17図 1-C地点出土石器

平坦面を利用して多方向から剥片を剥離している。5も同様に残核となろう。表表面では多くの異物が観察できる。良質な石材とはいえない。

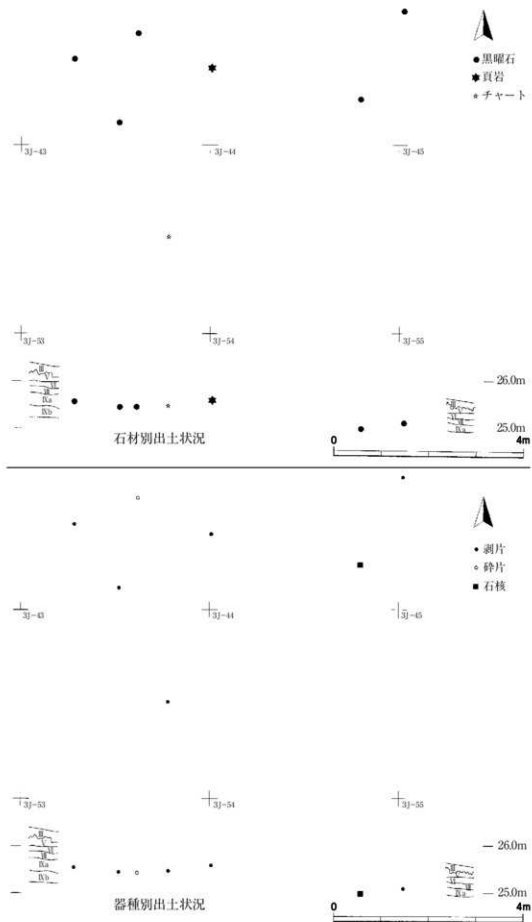
1-D地点(第18図) 3J-33・34・43グリッドで出土した石器群で量的には7点と少ない。石材では黒曜石が主体で構成されていた。他に頁岩とチャートが各1点ずつみられたが、小片であったため図化は省略した。図示した4点はいずれも黒曜石である。

石器(第19図、図版10) 1は折断された剥片で、右側縁で若干の刃こぼれが観察できる。下部中央の剥離は整形のためのものであろう。2は同一グリッドから出土した2点が接合したものである。形の整った剥片で両側縁に微細な調整痕が認められる。石器として使用されたものであろう。3は加工の痕跡はみられない。4は石核で打面を調整しながら剥片剥離を続けたようである。

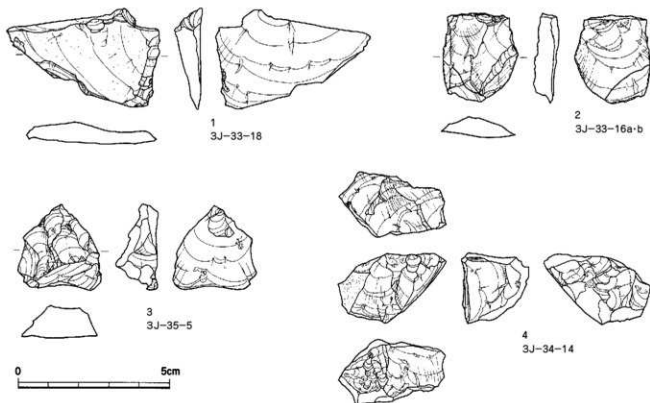
以上が第1地点の概要であるが、石材としては黒曜石が主体を占めており、1-A~D地点でみられる黒曜石はすべてが異物や気泡を含んだものであった。この点から黒曜石のおそらく供給地は同一の産地と推定される。

2 第2地点(第20図、図版4)

本地点は調査区のほぼ中央部にあたる6G地点で検出された小規模な集中地点である。石器群の分布は



第18図 1-D地点石材・器種別出土状況図



第19図 1-D地点出土石器

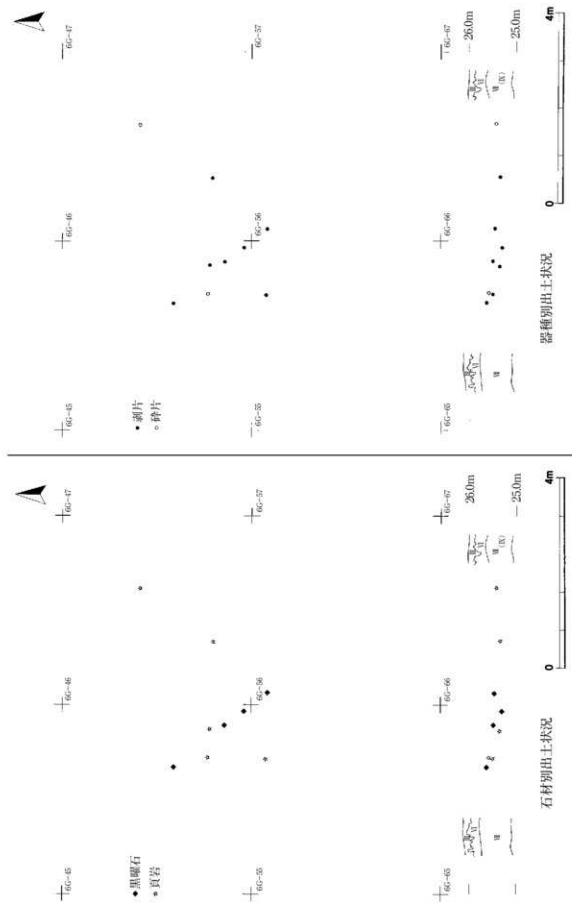
6 G-45グリッドが中心となり、計9点が出土した。出土層位は第Ⅳ層の漸移層となる第Ⅶ層中となる。つまり前者よりも後出の石器群といえよう。石材は黒色安山岩（1・2・4・7）と頁岩（3・5・6）によって構成されていた。成品は皆無で剥片と砕片のみであった。

石器（第21図、図版10） 1・2の石材には縞状の堆積痕が認められるため同一母岩から剥離されたものであろう。ともに自然面がみられる。3と5は自然面の色彩が一致しており、これも同じ母岩から剥離されたものと思われる。6は自然面がみられるものの十分石器に加工できる大きさである。

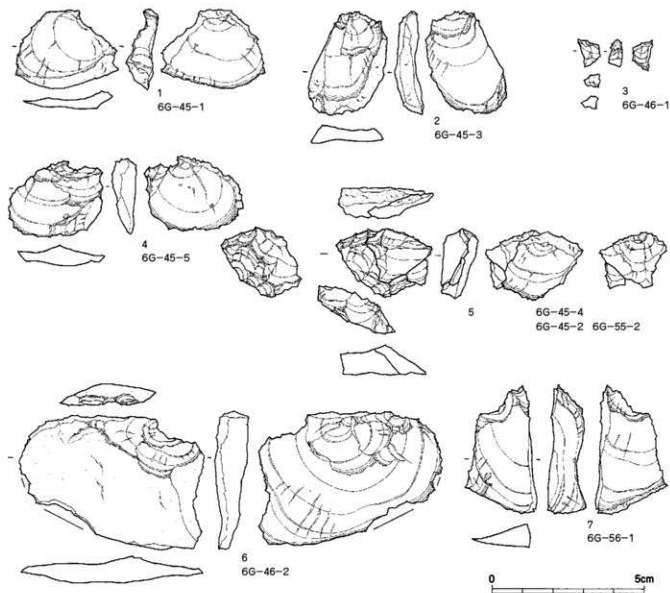
3 第3地点（第22・23図、図版5）

本地点は7 F区で検出された石器群で、7 F-62グリッドを中心として南北に9 m、東西に6 mの範囲に広がっていた。合計104点が出土しており、この出土量は第1地点に次ぐ規模となる。出土層位は第Ⅳ層から第Ⅴ層のいわゆるハードローム層を中心に第Ⅲ層や第Ⅵ層にまで及ぶ。この出土層位から考えると、本地点の石器群はさらに新しい時期の所産といえよう。ここで採用されている石材についてみると、黒曜石を主体として、黒色安山岩（2・3・21）やホルンフェルス（22・24）・砂岩（23）・頁岩（12）・珪質頁岩（20）といった石材が若干含まれていた。また黒曜石は前述した2地点でみられたように異物を多く含有している点が共通していた。石器製品ではナイフ形石器・台形石器・敲石が各1点存在しており、石器製作を意図したような二次剥離の施された剥片も存在している。

石器（第24～27図、図版11・12） 1は同一グリッドから出土した2点が接合したものである。幅広の剥片を用いたもので、石質にも起因するものと思われるが、背面や基部の整形はいたって粗雑な仕上げである。背面の加工からナイフ形石器としてよいであろう。2も同一グリッドから出土した2点が接合したものである。刃部の一部は欠損するが、両側面は丁寧に調整されており台形石器としてよいであろう。3は折断された剥片で左の側面に若干の加工がみられる。残された形状からナイフ形石器の製作意図がうかが



第20図 第2地点石材・器種別出土状況図

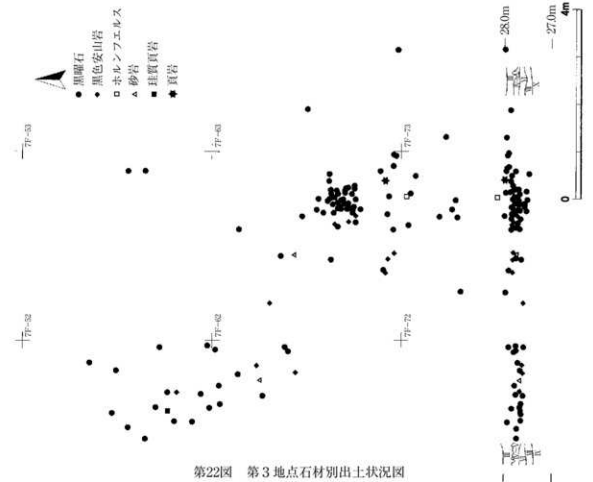


第21図 第2地点出土石器

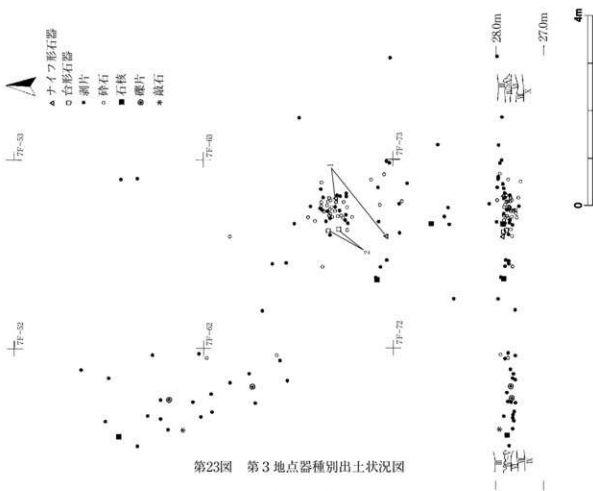
われる。10は横長の剥片が折れたもので右側縁には顕著な調整痕が認められる。左の側縁でも刃こぼれ痕がみられるため石器として使用されたものであろう。13も右側縁に調整剥離痕、左の側面上部にわずかな整形が認められる。19は平坦な部分で調整が加えられている。ナイフ形石器の製作が考えられる。20は表面にみられる大きな剥離痕から打面調整による剥片となろう。特に二次加工は認められない。23は敲石の欠損品で、棒状の川原石を使用したものであろう。下端部には鮮明な敲打痕が認められる。25は7F-51・61グリッドから出土しており、25aの残核に4点の剥片が接合したものである。異物を多く含む石質のためか、二次加工を施した剥片は認められなかった。26は表皮部分を剥離した剥片をさらに分割した2点が接合した例である。27は残核に剥片が接合した例であり、打面部には調整のための剥離痕が認められる。これらの黒曜石では著しい異物の混入が観察できる。

4 第4地点（第28図、図版5）

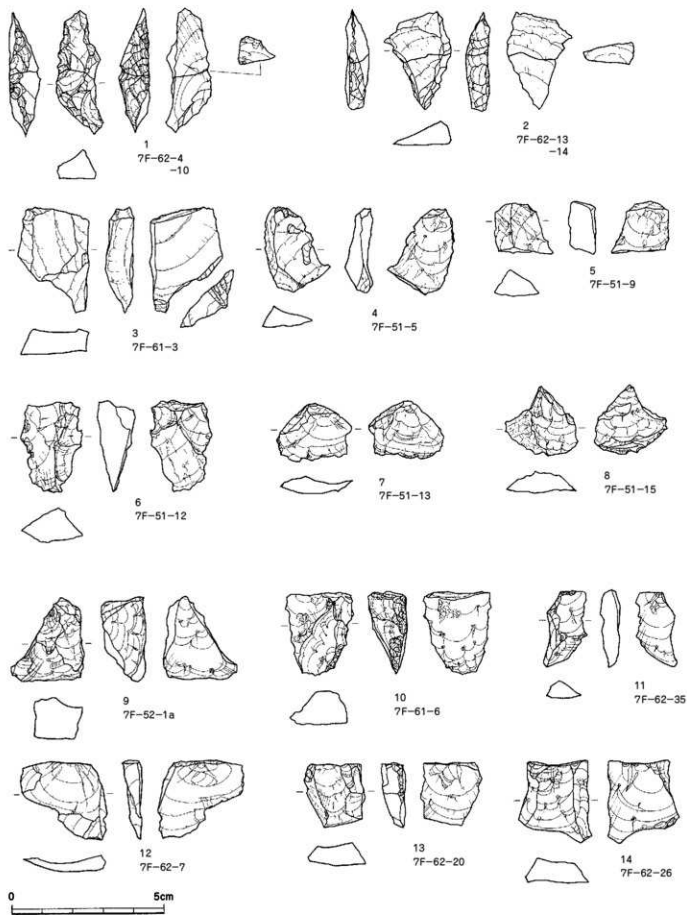
本地点は第3地点の約40mほど南で発見された小規模なものであった。8E-87・96・97の各グリッド



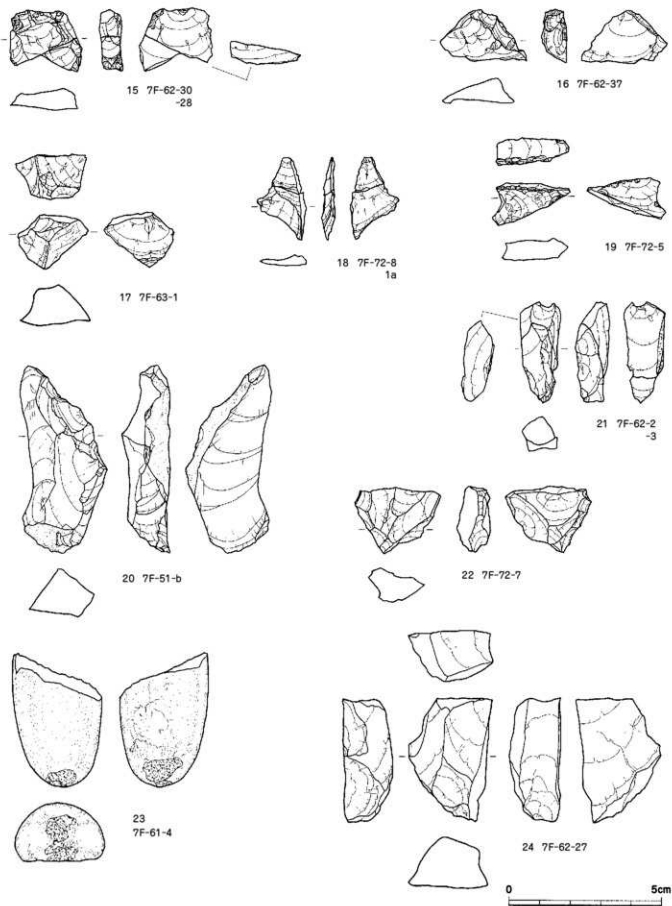
第22図 第3地点石材別出土状況図



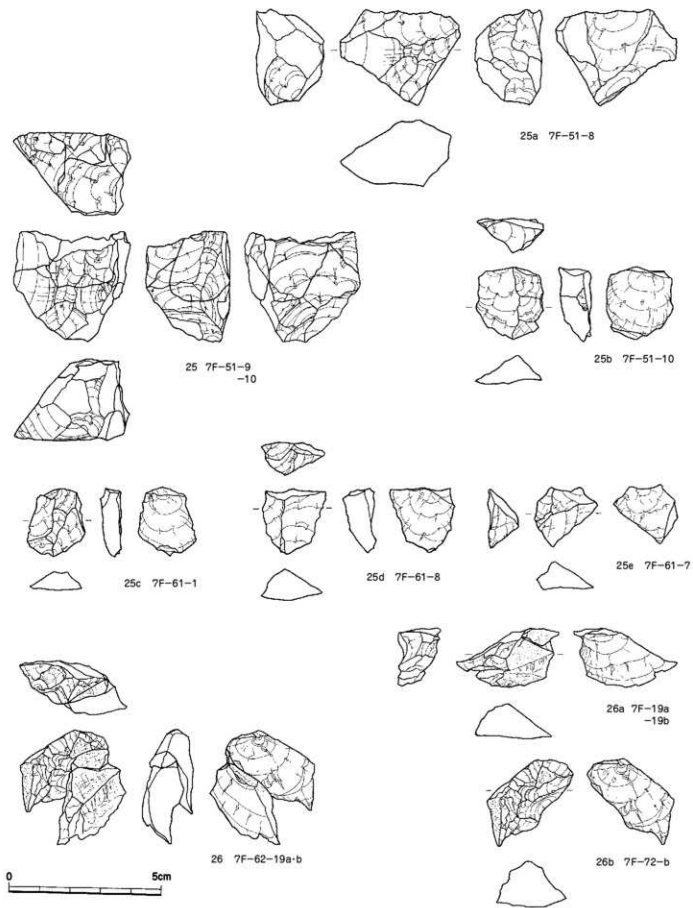
第23図 第3地点器種別出土状況図



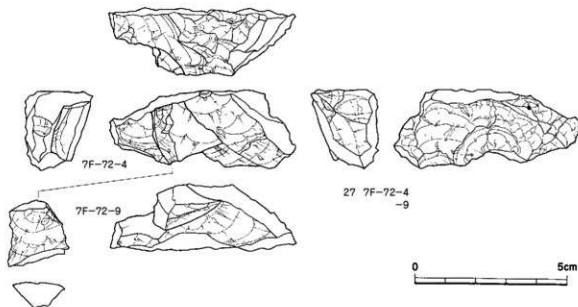
第24图 第3地点出土石器(1)



第25图 第3地点出土石器(2)



第26图 第3地点出土石器(3)



第27図 第3地点出土石器(4)

に散っており、出土層位は第V層となる。層位的には前者に近いものとなろう。石材についてみると、出土した6点はすべて頁岩で占められていた。おそらく色調から同一母岩から剥離されたものであろう。

石器(第30図、図版12) 1は自然面を多く残した幅広の分厚い剥片である。そのため右の側面を少なくとも4回の整形剥離によって形を整えている。下端部は刃部として若干整形した後には表裏面を微細な剥離により調整している。削器のような使い方をしたものであろう。2は同一グリッドから出土した2点の小剥片が接合したものである。使用などの痕跡は認められない。3は形状の整った幅広の剥片で十分石器に加工が可能となろう。主剥離面の一部には小さな剥離痕が認められる。右側縁でも刃こぼれ状の使用痕がみられるため石器として使用されたものと思われる。4も縦長の剥片で、断面が三角形となり石器の素材としては十分な形状を保持している。だが側縁などには使用された痕跡は認められない。

5 第5地点(第29図、図版5)

本地点は第4地点のさらに南の9E区において発見されたものである。確認調査時に9E-53グリッドで遺物が出土したため周囲を拡張し調査を続行したものの、それほどのは広がりは認められなかった。ここでは9E-53・63グリッドから計23点の石器群が出土しており、出土層位は第VI層から第VII層に及んでいた。石材は黒曜石(2・3・5)が主体で、硬質頁岩(1・4・6・7)が若干加わっていた。

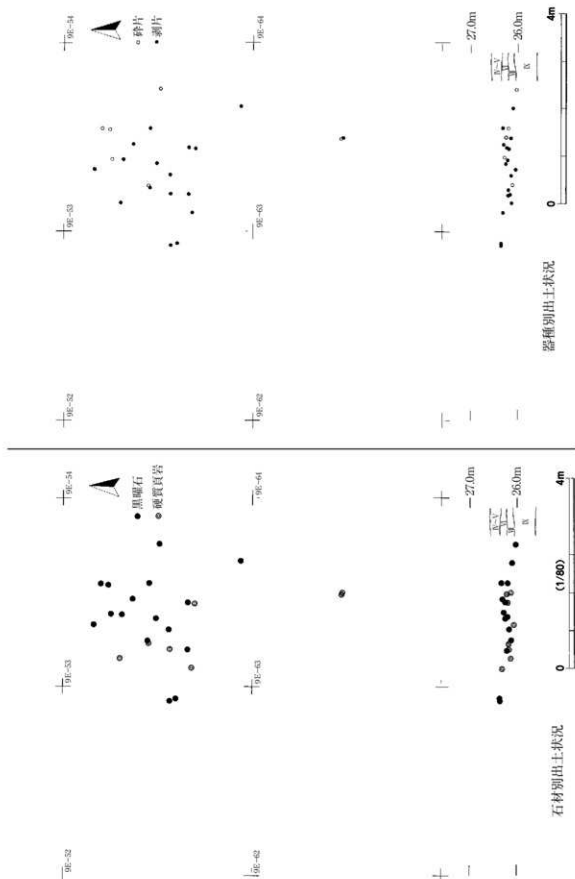
石器(第31図1~7、図版12) 1は断面三角形を呈したいわゆる極状剥離によって剥離された剥片である。左側縁には全体に調整剥離が施されている。2・3・4では使用の痕跡はみられない。5は同一グリッドから出土した小剥片が接合したものである。6は下端部に2~3回の整形剥離を施しており、側縁には若干刃こぼれ痕が確認できる。石器として使用されたものであろう。7は略円形を呈した薄い剥片で、右側縁では湾曲したような刃こぼれがみられる。おそらく使用によって生じたものであろう。

6 単独出土の石器群(第31~34図、図版6)

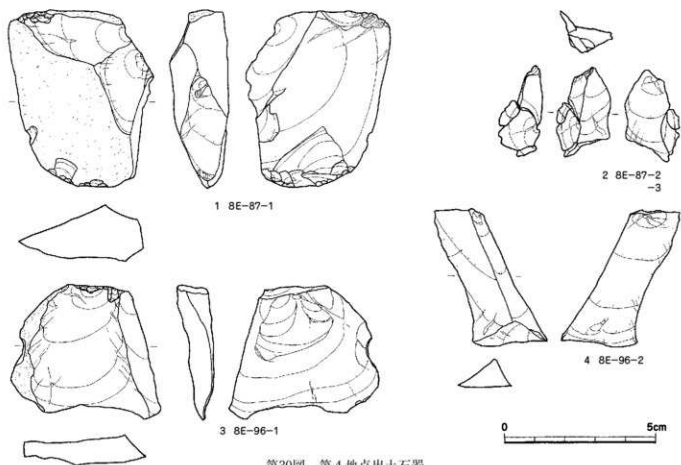
本遺跡では8地点から単独で剥片が出土した。以下、7点について簡単に説明を加えておきたい。

石器(第31図8、第35図1~6、図版10)

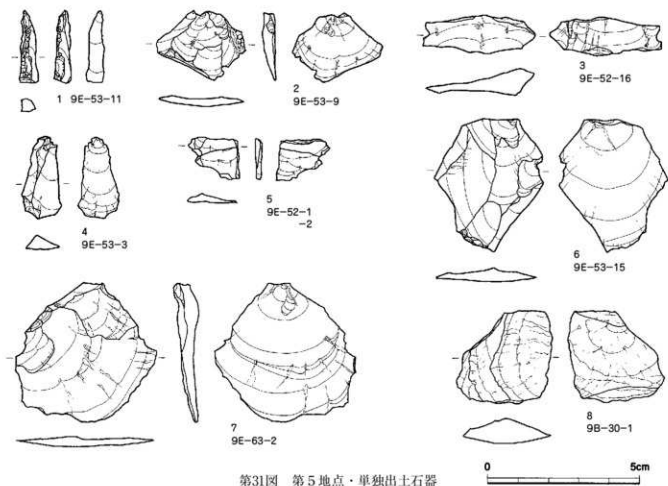
8は9B-30グリッドの第IV層から第V層中で出土した剥片で使用の痕跡は認められない。1は5G-



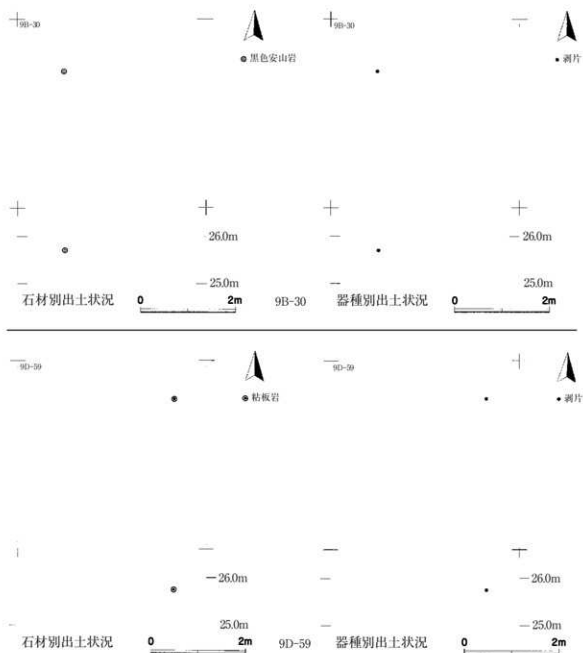
第29図 第5地点石材・器種別出土状況図



第30图 第4地点出土石器

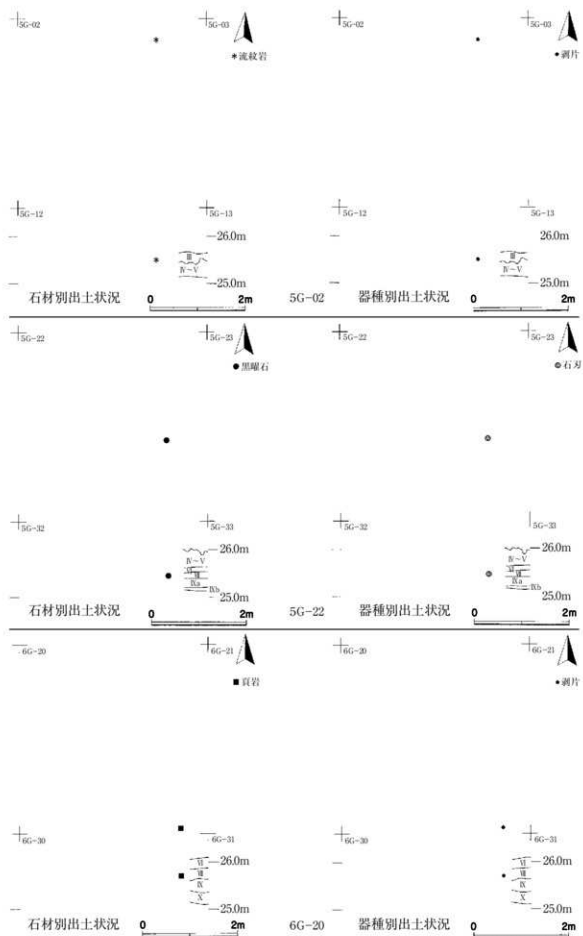


第31图 第5地点·单独出土石器

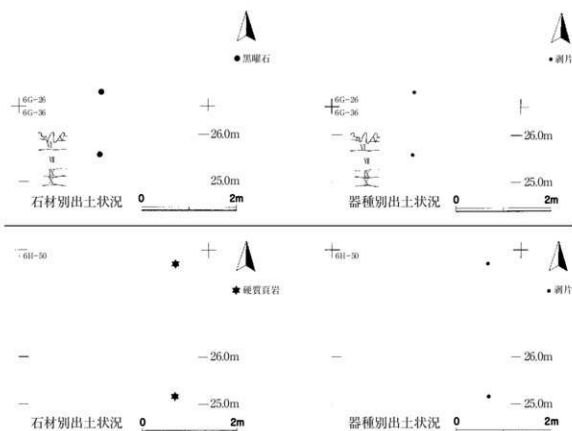


第32図 単独出土石器石材・器種別出土状況図(1)

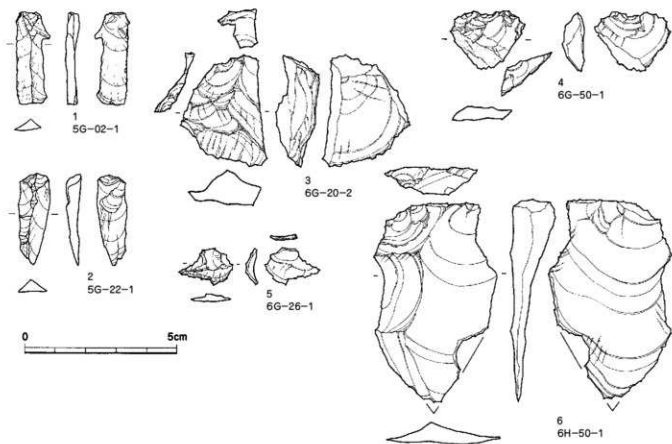
02グリッドの第Ⅲ中で出土した剥片である。下部は折断され、小さいながらも石刃状に剥離された剥片で微細な剥離痕がみられる。2は5G-22グリッド第Ⅵ層から第Ⅶ層間で出土したものである。小型の石刃で打点部は削除されている。3は6G-20グリッドの第Ⅶ層から出土した剥片で縦方向に折断されている。石器素材となるような形状を有しているが加工は認められない。4は6G-50グリッドで一括遺物として取り上げられたチャート製の剥片である。5は6G-26グリッドで第Ⅶ層から出土した小剥片である。6は6H-50グリッドの第Ⅲ層中から出土した大型剥片で左の細線では刃こぼれが観察できる。石器として使用されたものであろう。なお、9B-30・9D-59グリッドから出土した小剥片についての図化は省略した。



第33图 单独出土石器石材・器種別出土状況图(2)



第34図 単独出土石器石材・器種別出土状況図（3）



第35図 単独出土石器

第3章 縄文時代

第1節 概要

本遺跡において、確実に縄文時代の遺構と認定できるものには早期の炉穴群のほかにも陥穴と土坑がある。それらの多くは土器の散布が集中的に認められた4H区、3I・4I区、3J区に所在しており台地の先端部にあたる。また、3J区では黒曜石の剝片・砕片が土器とともに集中して出土し、この一帯が石器製作跡でもあったことが判明した。このように住居跡は検出されなかったが、縄文期における人びとの活動の中心地であったことが今回の調査により理解できた。なお、この地点で発見された遺構は炉穴27か所38基、土坑23基となる。遺構に伴って出土した土器群についてみると、炉穴からの出土土器は条痕文系の土器群でも比較的古いタイプのものであり、器厚は1cm未満で、無文の深鉢形土器も存在している。一方、炉穴群と混在するように土坑が多数検出されているが、土坑から出土している土器は僅少で早期の沈線文系、条痕文系のほかに後期の土器群が若干みられる程度であった。また、陥穴は計5基が確認された。調査区でいえば9I・9G区などにあたる。炉穴群の所在する場所からは離れており、位置的には遺跡の中央部に近い平坦地で検出されている。

第2節 遺構と遺物

1 炉穴（第39・40図、図版13・14・20）

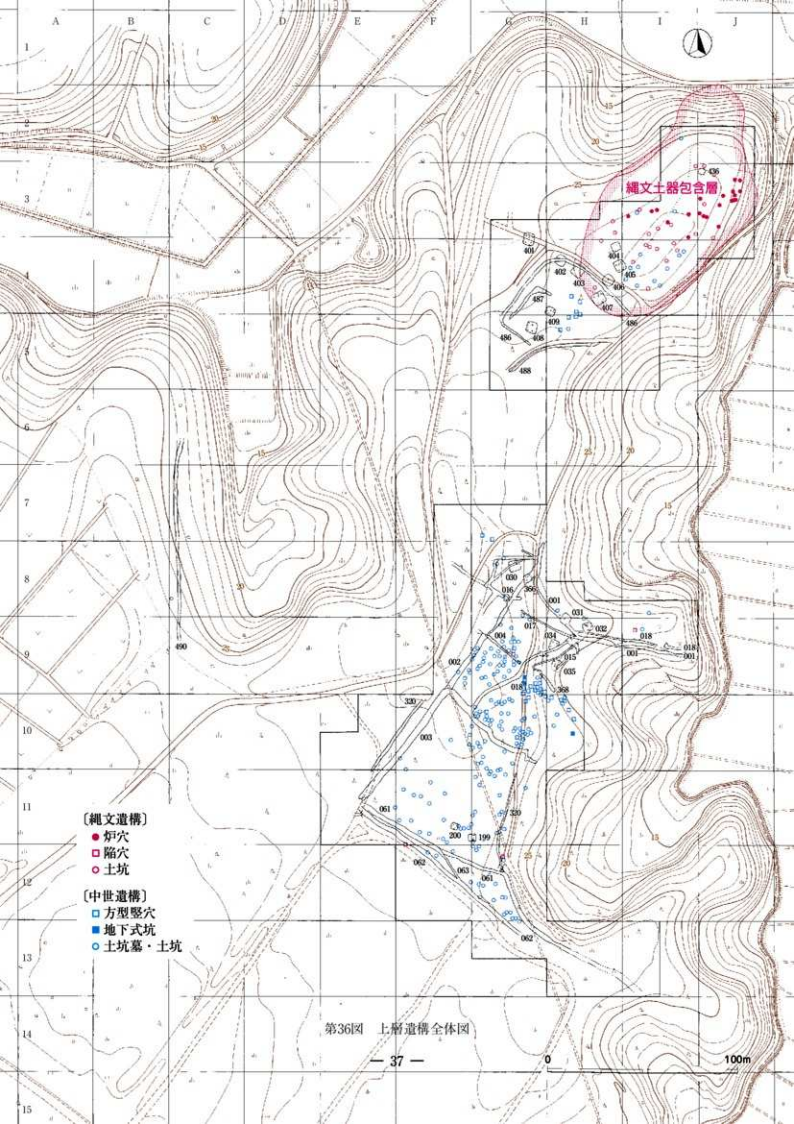
炉穴群は、第36図に示したように、本遺跡の北側台地先端部の3I区や3J区において土坑群とともに集中的に検出されたものである。住居跡の存在は確認されなかったものの、小集団ではあるが当時の人びとが一定期間生活していた痕跡を示すものとなろう。また3J区は、地形的にもと台地斜面部にあたることと後世の開墾等により遺構や遺物包含層も遺存状態が良好ではなかったため、ここでは個別の炉穴については第2表にゆずり、複数の火床を有するものについてのみ説明を加えることとしたい。

437号 本跡は、本遺跡で検出された炉穴の中で最も複雑に重複していたものであり、計7か所に火床部が存在した。整理作業の段階でそれぞれの火床部を中央部に位置するものから逆時計回りにA～Gとした。そこで火床上での堆積土を観察することにより新旧関係を確認すると、C・E→D、A→B・C、F→Gとなり、Aが最初に使用され、その後Aの周囲に火床部を移動させつつ、最終的にGを使用していたようである。

445号 本跡は扇状に広がるような不整形を呈し、壁面に沿い2か所で火床部が検出できた。焼土の遺存状態を観察すると、西壁にみられる火床部Aでは12cmほどの焼土層が認められたため火床部はB→Aの順に使用されていたようである。

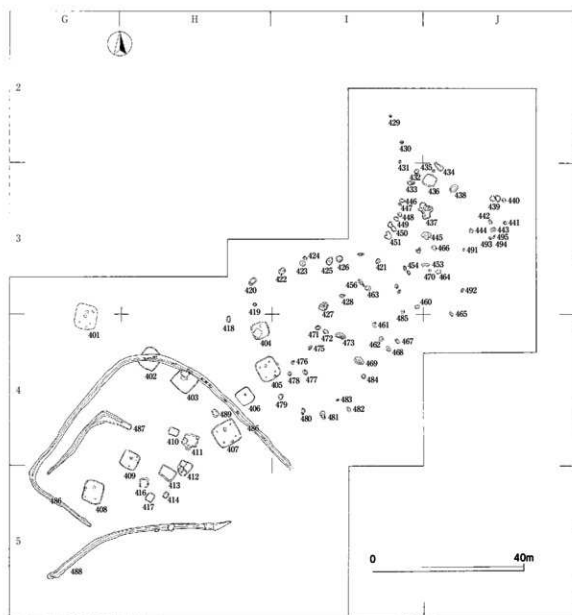
なお、遺物については繊維を微量に含む条痕施文の土器であり、図示は省略した。

456号 本跡は不整形ながらも長楕円形を呈しており、2か所に火床部が認められた。掘り込みは遺構確認面から13cmほどを計測し、火床部B上に堆積した覆土から口縁と底部を欠損する大型の深鉢形土器が出土した。このため土層断面では明確に新旧を認定できなかったが、一括土器の出土から火床部はA→Bへと引き継がれたものと思われる。



- 〔縄文遺構〕
- 炉穴
 - 陥穴
 - 土坑
- 〔中世遺構〕
- 方型竪穴
 - 地下式坑
 - 土坑墓・土坑

第36图 上層遺構全体図

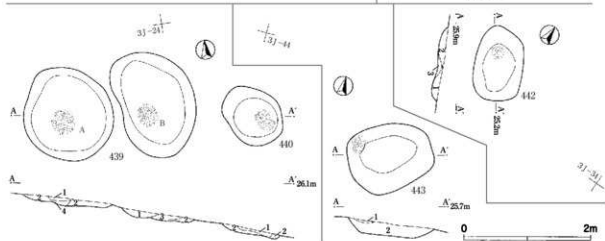
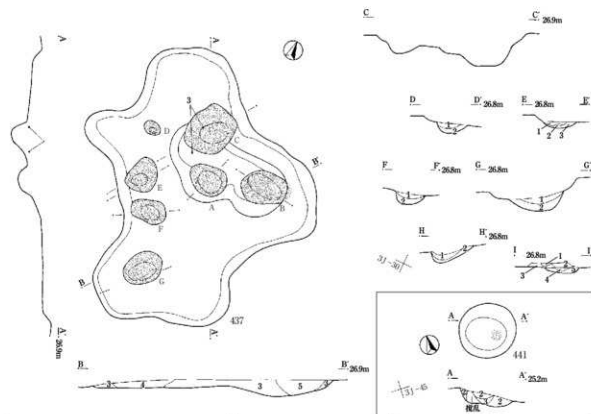
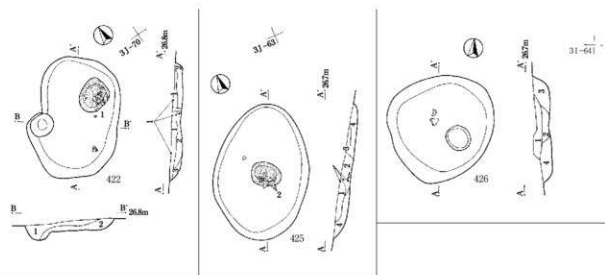


第37図 上層遺構部分図（1）

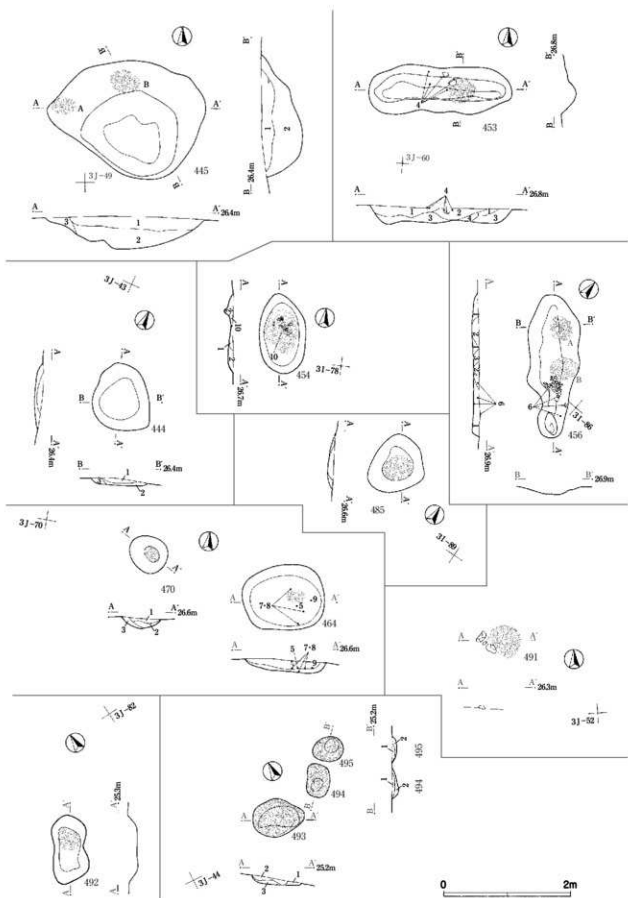
493～495号 3 J 区の斜面部から検出されたものであり、火床部のみの確認にとどまった。使用された時期の前後関係は把握できなかったが、3基の火床部の位置から継続的に使用されてきたものと考えられる。遺物は繊維を含んだ深鉢の胴部小片が1点出土したのみであった。



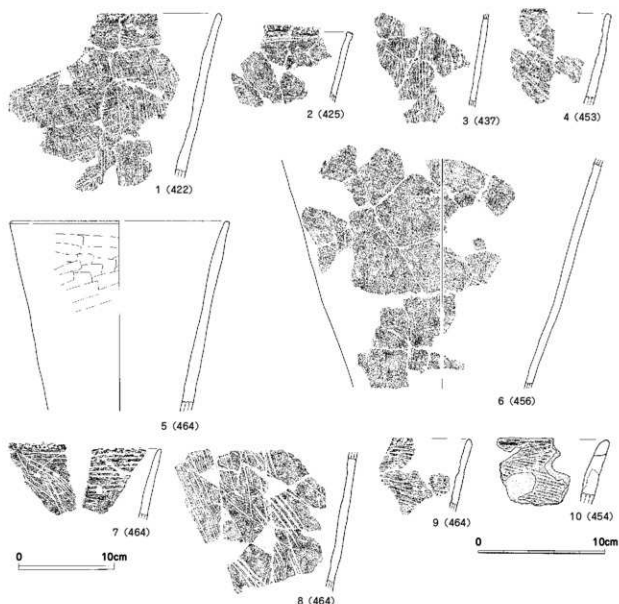
第38圖 上層遺構部分圖(2)



第39图 炉穴平·断面图(1)



第40图 茹穴平·断面图 (2)



第41図 炉穴出土土器

出土遺物 (第41図、第58図38、第61図66・68、第62図69・71、図版20)

土器 1は422号の火床部直上から出土したものである。口縁部を含む10数片が接合しており、その形状から胴部に段などはみられず、底部から緩やかに外反する深鉢形を呈する器形となろう。文様は口唇部に貝殻の背圧痕を巡らせている。器面では縦横に軽く条痕による整形がみられる。裏面でも条痕による整形は認められるものの繊維痕が著しい。器厚は10mm前後で、内外面の色調は赤褐色ないし暗褐色で胎土には繊維を多く含む。2は425号の火床部直上から小破片が10点ほど出土したもので、そのうち、口縁部を含めて7点が接合した。口唇部は平坦で1cmほどの間隔でヘラ状工具による刻目がみられる。さらにヘラによる整形は口辺の内外面にまで及ぶ。色調は淡い褐色で胎土には繊維が若干混入されている。器厚は5mm前後と薄く焼成も良好である。3は437号の火床部A・Cの上から出土した胴部片で、器面には条痕が密に施されている。裏面では条痕は認められず繊維痕が残るのみである。器厚は5mm～6mmと薄

く、胎土には若干の繊維が含有されている。色調は赤褐色を呈しており、この時期のものとしては焼成は良好といえよう。図示した土器以外に小破片が30数点出土している。しかしすべて胴部の小片であったため図示は省略した。4は453号の火床部周辺の覆土中から出土したものである。合計30点ほど出土したが、数点が接合したのみで器形を把握できるまでには至らなかった。口縁は丸味をもたせた整形で、器面は複雑な作りとなっている。色調は口辺部が淡い褐色で、胴部は赤褐色となる。胎土にはわずかに繊維を含む。6は456号火床部Bの直上から出土した胴部の大型片である。器面には文様がみられず、ヘラ状工具により丁寧な整形が施されている。裏面も滑らかに仕上げられており、胎土にはわずかな繊維と白色の鉱物・小石などがみられるものの精選された胎土といえる。器厚は8mmほどで焼成は良好である。色調は器面が褐色、裏面は赤褐色を呈している。5・7～9は464号の覆土下層から出土したもので、7・8は同一個体である。5は平縁の口縁で無文である。胴上半部及び口縁の裏面はヘラ状工具で顕著に整形されている。胎土に繊維はほとんど含まれていない。器厚は口縁部で4mm～5mm、胴部で10mm、底部付近では12mmを計測するしっかりした作りとなっている。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡赤褐色を呈している。7・8は胴部から口縁にかけて緩やかに外反する深鉢で、口唇部には刻目が認められる。器面は半截竹管を斜行させることにより文様を作出しており、口辺裏面では平行線状に用いている。器面の色調は褐色ないし黒褐色で胎土には繊維を含む。器厚は口縁部で5mm～6mm、胴部では10mm程度となる。9も8と同様な施文が認められるが、口唇部は磨滅しており、文様の有無についてははっきりしない。色調は被熱によるものか赤褐色を呈している。10は454号から出土した口縁部片である。器面には条痕が密に施されており、胎土には微量の繊維痕が認められる。裏面での整形は粗雑で凹凸がみられる。

以上が炉穴群から出土した土器群であるが、型的には器厚やその施文、あるいは繊維の含有割合などから概ね子母式に比定されるものであろう。

石器 炉穴群からは若干石器も出土しているため、ここで触れておきたい。38は426号から出土した磨石で約1/2が遺存したものである。下部部や側面では敲打痕も認められるため敲石としても使用されたものであろう。66・68は491号跡から出土しており、いずれも1kgを超える大きな礫である。使用痕などは認められないため台石のような用途が考えられる。69・71は422号から出土した自然礫である。69は、その石材・形状から石斧の素材と考えられるため図示した。71の表面は滑らかで特に使用の痕跡はみられない。滑らかな面を使用したものか、あるいは剥片石器の素材を想定したものとなろう。

2 陥穴（第42図、図版15・16）

陥穴と考えられる遺構は5基が確認されている。検出地点は調査区の南側で8G区以南となる。遺物についてみると、いずれも皆無であり遺構の性格を特徴づけるものといえよう。また、それぞれの堆積土について観察すると、検出面では黒色土あるいは褐色土が堆積し、底面の直上の堆積はロームブロックの混入する層で覆われていた。

以下、それぞれの概要を記しておく。

110号 本跡は12F-01グリッドに位置し、検出面からの深さは約1.3mを計測する。開口部の長径は約2.2m、短径は1.2mとなり、主軸方位はN-52°-Wを示す。側壁には若干凹凸がみられ、底面はやや丸みをおびる。底部での堆積は黒色土とともにロームブロックが多くみられた。

233号 本跡は12G-19グリッドにおいて検出され、深さは約1.5mを計測する。開口部の長径は約2.2m、

第2表 炉穴一覽

番号	検出地点	形状、長径・短径	焼土の範囲 焼土の厚さ	堆積土	備考
422号	3 I - 70	隅丸方形、190・120cm	54×45cm 85mm	1. 暗褐色土・ローム粒混入 2. 褐色土・暗褐色土混入 3. 褐色土	焼土上から一括土器出土。他に自然礫2点が出土
425号	3 I - 63	楕円形、218・150cm	48×39cm 63mm	1. 暗褐色土・ローム粒と焼土粒混入 2. 赤褐色土・焼土混入(多) 3. 褐色土・ローム粒混入(多) 4. 明褐色土・焼土混入(少)	火床面から土器出土
426号	3 I - 64	円形、85・84cm	170×170cm 90mm	1. 暗褐色土・ローム粒と焼土粒混入 2. 赤褐色土・焼土粒混入(多) 3. 褐色土・ローム粒と焼土粒混入 4. 褐色土・ローム粒(多)と焼土粒混入	磨石・雲母片岩の塊が出土
437号	3 J - 30	不整形、433・400cm	85~30×70~20cm 200~100mm	1. 暗褐色土・ローム粒と焼土粒混入 2. 暗褐色土・ローム粒と焼土ブロック混入 3. 褐色土・ローム粒混入(多) 4. 赤褐色土・焼土混入(多) 5. 暗褐色土・焼土混入(多)	火床部7か所、土器小片多数出土
439号	3 J - 24 A	円形、90・86cm B楕円形、162・120 cm	40×36cm 80mm 36×32cm 110mm	1. 暗褐色土・焼土粒混入 2. 暗褐色土・ローム粒と焼土粒混入 3. 暗褐色土・ロームブロック混入 4. 暗褐色土・焼土・焼土ブロック混入	
440号	3 J - 25	円形、104・84cm	35×28cm 130mm	1. 暗褐色土・焼土粒混入 2. 暗褐色土・ローム粒と焼土粒混入	
441号	3 J - 35	円形、90・86cm	20×18cm 80mm	1. 暗褐色土・焼土粒混入 2. 暗褐色土・ローム粒と焼土粒混入 3. 赤褐色土・焼土混入(多)	
442号	3 J - 34	楕円形、119・00cm	24×20cm 100mm	1. 暗褐色土・焼土粒混入 2. 暗褐色土・焼土と焼土ブロック混入 3. 暗褐色土・ローム粒混入	
443号	3 J - 44	楕円形、135・106cm	30×22cm ? mm	1. 暗褐色土・焼土粒混入 2. 暗褐色土・ローム粒と焼土粒混入	壁面が赤褐色に変色
444号	3 J - 44	不整形円形、106・90cm	65×55cm 80mm	1. 暗褐色土・焼土混入(多) 2. 明褐色土 3. 暗褐色土・ローム粒と焼土粒混入	
445号	3 J - 49	不整形楕円形、250・186cm	A40×26cm 59mm B50×36cm 120mm	1. 暗褐色土 2. 暗褐色土・焼土粒混入 3. 明褐色土・焼土混入(多)	壁面に接して火床部が2か所存在
446号	3 I - 28	楕円形、125・86cm	55×50cm 150mm	1. 褐色土 2. 暗褐色土・焼土粒混入 3. 暗褐色土・焼土粒混入(多)	図化省略
447号	3 I - 28	楕円形、80・58cm	20×16cm 70mm	1. 暗褐色土・焼土粒混入 2. 暗褐色土・焼土粒混入(多)	同上
448号	3 I - 38	不整形、112・97cm	45×30cm 200mm	1. 暗褐色土・焼土粒混入 2. 暗褐色土・褐色土混入	同上
449号	3 I - 38	楕円形、125・88cm	32×29cm 110mm	1. 褐色土・焼土と焼土ブロック混入 2. 褐色土・砂質土混入	同上
450号	3 I - 47 3 I - 48	楕円形、158・125cm 楕円形、165・115cm	65×50cm 110mm 57×55cm 115mm	1. 暗褐色土・焼土粒混入(多) 2. 褐色土	同上、2基の重複
451号	3 I - 27 3 I - 27	楕円形、158・125cm 楕円形、165・115cm	50×45cm 100mm 60×50cm 100mm	1. 赤褐色土・焼土混入(多) 2. 暗褐色土・ローム粒と焼土粒混入	同上、2基の重複
453号	3 J - 60	長楕円形、226・75cm	45×39cm 51mm	1. 暗褐色土・ローム粒混入 2. 暗褐色土・ローム粒と焼土粒混入 3. 赤褐色土・ローム粒混入 4. 赤褐色土・焼土混入(多)	覆土中から大型土器片出土
454号	3 I - 68	楕円形、127・72cm	72×54cm 60mm	1. 暗褐色土・焼土混入(多) 2. 暗褐色土・ローム粒と焼土粒混入	火床部直上から口縁部片出土
456号	3 I - 75	長楕円形、226・81cm	A42×33cm 100mm B46×37cm 90mm	1. 暗褐色土・ローム粒混入 2. 暗褐色土・焼土混入(多) 3. 暗褐色土・焼土粒混入	火床部2か所、覆土中より大型土器片出土
464号	3 J - 71	楕円形、129・103cm	28×19cm 10~20mm	1. 暗褐色土・ローム粒混入 2. 暗褐色土・ローム粒と焼土粒混入	覆土下層より口縁部大型片出土
470号	3 J - 71	円形、63・56cm	28×20cm 22mm	1. 暗褐色土・ローム粒と焼土粒混入 2. 暗褐色土・焼土混入(多) 3. 暗褐色土・ローム粒混入	
485号	3 I - 98	不整形円形、95・84cm	48×38cm 10~20mm	1. 暗褐色土・焼土粒混入 2. 褐色土・暗褐色土混入	
491号	3 J - 42		54×47cm		火床部のみ遺存。焼土に隣接し台石2点が出土。
492号	3 J - 81	楕円形、110・56cm	90×62cm 100mm		覆土中より土器片出土
493号	3 J - 34		82×61cm 100mm	1. 赤褐色土・焼土層 2. 灰褐色土・焼土ブロック混入 3. 灰褐色土・焼土粒混入	火床部のみ遺存
494号	3 J - 34		51×36cm 95mm	1. 灰褐色土・焼土ブロック混入 2. 灰褐色土・焼土粒混入	火床部のみ遺存
495号	3 J - 34		48×40cm 00mm	1. 灰褐色土・焼土ブロック混入 2. 灰褐色土・焼土粒混入	火床部のみ遺存

短径は1.4mとなり、主軸方位はN-13°-Wを示す。東の側壁は一部が崩壊し大きく開く部分もあるが、その他は垂直に近い状態で底面へと続く。底面での堆積土はロームブロックが主体を占める層となっている。

361号 本跡は9G-45グリッドに位置し、中世の土坑（508号）や溝によって一部が削平されているもののほぼプランは把握できた。検出面からの深さは約1.1mを計測し、開口部の長径は約2.7m、短径は約1.4mを測る。主軸方位はほぼ南北を指す。側壁は開口部に向かって大きく開き、底面付近では垂直に近い立ち上がりを示す。底面での堆積層は剥落したローム層によって占められていた。

369号 本跡は8G-68・78グリッドをまたぐように位置し、検出面からの深さは2.2m以上を計測する。開口部の長径は約1.5m、短径は1.4mを測り楕円形を呈する。主軸方位はN-41°-Eを示す。開口部は崩落により若干外反するようであるが、側壁は一部に凹凸が認められるものの垂直に近い立ち上がりを示す。底面の確認までにはいたっていないが最下層ではロームブロックが多く含まれていた。

372号 本跡は9I-11グリッド内で検出されたもので、検出面からの深さは約1.5mを計測する。開口部の長径は約1.6m、短径は約1.2mを測り、主軸方位はN-82°-Eを示す。側壁はほぼ垂直に立ち上がり、開口部では大きく開く。底面はやや傾斜を有するが平坦といえよう。堆積土の下半部ではロームブロックが多くみられた。

3 土坑（第43～46図、図版15・16・20）

縄文時代に属する土坑は、炉穴群と重複するような分布状況（第36図）で検出されている。加えて4I区周辺では後述する中世遺構群も検出されており複雑な重複関係を呈していた。このため土坑群の調査は明確に土坑と判別しがたいものや植物根による影響を受けたものなどは除外しつつ整理をすすめてきた。その後、作業の最終段階で再度精査した結果、土坑として認定できた遺構は23基となった。

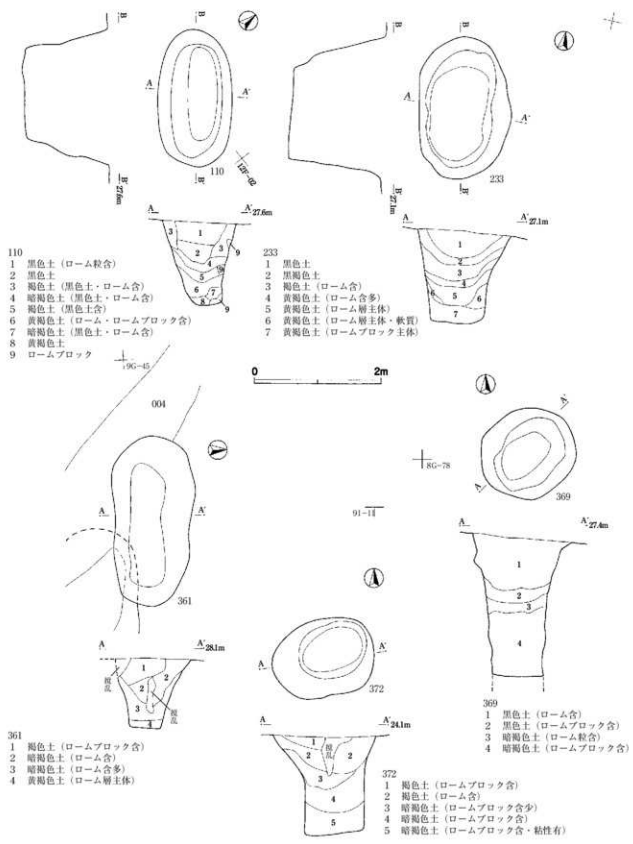
また土坑群から出土した土器についてみると、早期及び後期が主体を占めており、他の時期の土器はわずかなものであった。そこで土坑の概要については第3表に譲ることとし、ここでは土坑内から出土した土器について記載することとしたい。

007号 1は覆土中から出土したもので底部に近い破片である。器面は赤褐色でヘラ状工具により整えられている。若干繊維の混入が認められる。条痕文系でも古式の様相がうかがえる。

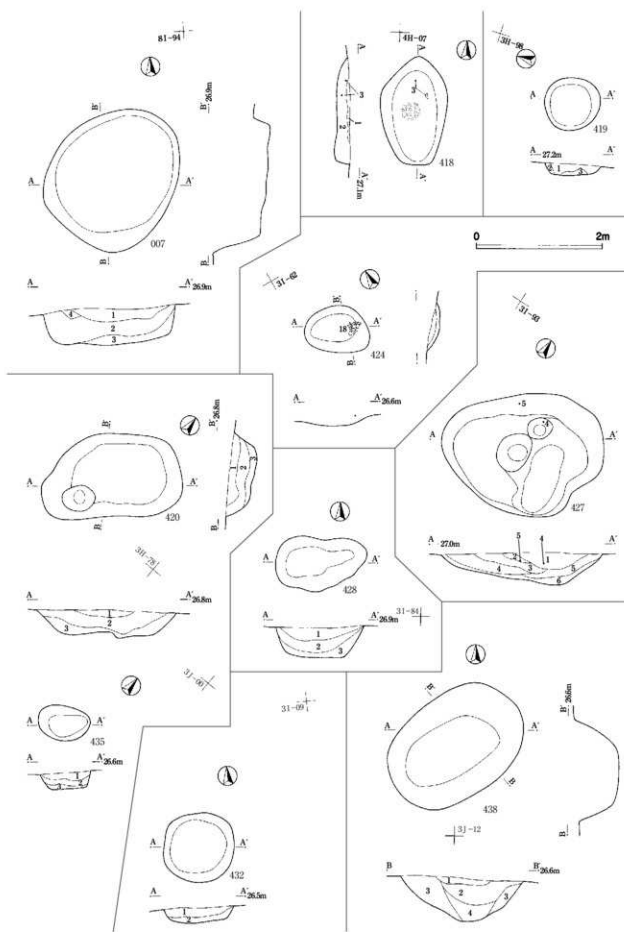
418号 2点出土しており、2は口縁部片である。口唇部の作りや口辺の縄文施文から夏島式となろう。3は図示したように覆土下層から出土した尖底土器の底部で、器面の色調は1に近く、胎土にはわずかに繊維が含まれる。内面はスス状の炭化物が付着しており煮滷具として使用していたことがうかがわれる。底部のため文様などはみられないが子母口式となろう。本跡に伴う可能性が強い。

424号 18は大型の口縁部であり、接合はしなかったもののほかに胴部以下の破片が10点ほど出土している。東側の側壁部分で出土しており確実に本跡に伴う土器としてよいであろう。器面は軽く条痕で整形され、口唇部には斜め方向に縄文原体を押捺した痕跡が認められる。器内外面は褐色ないし赤褐色を呈し、胎土には繊維が含まれる。縄文原体の使用から子母口式となろう。

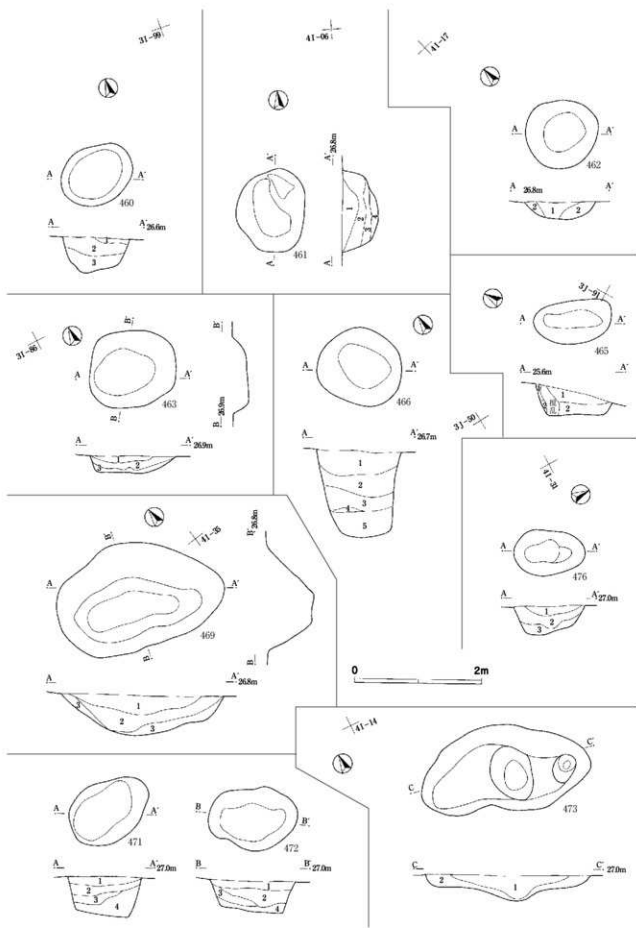
427号 本跡からは7点の小破片が出土した。いずれも後期の加曾利B式であり、うち3点を採拓した。4～6は図示したように覆土上層からの出土であるが、胎土・色調・内面の調整などから同一個体と考えられた。4の口縁部片にはヘラ状工具による連続した押し引きが認められる。以下は粗い縄文地の上を斜



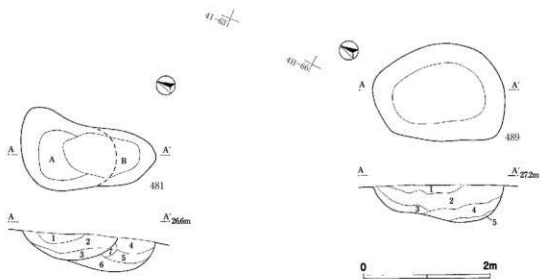
第42図 陥穴平・断面図



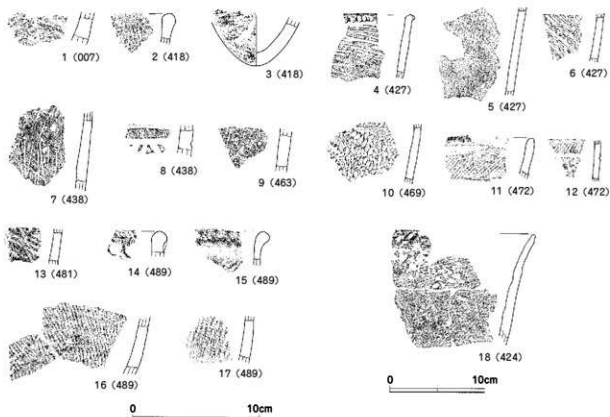
第43图 土坑平·断面图 (1)



第44图 土坑平·断面图(2)



第45图 土坑平·断面图(3)



第46图 土坑出土土器

行する浅い沈線が覆う。5は底部に近い部分となろう。文様は認められず丁寧な調整痕のみとなる。土器の出土状況から積極的に本跡に伴う土器とはいえないが、遺構との結びつきを示唆する土器と考えられる。

438号 本跡では4点の土器片が覆土中から出土しており、2点を採拓した。7は器面に僅かに条痕が残る。色調は器面が褐色で、裏面は黒褐色を呈する。胎土には若干繊維の混入が認められた。8は小破片であるが太い沈線が特徴的である。器厚も10mmと厚く、堅緻な焼成で製作されている。繊維の混入は認められず、特徴的な沈線から田戸下層式となろう。いずれも本跡に伴うものとは断定できない。

463号 9は胴部片であり表裏面ともに淡い褐色を呈し、内部は焼成が不十分であろうか黒褐色となる。文様は認められず、胎土には繊維を含む。

469号 本跡では3片の土器片が出土している。若干繊維を含む無文の胴部小片と加曾利B式期が2点みられ、うち1点のみ図示した。10は器面にみられる縄文の施文から紐線文系の深鉢の胴部片である。いずれも覆土内からの出土であり、本跡との関連は希薄となろう。

472号 本跡では後期に属する土器片が覆土内より5点出土しており、うち2点について採拓した。11は口縁部片で器面にはLRの縄文が横方向に施文されている。色調は淡褐色で焼成は良好である。12は沈線間に前者同様の縄文がみられる。器厚は5mmと薄い。いずれも小破片であるが本跡と近い時期のものと考えたい。

481号 本跡は土坑2基が重複したもので、13はBの覆土中から出土している。小破片であり本跡との関連は希薄といえよう。器面は条痕で整形され、色調は内外面ともに淡褐色である。器厚は5mm～6mmと薄い。

489号 本跡では覆土2層から4層にかけて5点の撚糸文系土器が出土している。14は口縁部片で、口唇部には縄文、その直下には指頭あるいは円形の棒状工具による押捺が認められる。15は斜方向にLRの縄文が施文されており、ともに井草I式となろう。16は接合した底部近くの破片でRLの縄文が縦方向に施文されている。器厚は上部で6mm、下部で8mmを計測する。17も底部近い破片である。節の明確なLRの縄文が施文されている。色調は赤褐色で、ほかは褐色を呈する。焼成はいずれも良好で、胎土には砂粒や微細な小石を含んでおり同時期の所産と考えられる。このため本跡は撚糸文期の土坑と考えてよいであろう。

4 縄文土器包含層と石器製作跡（第36図）

本遺跡では前述したように台地北方の先端部分で多量の土器群が出土しており、土器集中地点としてとらえて遺構に準ずるような方式で調査を進捗させていった。この結果、土器については次項に記したように「グリッド出土遺物」として、その内容を記載したが、ここでは土器群のほかに石器製作を想起させるような剥片・砕片等が出土しているためその概要を記しておくたい。

剥片・砕片等が集中的に出土した地点は3J区であり、特に集中した3J-31グリッドでは黒曜石の小片が123点出土している。次いで3J-11グリッドで18点、同10グリッドで13点が検出され、総数では185片を確認できた。その内訳は黒曜石157点のほかにチャート26点、メノウ2点の構成であった。そこで成品の出土地点についてみると、この周辺から出土した石鏃等の剥片石器はほとんどみられずチャート製の楔形石器が2点と少ない。一方、製作具の一種である敲石は数点出土しており石器製作を裏付けるかのようである。また土器の出土をみると、3J区からは早期の条痕文系土器群と後期の土器群が出土しており、この時期のいずれかに伴うものと考えられる。

第3表 土坑一覧

番号	検出地点	形状、長径・短径	主軸方位	堆積土	備考
007号	8 I - 94	楕円形、230・199cm	N-42°-E	1 黒褐色土 2 暗褐色土 3 褐色土 4 黄褐色土 (ローム含)	底面は北に向かって緩やかに傾斜。覆土中から条痕文系土器の小片出土。
418号	4 H - 07	長楕円形、172・106cm	N-2°-W	1 暗褐色土 (ローム含) 2 褐色土 (ローム含)	覆土上部に焼土が堆積。覆土中から条痕文系の尖底部出土。
419号	3 H - 98	円形、88・82cm	---	1 暗褐色土 (炭化物含) 2 黄褐色土 (同上) 3 暗褐色土 (ロームブロック含)	
420号	3 H - 78	不整楕円形、224・130cm	N-40°-E	1 暗褐色土 (ローム含) 2 暗褐色土 (ローム含少) 3 黄褐色土	側壁に沿って底面から深さ20cmのビット検出。
424号	3 I - 62	楕円形、103・74cm	N-65°-W	1 暗褐色土 (ロームブロック含少) 2 暗褐色土 (ロームブロック含)	覆土上層から条痕文系土器出土
427号	3 I - 93	不整楕円形、258・196cm	N-62°-E	1 褐色土 (ローム粒含多) 2 暗褐色土 (ローム粒含多) 3 暗褐色土 (ローム粒含少) 4 黒褐色土 (ローム粒含少) 5 黒褐色土 (ローム粒・ロームブロック含少) 6 褐色土 (ローム粒含多)	底面下15cmのビットを2か所で検出。覆土中から加曽利B式土器が数点出土。
428号	3 I - 84	不整楕円形、146・85cm	N-81°-E	1 暗褐色土 (ローム含) 2 暗褐色土 (ローム含少) 3 暗褐色土 (ローム粒・ロームブロック含)	
432号	3 I - 09	円形、110・110cm	---	1 暗褐色土 (ローム粒含少) 2 褐色土 (ローム粒・炭化物含少)	
435号	3 J - 01	楕円形、83・55cm	N-49°-E	1 暗褐色土 (ローム粒・焼土粒含少) 2 褐色土 (ローム粒含多) 3 暗褐色土 (ローム粒含少)	
438号	3 J - 12	楕円形、230・161cm	N-55°-E	1 暗褐色土 (ソフトローム含少) 2 暗褐色土 (ローム粒・ロームブロック含) 3 暗褐色土 (ソフトローム・ロームブロック含) 4 暗褐色土 (ローム粒・ロームブロック含)	覆土中から沈線文系・条痕文系土器の小片が出土。
460号	3 I - 99	楕円形、118・94cm	N-72°-E	1 明褐色土 (ローム含) 2 暗褐色土 (ロームブロック含) 3 暗褐色土 (ロームブロック含少)	
461号	4 I - 06	不整楕円形、138・108cm	N-5°-E	1 暗褐色土 (ローム含) 2 暗褐色土 (ローム・ロームブロック含) 3 黒褐色土 (ローム・ロームブロック含) 4 黒褐色土 (ローム・ロームブロック含多)	

462号	4 I - 17	円形、112・114cm	---	1 黒褐色土 (ローム含) 2 暗褐色土 (ローム・ロームブロック含)	
463号	3 I - 86	隅円方形、135・122cm	N - 64° - W	1 暗褐色土 (ローム・ロームブロック含) 2 暗褐色土 (ローム含) 3 褐色土 (ローム含)	
465号	3 J - 91	楕円形、122・68cm	N - 28° - W	1 褐色土 (ローム含) 2 暗褐色土 (ローム・ロームブロック含)	
466号	3 J - 50	楕円形、135・118cm	N - 31° - W	1 暗褐色土 (ロームブロック含多) 2 暗褐色土 (ローム・ロームブロック含) 3 暗褐色土 (ローム・ロームブロック含多) 4 黒褐色土 (ロームブロック含) 5 暗褐色土 (ローム・ロームブロック含多)	
469号	4 I - 35	不整楕円形、 268・168cm	N - 65° - W	1 暗褐色土 (ローム含) 2 暗褐色土 (ローム含少) 3 褐色土 (ローム含多)	覆土中から加曾利B式期の小片出土
471号	4 I - 02	楕円形、138・98cm	N - 76° - E	1 暗褐色土 (ローム含) 2 黒褐色土 (ローム含) 3 暗褐色土 (ローム・ロームブロック含) 4 暗褐色土 (ロームブロック含多)	
472号	4 I - 13	不整楕円形、 141・100cm	N - 62° - W	1 暗褐色土 (ローム・ロームブロック含) 2 暗褐色土 (ローム含) 3 暗褐色土 (ローム・ロームブロック含少) 4 暗褐色土 (ローム・ロームブロック含多)	覆土中から加曾利B式期の小片出土
473号	4 I - 14	不整長楕円形、 274・136cm	N - 76° - W	1 黒褐色土 (ローム含) 2 暗褐色土 (ローム含)	底面下15cmほど掘り込んだピット2か所を検出。
476号	4 I - 31	楕円形、112・72cm	N - 29° - E	1 暗褐色土 (ローム含) 2 明褐色土 (ローム含多) 3 褐色土 (ローム・ロームブロック含多)	
481号	4 I - 63	不整楕円形、 212・125cm	N - 22° - W	1 黒褐色土 (ローム含) 2 暗褐色土 (ローム・ロームブロック含多) 3 暗褐色土 (ローム・ロームブロック含少) 4 明褐色土 (ローム含多) 5 褐色土 (ローム含) 6 暗褐色土 (ローム含) 7 ロームブロック	2基の重複。堆積土からB→Aの順となる。
489号	4 H - 66	楕円形、210・155cm	N - 26° - W	1 黒褐色土 (ロームブロック含) 2 暗褐色土 (ロームブロック含) 3 褐色土 (ローム含) 4 暗褐色土 (ロームブロック含) 5 暗褐色土 (ローム粒含)	覆土中から井草式の口縁部片が出土。

5 グリッド出土遺物

(1) 土器・土製品 (第47~54図、図版17~19・21~28)

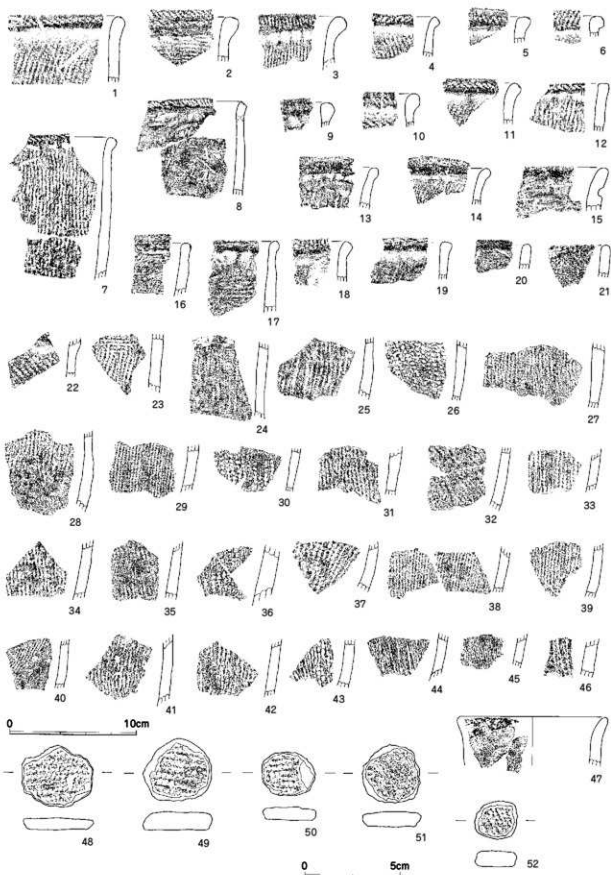
本項では遺構に伴うことなく、遺物包含層を中心としてグリッド出土遺物として取り上げた土器・石器について述べることにする。前述したように、これらの遺物の大半はH4区、I3・4区、J3区から集中的に出土しており、時期的にも早期の燃糸文系から晩期の安行期に至るまで各型式の土器群がみられ、断続的にせよ縄文時代をとおして台地先端部に活動の痕跡を認めることができた。

早期 早期の土器群では燃糸文系・沈線文系・条痕文系の各土器群が出土しており、最多の出土は炉穴と関連する条痕文系となり、次いで燃糸文系、沈線文系の順となる。

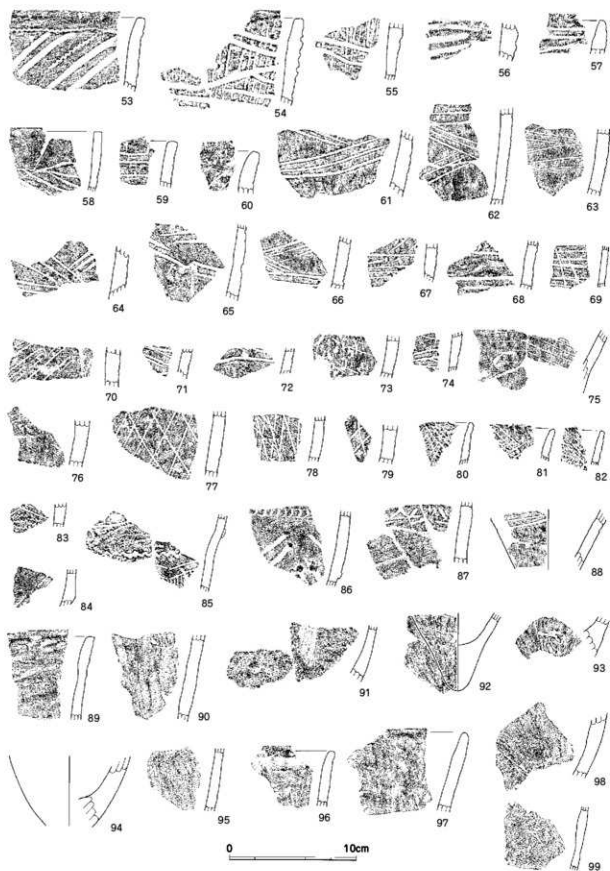
燃糸文系土器(1~52)は、4I区を中心として4H・3I区などに広がりつまばらに分布していた。1~21は口縁部片である。これらの多くは口唇に縄文施文が認められ、原体はRLが主体となっているようである。また、なかには2・10・17・23のように口縁直下に横方向の縄文帯が施文した古い様相を備えたものも一部にはみられる。3・9では指頭により押捺を施しており、15は器面を途中まで穿孔している。型的には井草I式に属するものもあるが、井草II式に属するものが主体となろう。胴部片では原体が多様であり、節の明確なもの(22・23・26)や重複するように施文するもの(25・27・44)、節が小さく密なもの(29・38・40)や明らかに燃糸施文(45・46)など多彩となる。なお、26・30と29・38・39は胎土・色調・原体などから同一個体と思われる。47は、口径が約8cmの小型品で1/8程度の遺存であった。4I~50グリッドから出土したもので器面には文様はみられない。小型品であるにもかかわらず、内外面の作りは丁寧であり、色調は淡褐色を呈し胎土も精選され焼成も良好である。48~52は土器片の周囲を打ち欠いた円板形土製品で胎土や施文された縄文から燃糸文系のもので理解できる。

沈線文系土器(53~99)は、3J~3Iグリッドとその周辺にまとも出土したが、分布の範囲は狭いものであった。これらは沈線により主文様を描き、貝殻腹縁・半截竹管などでさらに装飾を施している。型的にみれば田戸下層式が主となり、若干ながら田戸上層式も出土している。また量的には少ないが、無文の深鉢も存在していた。53~56は太い沈線で力強く主文様を描き、53は貝殻腹縁を加えている。口縁は平縁で、その直下に貝殻腹縁を一周させている。この2種の施文具の使用は田戸下層式の典型といえよう。54・55は幅の異なる2種の沈線を用いたもので同一個体となろう。56は幅広の沈線を使用した口辺部片である。57~79までは細い沈線を斜行あるいは格子状(77~79)に駆使して文様を描いている。80~82は、口径の推定が8cmほどの小型品で同一個体となる。数本の斜行する沈線を組み合わせ文様を構成している。83・85~87は施文具に貝殻腹縁や半截竹管などを加え、より文様としての効果を描出している。複数の施文具や文様構成から田戸上層式と見做される。85はやや膨らみを持たせた胴部上半部で、小さな粘土塊の貼付や貝殻腹縁の押捺とともに沈線による一条の鋸歯文が施されている。86は半截竹管による連続爪形文や太い沈線が特徴的である。87は胴下半部で沈線による三角文を描く。一方、89は平縁の口縁部で文様は認められず、表裏面はヘラ状工具による整形後に縦方向に器面調整を施しており、精製土器を想起させるような作りである。また96・97も無文であるが、胎土には繊維が若干混入されている。91~94・98は底部片であり、いずれも尖底としてよいであろう。90・95~99には胎土に少量の繊維を含有している。これらの土器群は総じて焼成は良好で、色調は赤褐色ないしは淡褐色を呈するものが多い。

条痕文系土器(100~153)は、3I・4I区や3J区では遺構としての炉穴も存在していることもあり濃密な分布を示していた。ここでの土器群は器面に条痕が施されるタイプが主体となり、他の施文具を使



第47図 グリッド出土土器(1)

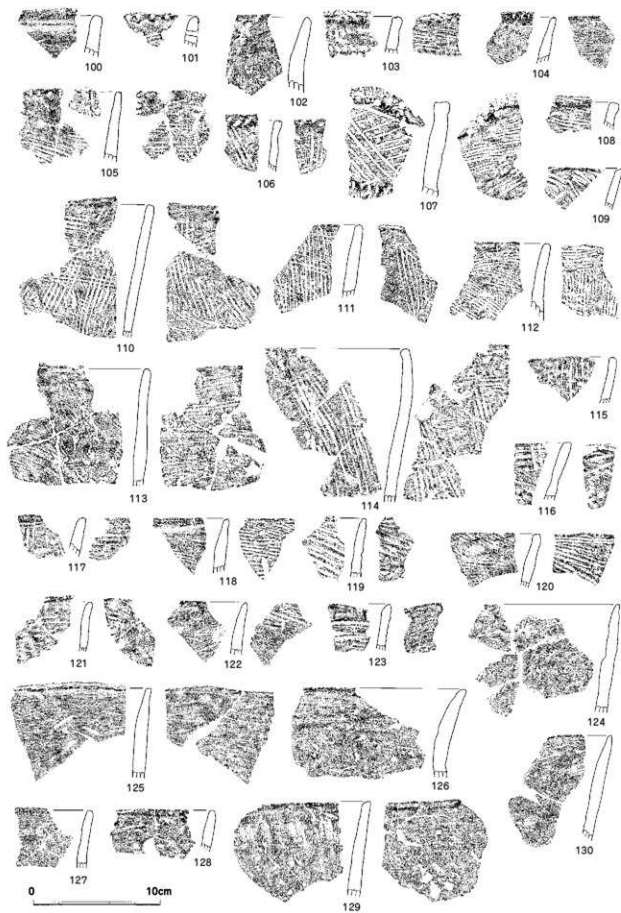


第48図 グリッド出土土器(2)

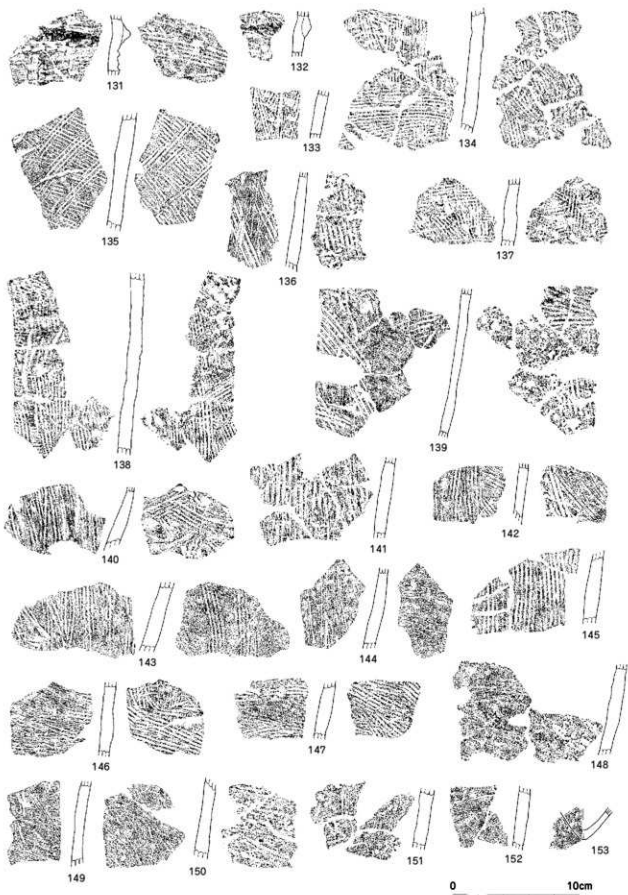
用しているものは少ない。無文土器も少なからず存在していたようである。また器形についてみると、平底はみられず、尖底が1点のみ出土しているだけである。さらに植物繊維の混入度合では概して少ないことがあげられる。そのため掲載した土器の大半は子母口式に属するものと考えられる。100~130は口縁部片である。100は平縁の口縁部である。口縁に沿って幅2mmほどの微隆起帯が貼付されている。器面はヘラできれいに仕上げられている。胎土には繊維を含んでいる。107は波状口縁となり、口唇部は平坦に仕上げられている。口辺は左右に斜行する沈線で充填され、刻目を施した隆帯によって区画される。裏面は条痕によって整形されている。胎土には繊維が多く含まれる。その文様構成から野島式となろう。102~106・108・109の口唇部には指頭による圧痕やヘラによる刻目が認められる。101の穿孔は焼成前のものであり2か所にみられる。103では棒状工具の押捺で器面を飾る。108~123の器面は条痕のみが施されたもので、123を除き表裏面に認められる。108・109では口唇部にまで及ぶ。繊維の含有についてみると、109・113は僅少であり、114には多くみられる。このため101・103・109・114などは繊維の含有量から茅山下層式の可能性も否定できない。124~130は無文である。125は口唇部が平坦で器厚も3mmと薄い。器内外面は刷毛状工具できれいに整形されている。器面には希に小枝のような木片の痕跡も認められる(125・126)が、胎土に含まれている繊維の量は概して少ない。型式的には子母口式とみてよいであろう。131~152は胴部片である。131・132のみに文様が認められる。隆帯状に貼付した粘土紐とヘラ状工具による押し引きは茅山下層式の特徴を示すものといえよう。胎土には繊維も多く含まれている。133~147・149は条痕のみによって施文されたもので、多くは表裏にもみられる。148・150~152は底部に近い破片で無文となる。繊維を含むが多いとはいえない。153は小型品の尖底で、器厚は6mmと薄い。器面は褐色で丁寧に仕上げられており、内面は黒色を呈し繊維を多く含む。

前期 前期に属する土器の出土は量的には少なかった。分布についてみると、3 I 区で末葉に位置づけられる一括土器が出土し、4 I 区では前半の土器が若干みられた。154~162は前半に位置づけられるもので、154~156には粘土塊の貼付がみられ、関山式の特徴をよく表している。157~161は縄文による施文で、157・160はR L、158はLの原体を横方向に、159は原体Lの撚糸を3条単位で横方向に回転させている。162の器面には貝殻腹縁が右方向に移動しつつ施文されており、胎土には明確に繊維の混入が認められる。器面の色調は赤褐色を呈し、内面は黒色となる。繊維の混入という点から黒浜式併行の時期となろう。163~164は後半期の所産となる。163は口縁部の小片で、口縁と平行するように原体Lの撚糸を押し付けている。これは前期末葉にしばしばみられる施文法である。164は底部を欠損するが、ほぼ器形を想定できるまで接合できた。3 I -97グリッドを中心に、同86・87・96・98グリッド及び4 I -07・08グリッドなどに散乱したような状態で出土した。周辺には縄文期の土坑などが検出されているが、土器との関連をうかがわせるような遺構は認められなかった。推定口径34cmを計測する大型の深鉢であり、胴上半部をL Rの縄文が覆う。縄文の施文は口唇部にまで及ぶ。器面の色調は淡褐色を呈し、一部に焼成によるものか黒褐色部分が残る。裏面は褐色で、ヘラによりきれいに整形されている。器厚は10mmとやや厚い。胎土には微細な小石を含むが、よく精選されている。胎土に繊維がみられないことや口唇部にまで縄文施文が認められるところから前期末葉に位置づけられよう。

中期 中期前半の土器(165~175)も若干出土している。出土地点は溝や古墳時代の住居跡などであり、遺構に伴うものはみられなかった。165~167は結節縄文で施文されているもので五領ケ台式の特徴といえよう。167の基底部は外に膨らむような作りとなる。胎土には石英や小石が多く含まれており、焼成も良



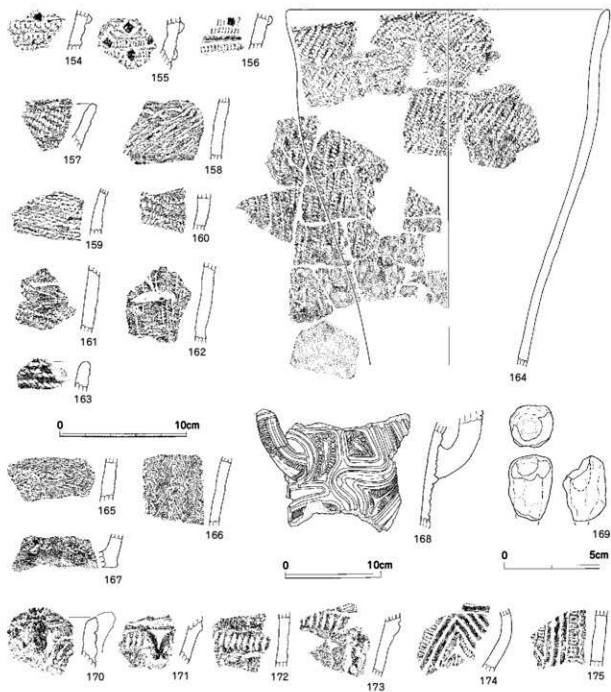
第49図 グリッド出土土器 (3)



第50図 グリッド出土土器(4)

好で堅緻な土器といえる。170～173は半截竹管による押し引きやV字状の粘土紐の貼付、ヘラ状工具による連続爪形文などから阿玉台式となろう。しかし胎土についてみると、微細な雲母がわずかに含まれる程度で、ほかは前者とほとんど変わらない。168・174・175は勝坂式で、168は4 I-68と4 H-68の2地点から出土した8点が接合したものである。胴部片のみの遺存であるが、胴部に把手を取り付けた珍しい例である。把手部にも半截竹管による平行線文とヘラによる連続した爪形文が施されている。色調は内外面が暗褐色で、焼成は良好である。胎土には白色の鉱物を多く含み、わずかに雲母も観察できる。174はキャリパータイプの口辺部であり、半截竹管を用いて山形文を構成する。175も同様な施文具を用いており、色調・胎土などは共通するものであった。169は古墳時代の住居跡（405号）から出土したもので縄文期の所産と考えた。深鉢の把手か土偶の一部と思われるが、下部は欠損しており断定はできない。上部は一部を破損するが、1.5cmほどの空洞がみられる。

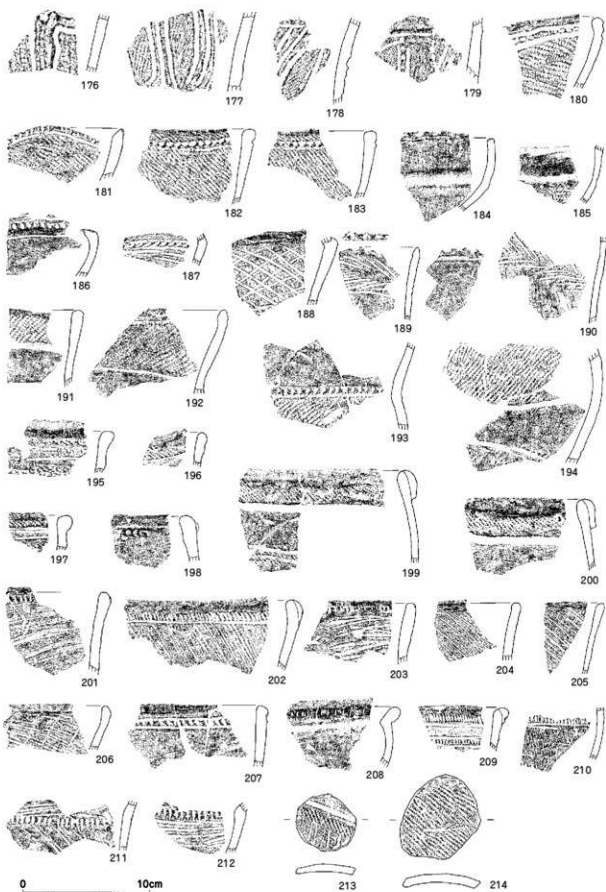
後期 後期に属する土器群は早期に次いで多いものといえる。形式的にみれば堀之内式期から安行2式期まで断続的ではあるが継続して出土している。出土地点は3 I・4 I区、3 J区に一定のまとまりが認められた。176～179は4 I-03・04グリッド出土の堀之内I式期に属するもので、地文に縄文を施した後で力強い沈線で平行線・曲線など描いている。180～194・215～231は加曾利B式～曾谷式までを一括した。これらは3 I・4 I区や溝から比較的多く出土している。180～183は波状口縁の深鉢で182・183は同一個体となる。184～191は浅鉢ないしは鉢形を呈するタイプで、184・185では文様はみられない。186～188は口辺が大きく内側に屈曲するタイプとなり、沈線・刺突により主文様が構成される。189・190は溝から出土したもので同一個体となろう。器厚は4mmと薄く堅緻な焼成の小型品である。口唇部は鋸歯状に製作し、さらに凸部では鋭利な工具で刺突する。文様は沈線を斜行させ口辺部のみに施されている。215～225は紐線文系の深鉢類を一括した。粗い縄文を地文とし、その後には横方向の沈線を加えている。223は頸部にも紐線を貼付した例である。226・227は底部で、ともに器面には調整痕が残る。227は浅鉢で内外面の調整は一層顕著なものとなる。細い沈線による文様構成が特徴的である。これらの土器群は概ね加曾利BⅡ式となろう。192～194は同タイプの深鉢であり、194は杵状に引いた沈線間を縄文で充填している。このような深鉢はより後出となろう。229～231は同一個体で4 I-14グリッドを中心に同06・15・24・25グリッドで散乱したよう形で出土した。接合の結果、ほぼ器形を把握できるまでとなった。口縁は大きな波状を呈した4単位となろう。口縁に沿って粘土紐の貼付がみられる。口唇部と粘土帯は瘤状突起によって結ばれている。また波頂部へも連なり勇壮な感覚を醸し出している。「く」の字にくびれる頸部にはヘラによる刻目が巡り、胴部には浅い沈線による曲線を描き、その間を磨消し、さらに器面調整を施している。いわゆる半精製の深鉢となろうが、内面での調整も丁寧である。器内外面の色調は赤褐色で焼成も良好であった。瘤状突起の採用や胴部文様帯の表現から安行I式への過渡的段階としてとらえ曾谷式と考えてよいであろう。195も波状口縁であり、口縁直下に刺突を加える。これも前者と時期的に近いものといえよう。196～212・232～234までは安行I・Ⅱ式を一括した。196は波状口縁となり、199・200は平縁である。いずれも縄文帯の上に瘤状突起が貼付されるものであろう。201～203は紐線文系の深鉢が変化したものであり、204～206は斜行する浅い沈線で器面が飾られる。口縁はやや反するような傾向にあり、安行I式の範疇に入るものと思われる。209・210はヘラによる連続した刻目が特徴的である。おそらく瘤状突起が付き、前者よりも後出のもので晩期までくだるかもしれない。211・212の器形は浅鉢形と考えられる。232・233は帯縄文系の深鉢で、233の口径は推定11cmと小型となる。瘤状突起部にくはみや刻目が加えら



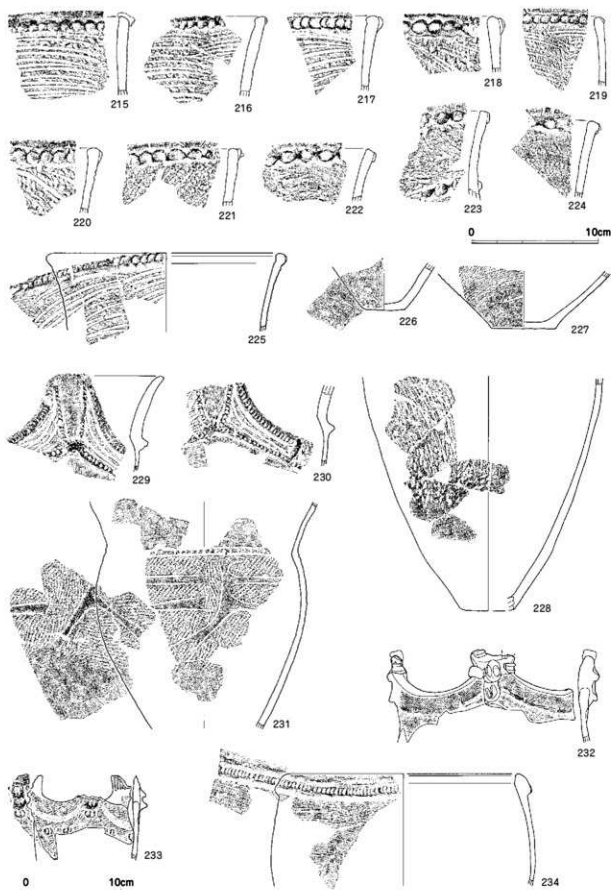
第51図 グリッド出土土器(5)

れており安行Ⅱ式の特徴を備えている。234は同時期の平縁の深鉢であり、粘土帯が口縁直下を巡る。口縁部は内湾し、胴部の器厚は削られて3mmほどとなる。213・214は周囲に加工痕が認められる円盤状の土製品で後期の所産となろう。

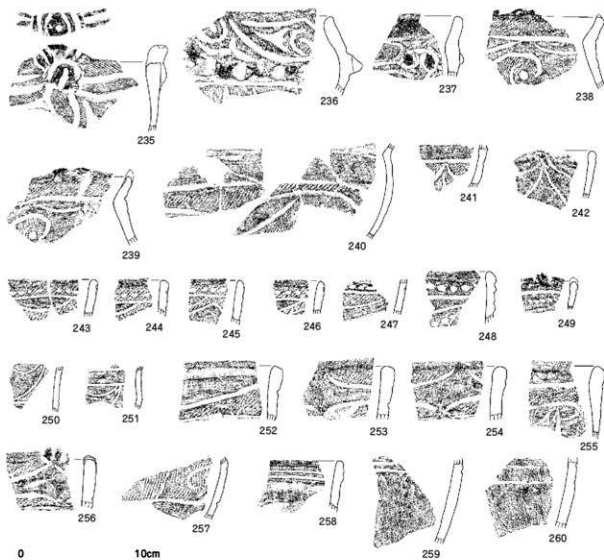
晩期 晩期に属する土器群は3Ⅰ・4Ⅰ区、3Ⅱ区でまばらに散布するような状況で出土しており量的にも少なかった。235は緩やかな波状口縁を呈する深鉢で粘土塊を貼付して波頂部を形成する。幅広の沈線とRLの細縄文で文様が構成され、下部には三叉文の片鱗が認められる。236も波状口縁の深鉢となろう。口辺部の文様は前者同様沈線と細縄文によって構成される。ここでは明確な三叉文が表現されている。以



第52図 グリッド出土土器(6)



第53図 グリッド出土土器(7)



第54図 グリッド出土土器 (8)

下には太い粘土紐を貼り付けヘラにより等間隔にくぼみを作る。237も深鉢形を呈するものであろう。器面には浅い沈線と一対の突起がみられる。238・239は口縁部の作りと玉抱きの入組文から同一の個体となろう。出土地点は前者が古墳時代の住居跡(406号)で後者は3 I-48グリッドであった。これらは安行Ⅲ a式となろう。240・241は浅鉢で前者は3 I-89・99グリッドから出土している。浅い沈線間にLRの細縄文を施文している。242は鉢形土器の口縁部である。細い沈線を波頂部に集合させたものである。243~246も同一個体と思われるが接合には至らない。出土地点は古墳時代の住居跡(405号)から3点、4 I-20と3 H-95グリッドから各1点となる。247も同様な文様構成となるが、刺突の方向が異なる。口縁と平行して刺突文を配し、沈線間の無文部では調整痕が認められる。248・249では縄文はみられないが、248は波状口縁で、器内外面はきれいに調整されている。刺突文の多用から安行Ⅲ c式に近いものといえよう。250・251は隣接グリッドから出土した同一個体である。器形は平縁の深鉢形となろうが、器厚は4mm弱と薄い。半円形に区画された中を微細な沈線で充填する。252~254の口縁は平縁となり、緩やかなカーブを描く太い沈線が特徴的である。前浦式としてとらえられよう。255は波状口縁で浅い沈線間に縄文が施文されている。256の口唇部には粘土塊の貼付がみられる。157は、器面及び縄文から243~247の胴部と思われる。258~260は沈線のみが残されたもので259と260は底部に近い同一個体である。

(2) 石器 (第55~63図、図版28~32)

前項では遺構外の遺物として土器群について取り上げたが、ここでは遺物包含層を中心として出土した石器について触れることとした。なお、砥石などについては時代を中世まで下降させてここで扱うこととした。

石鏃 (1~10) 10点出土しており、チャート製品が7点と多い。出土地点についてみると、その半数が遺物包含層とした地点から出土している。しかし、この地点では各時期の土器群が出土し、石鏃の時期を認定することはできなかったため簡単な記載にとどめたい。出土した石鏃は破損品が多く、完形品は4点となる。基部の形態について観察すると、えぐりがほとんどないもの(3・4・9)と大きくえぐられているもの(2・6)とがある。前者は早期の土器群に伴うことがしばしばみられる。また表面の剥離は丁寧に施されており、3や10では左右対称となり精緻な作りといえよう。

削器 (11・12) 11は周囲にくまなく調整剥離を加えており、定型的な石器とはいえないが削器として使用したものと考えた。裏面でも若干整形されている。12は上半部が欠損しており、両側縁を剥離している。表面の一部は鉄分を含むものか若干赤みがかっている。

楔形石器 (14・15) 14は上下を剥離しているため楔と考えられよう。左の側縁でも表裏からの剥離が施されている。15は自然面を多く残しているため4cmほどの小礫を割ったものであろう。主剥離面では左右に整形と調整のための剥離が観察できる。

剥片 (13・16・17) 13には取り立てて加工痕は認められないが、石器素材となる形状を呈していたので図示した。16は裏面に整形のための二次剥離が認められる。17は右側縁上部にわずかな調整痕が認められる。12と同質の黒曜石である。

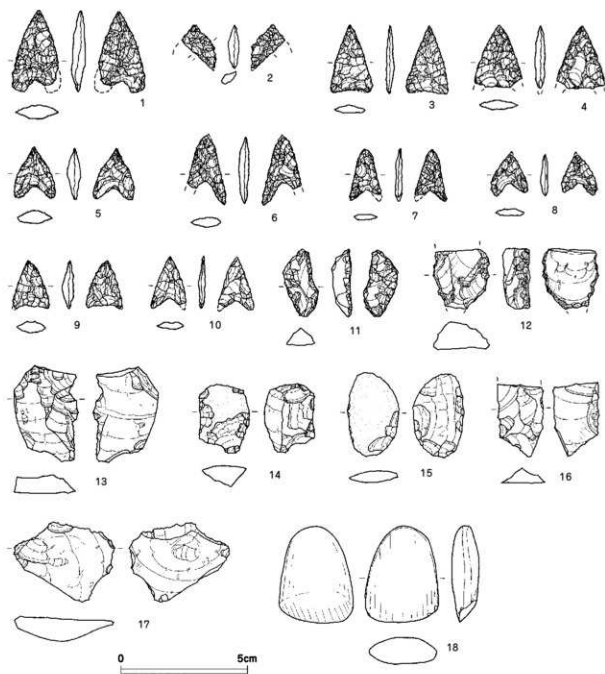
磨製石斧 (18・19) 小型磨製石斧の完形品である。刃部での刃こぼれは認められず、片刃石斧に近い形状を示す。弥生期の遺構・遺物が出土していないため縄文期の所産とみてよいであろう。側面も軽く研磨している。19は、おそらく頭部を破損した磨製石斧を磨石として再利用した例であり、中央の打痕部分が欠損していることから磨石としての機能が失われたため廃棄されたものであろう。

打製石斧 (20・21) 20は古墳時代の住居跡である403号・408号から出土したもので、粗く整形したものを打製石斧として使用したものである。裏面や側面には欠損後に敲石として使用した痕跡が認められるため古墳時代に使用されたものとも考えられる。21は扁平な礫の周囲を剥離し打製石斧としたもので上部を欠損する。

礫器 (22・23) 22は薄く剥離した砂岩の剥片を素材としたもので、側面に若干の整形剥離を施している。23の表面は被熱のためやや赤化している。刃部は表面部分を大きく剥離し、裏面からさらに整形剥離を施している。刃部での磨耗が著しいことから敲打具として使用されたものであろう。

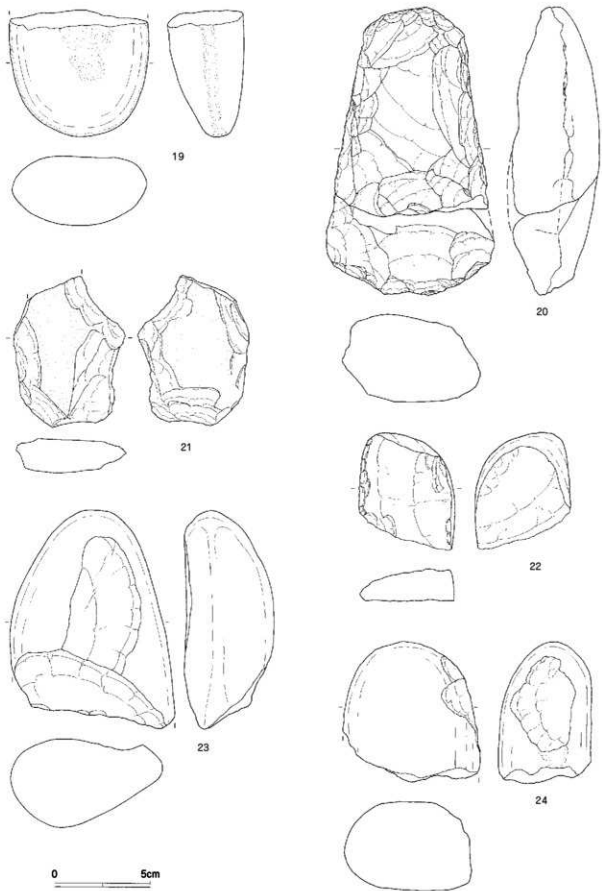
磨石 (24~34・36~41・43・44・48・50・51・53・54) 磨石として分類した石器は敲打具としても使用されていたもので、中央部や側面に敲打痕が認められる。24~33は欠損品として廃棄されたものであろうが、24・27・31の使用頻度は著しく側面は平坦といえるほど磨耗している。36・37・40・53の表面は非常に滑らかで敲打痕はみられるが石皿との兼用とは思えないほどである。

敲石 (35・42・45~47・49・52・55~61) ここでの敲石は敲打痕のみが観察できるものとした。敲打痕は表面中央や側面あるいは下端部に認め、強く打ちつけたものであろうか礫面が剥離しているもの(57~59)もある。42の使用例では表面部が広範囲に著しく荒れており長期の使用によるものであろう。

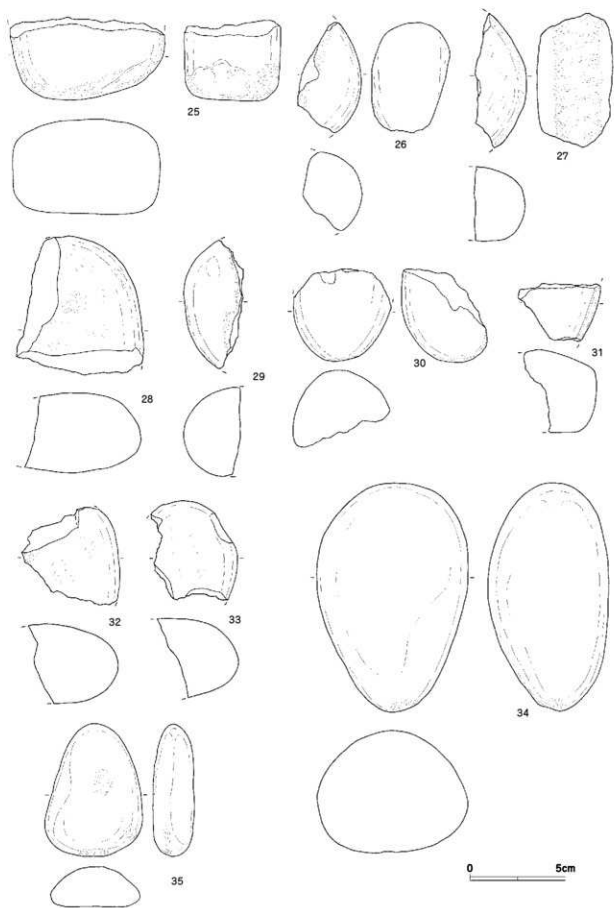


第55図 グリッド出土石器(1)

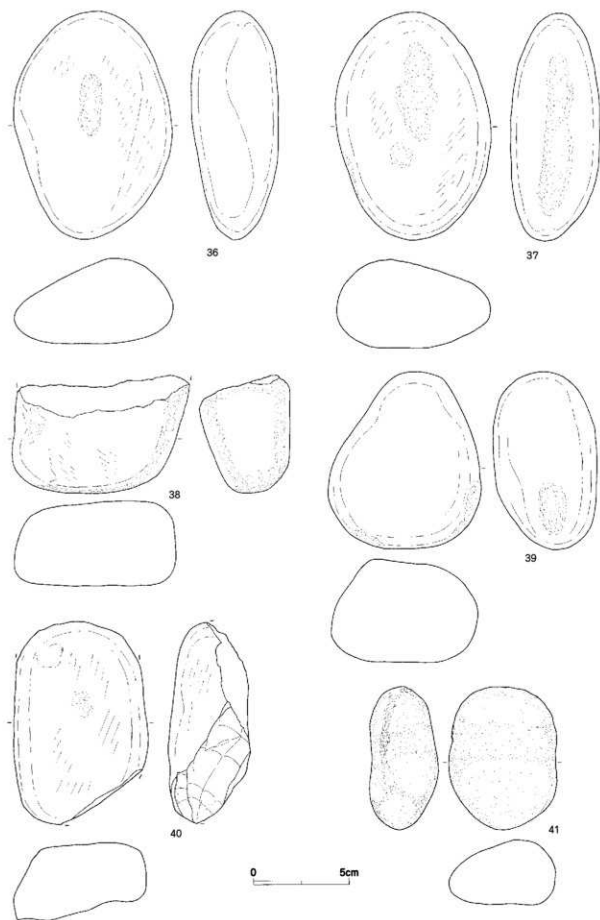
石皿(62~65) 62は約1/3が遺存した石皿で、両面は大きくくぼみ長期間の使用を想起させるものである。63も同種の石材を用いたものである。64は砂岩製で中央に向かって傾斜している。石皿と考えてよいであろう。古墳時代の住居跡(407号)から出土しており周囲には敲打痕が認められる。打製石斧例と同様に当時の人によって使用されたと思われる。65は板状の粘板岩の周囲を加工し石皿としたものである。表面は中央部に向かって若干のくぼみが認められる。裏面はほぼ平坦な面を呈している。石材から古墳時代以降に使用されたものと考えられる。



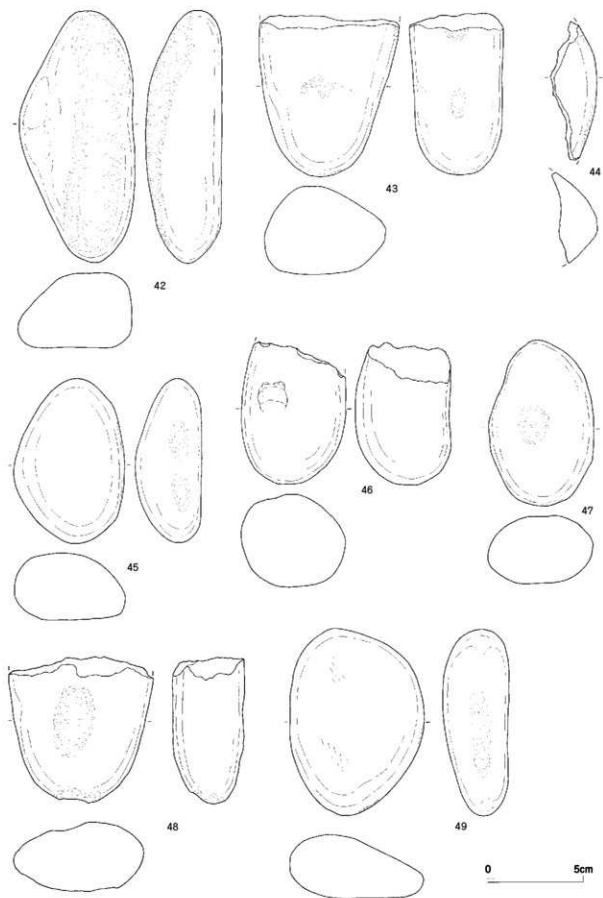
第56図 グリッド出土石器(2)



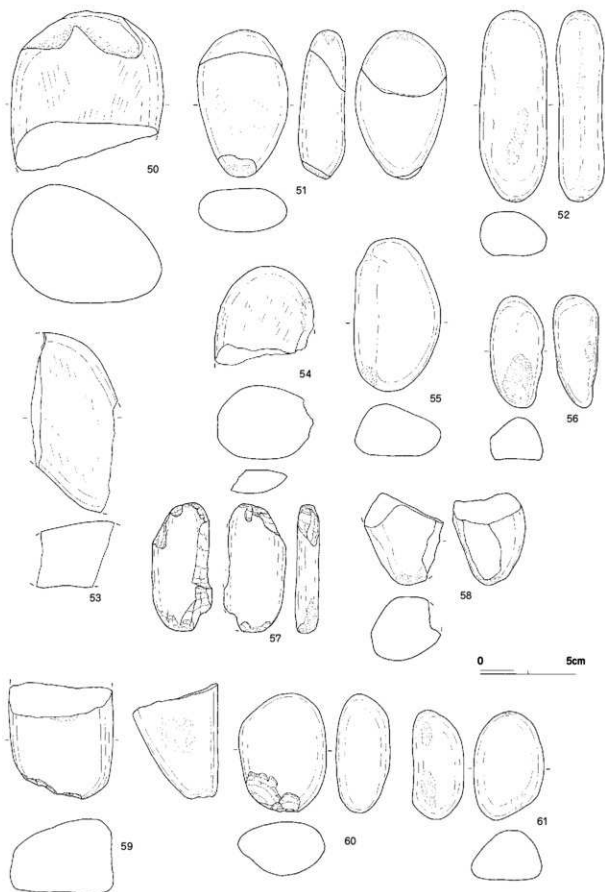
第57図 グリッド出土石器 (3)



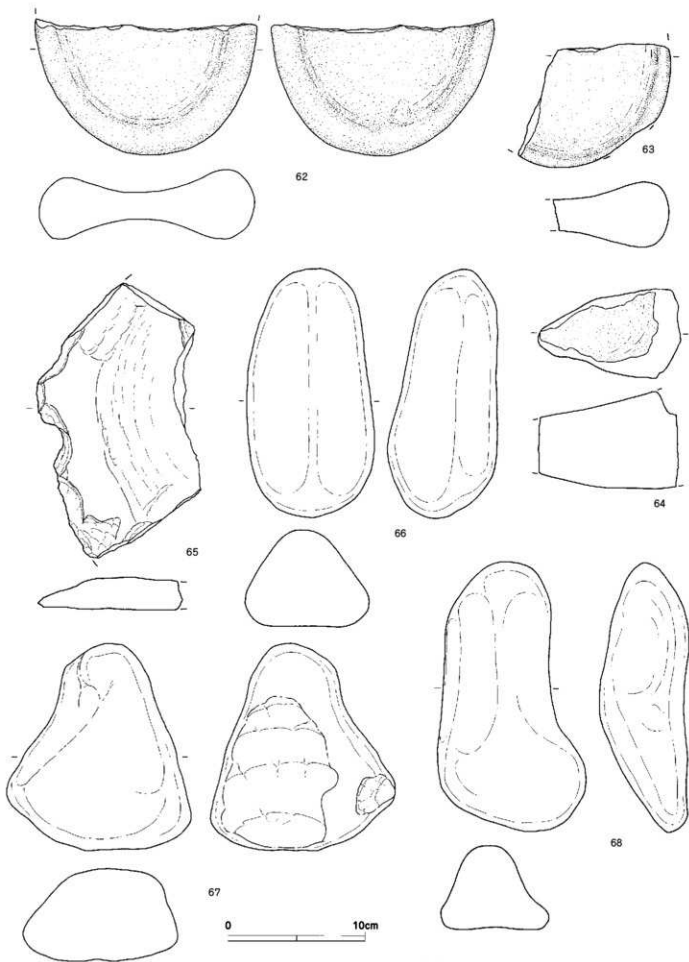
第58図 グリッド出土石器(4)



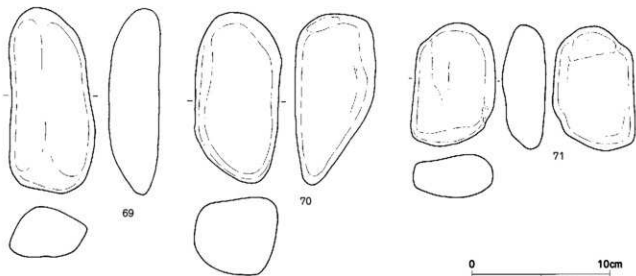
第59図 グリッド出土石器 (5)



第60図 グリッド出土石器(6)



第61図 グリッド出土石器 (7)



第62図 グリッド出土石器(8)

台石 (66~68) 66~68の3点については台石と考えた。共通しているところは平坦な一面を有している点にある。とりわけ67では裏面を大きく剥離し平らな面を意識的に作出している。いずれも表面では特に使用痕・敲打痕などは認められない。

礫 (69~71) これらの礫には取りたてて加工は認められないが、石器素材と考えられたため図示したところである。69・71は炉穴周辺から出土したものである。その形状と石材から69・70は磨製石斧の素材として十分となろう。また71は表面が平滑であり器面や皮革の調整具としても使用できるものとなろう。こうした類例は削除されがちであるが関連遺物として掲載した。

(3) 石製品 (第63図、図版31)

石製品では砥石と軽石が出土しており、その大部分は古墳時代以降の遺構から出土している。このため時代的には異なるが、本項で一括して記載することとした。

砥石 (72~78) 72の形状は整っていないが、裏面の中央部は滑らかな面を呈しており研磨具として使用されていたことは間違いない。73は表面に溝状の痕跡が2本みられる。その間の平坦面は研磨痕らしき円滑な面が形成されている。おそらく金属器の砥石として使用されたものであろう。74は表裏面が円滑で、器厚は7mmと薄い。時代的にも古墳時代以降の製品であろう。75~78は長方形を呈したタイプで、75・76・78の中央部は摩耗が著しい。また78の下部には2mmほどの小孔がみられるが貫通までには至っていない。

軽石 (79~83) 軽石が5点が出土しているが、うち4点は古墳時代の住居跡から出土したものであり遺構に伴う遺物と考えられる。縄文時代と異なり、この時代では軽石を浮子以外の道具として使用していたものと考えられる。79・83の例では表面にV字状の溝が認められるため鉄製品の研磨に用いていたものであろう。

以上が本遺跡で出土した石器群である。出土した石器を器種別にみると、石皿を含めて磨石・砥石といった調理具とされる石器が多く、石鎌は10点、石斧類は転用品を含めて僅か4点のみにとどまった。この出土量の差は本遺跡を性格づけるものとも考えられる。つまり当時の人びとは集落を形成することなく狩猟・採集生活という中で一定期間、あるいは季節的な居住を繰り返していたものと思われる。また多数の土器型式の存在は、狩猟・採集という行為を裏付けているようである。



第63図 グリッド出土石器(9)

第4表 石器・石材一覧

番号	器種	出土地点	石 材	重量 (欠損品) g	備 考
1	石鏃	4I区	黒曜石	(2.30)	表採
2	石鏃	12F-06	黒曜石	(0.57)	
3	石鏃	4 H-89	チャート	1.10	
4	石鏃	12G-13	チャート	(1.69)	
5	石鏃	018号	チャート	1.30	溝
6	石鏃	10F-60	チャート	(1.14)	
7	石鏃	3I-79	チャート	(0.58)	
8	石鏃	3J-80	チャート	0.47	
9	石鏃	032号	チャート	1.10	古墳時代前期住居跡
10	石鏃	4I-00	黒色安山岩	(0.59)	
11	削器	003号	チャート	2.65	溝
12	削器	3I-74	黒曜石	(6.82)	
13	剥片	276号	黒曜石	8.54	中世土坑
14	楔形石器	3I-16	チャート	4.49	
15	楔形石器	3J-14	チャート	4.77	
16	剥片	--	チャート	(3.35)	表採
17	剥片	4 H-37	黒曜石	9.62	
18	磨製石斧	3J-53	細粒砂岩	16.46	
19	磨製石斧	4I-13	閃緑斑岩	(245.06)	磨製石斧を磨石に転用、被熱
20	打製石斧	403号	砂岩	(700.00)	408号出土品と接合、古墳時代前期住居跡
21	打製石斧	4 H-52	安山岩	(103.46)	
22	礫器	4I-45	砂岩	70.69	
23	礫器	3I-29	砂岩	523.64	被熱
24	磨石	3J-81	安山岩	377.84	被熱
25	磨石	012号	安山岩	(283.99)	中世方形竪穴
26	磨石	4I-07	安山岩	(81.95)	
27	磨石	4I-07	安山岩	(92.82)	
28	磨石	3I-87	石英斑岩	(289.63)	被熱
29	磨石	4I-36	砂岩	(116.08)	
30	磨石	4I-44	石英斑岩	(93.84)	
31	磨石	4I-06	安山岩	(63.25)	
32	磨石	3J-80	砂岩	(116.83)	
33	磨石	4I-54	砂岩	(111.24)	被熱
34	磨石	3I-99	砂岩	755.00	
35	敲石	433号	閃緑岩	101.42	被熱
36	磨石	4I-13	砂岩	598.79	
37	磨石	3J-60	砂岩	630.00	
38	磨石	426号	安山岩	(384.32)	炉穴
39	磨石	3I-29	石英斑岩	556.66	
40	磨石	401号	緑色細粒凝灰岩	(428.95)	古墳時代前期住居跡
41	磨石	3I-88	アブライト	226.30	
42	敲石	3J-60	砂岩	468.31	

43	磨石	3J-24	アブライト	(397.33)	被熱
44	磨石	4I-34	砂岩	(56.03)	被熱
45	敲石	3I-29	砂岩	231.30	
46	敲石	3I-95	石英斑岩	(298.71)	
47	敲石	3J-20	石英斑岩	247.16	
48	磨石	411号	石英斑岩	(300.50)	中世方形竪穴
49	敲石	4I-00	砂岩	329.15	
50	磨石	4I-12	砂岩	(539.44)	被熱
51	磨石	3J-11	砂岩	125.66	
52	敲石	405号	砂岩	147.51	古墳時代前期住居跡
53	磨石	4 H-78	砂岩	(198.43)	
54	磨石	4I-40	花崗岩	(143.14)	被熱
55	敲石	3J-12	砂岩	146.92	
56	敲石	403号	砂岩	53.11	古墳時代前期住居跡
57	敲石	032号	ホルンフェルス	(44.51)	古墳時代前期住居跡
58	敲石	3J-12	砂岩	(71.37)	被熱
59	敲石	486号	石英斑岩	(191.51)	溝
60	敲石	4I-44	石英	113.66	
61	敲石	3I-25	石英	84.24	
62	石皿	3I-29	安山岩	(1.170)	
63	石皿	4I-00	安山岩 (多孔質)	(574.39)	
64	石皿	407号	砂岩	(700)	古墳時代前期住居跡
65	石皿	3J-71	粘板岩	(850)	
66	台石	491号	花崗岩	1.795	炉穴
67	台石	4I-00	アブライト	1.855	
68	台石	491号	石英斑岩	1.410	炉穴
69	自然磔	422号	ホルンフェルス	467.99	石器素材、炉穴
70	自然磔	3J-50	ホルンフェルス	690	石器素材
71	自然磔	422号	アブライト (片麻状)	266.99	石器素材、炉穴
72	砥石	003号	流紋岩	103.18	溝
73	砥石	2J-82	安山岩 (多孔質)	(201.91)	
74	砥石	488号	流紋岩	(15.61)	溝
75	砥石	012号	流紋岩	(40.46)	中世方形竪穴
76	砥石	10H-34	流紋岩	(88.10)	
77	砥石	405号	流紋岩	(59.97)	古墳時代前期住居跡
78	砥石	003号	流紋岩	(49.44)	溝
79	軽石	013号		27.30	中世地下式坑
80	軽石	402号		9.96	古墳時代前期住居跡
81	軽石	409号		11.16	古墳時代前期住居跡
82	軽石	407号		44.51	古墳時代前期住居跡
83	軽石	406号		68.34	古墳時代前期住居跡

第4章 古墳時代

第1節 概要

本遺跡で発見された古墳時代の遺構は竪穴住居跡のみであり、集落を形成するような配置で2か所において検出されている。そのうちの1か所は北に向かう舌状台地の基部にあたる8G区・9H区で7軒、ほかは台地先端部に近い4H区周辺で9軒の計16軒の住居跡が発見された。ここでの出土土器についてみると、時期的にはいわゆる五領式の範疇でとらえることができるものである。いわばこの2地点で古墳時代前期の人のびとによって集落が営まれていたものといえよう。次に、8G・9H区より検出された住居跡から順に記載していくこととする。

第2節 遺構と遺物

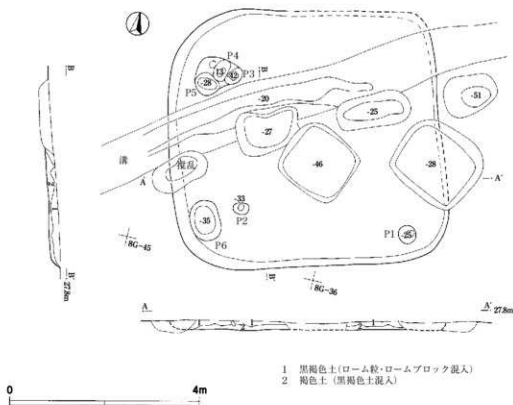
030号（第64図・第80図1～3、図版45） 本跡は8G-35・36グリッドをまたぐように位置し、遺構内は中世の溝や方形竪穴による損壊を受けていた。また北側の側壁では掘乱が認められ、遺構としての遺存状況は良好とはいえなかった。平面形はほぼ隅円方形となり、長軸5.7m、短軸5.5mを計測し、主軸方位はN-77°-Eを示す。炬跡は検出することができなかった。おそらく中世遺構により削平されたものと思われる。ピット（深さは床面からの計測による、単位はcm。以下同）は6か所で確認できたが、支柱穴といえるものは3か所（P1・P2・P3）となろう。P6は貯蔵穴と考えられた。床面は遺構確認面から約20cmと浅く、遺存部はほぼ平坦であったが、P3周辺では軟弱な部分がみられた。

遺物は土器の小破片が20点ほど覆土内から出土しているが確実に本跡に伴うとはいえない。なお、本跡内外で検出された中世遺構から遺物は出土していない。

遺物 1は壺形土器の口縁部で内外面に赤彩が施されている。口縁は二重口縁となり、RLとLRの細縄文を横方向に施文し、羽状の効果を作出している。2は小型の土器で1/4程度の遺存となる。器厚は3mmほどで、器面の仕上げは粗い。3も小型品で高杯を模したものである。ともにミニチュア土器の類となろう。

031号（第65図・第80図4～10、図版33・45） 本跡は9H-02グリッドに位置し、中央部を溝（486号）によって削平されていた。溝の底面は床面に達してはいたが思ったほど損傷は受けておらず、ほかの遺存状態は良好であったため形状などの把握は可能であった。平面形は隅円方形を呈し、長軸は5.3m、短軸は5.1mを計測する。主軸方位はN-56°-Wとなり、やや横に広がるような構造となっていた。堆積土は溝による削平部を除外すれば自然堆積の層順を示していた。炬跡は20cmほど掘りくぼめられており、底面はよく焼けていたため長期にわたり使用していたようである。また柱穴についてみると、ピットは2か所で検出されているが支柱穴と呼称できるものは認められず、貯蔵穴（P2）と梯子の支えとなるものである。床面は平坦で、周溝が一部を除ききれいに巡っていた。

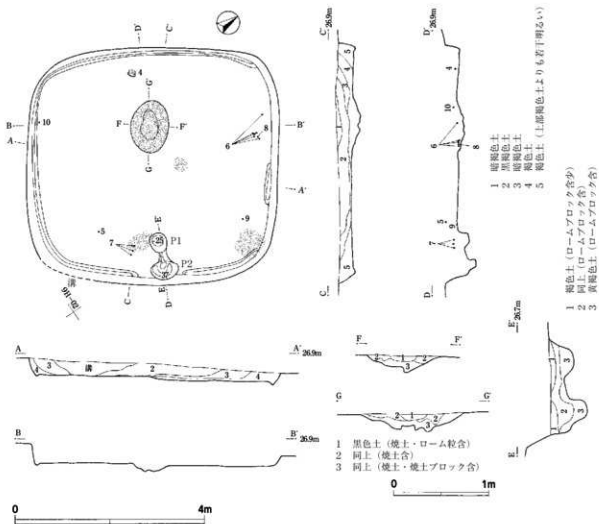
遺物は、完形品といえるものは10のミニチュア土器だけであるが、図示できたものとしては高杯が5点と多い。出土状況についてみると、5の高杯脚部だけが覆土中の出土となり、ほかは床面直上か床面から若干浮いた状態で出土したものである。



第64図 030号住居跡

遺物 4は口径15.5cmの寛で粘土紐接合部からきれいに破損している。寛以外の使用目的のために意識的に破壊したものとも思われる。口唇部にはヘラによる刻目が付されており、器面には煤状の炭化物が付着する。内面の整形は粗雑で粘土紐の接合部が多々みられる。5～9は高杯で多彩なタイプが存在した。5は脚部のみで遺存で焼成前穿孔の痕跡を残す。6は杯部の1/2と脚部が遺存するもので、杯部は深く形作られている。器面の色調は赤褐色ないし淡褐色となるものの赤彩は認められない。7は杯部の一部で6点が接合したものである。内外面には赤彩が施されている。8は脚部以下を欠損する。内外面はヘラできれいに調整されているが、内面では剥落がみられる。本跡出土品としては大きな高杯となろう。口唇部は平坦に整形され明確な稜線がみられる。9は小型品で杯部は半球状に整形された特徴的な高杯といえよう。杯部や脚部を1/2程度欠損するがほぼ原形を把握できた。器内外面は、ほかの高杯と比較すると粗雑な仕上げとなっている。10は手捏ね土器となる。完形品で口縁部のくぼみは意識的に形成されている。口縁部には爪形の文様を施している。

032号 (第66図・第80図11～16、図版34・45) 本跡は9H-15グリッドに位置し、南側コーナー部分の一部が溝によって削平されていた。その他についての遺存状況は良好といえた。平面形は隅凹台形といえるような形状を呈しており、長軸は5.3m、短軸は4.0m～4.3mを計測する。覆土の堆積はレンズ状となり自然堆積したものであろう。主軸方位はN-7°-Wとなり、やや西に振れる。炉跡は焼土で覆われ底面も焼けており顕著な使用をものがたるものであった。ピットは2か所で検出できたが、柱穴と考えられる深さのものは存在せず、P1はその大きさから貯蔵穴の可能性も考えられる。P2の性格については断定できないが調理具などの什器類を置いた場所とも考えられる。床面は東に向かってやや下降するものの概



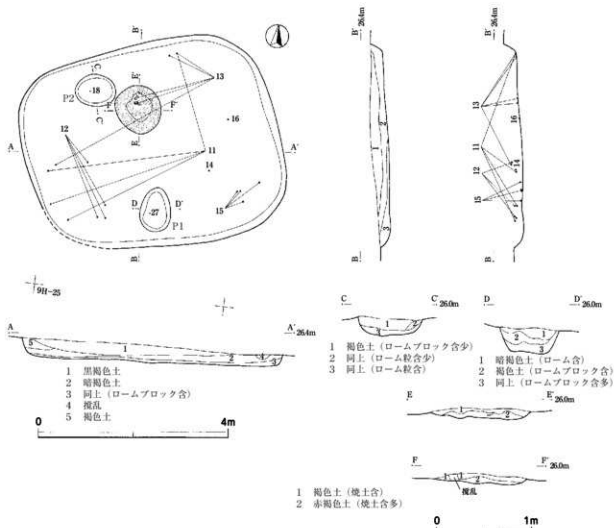
第65図 031号住居跡

ね平坦といえる。

遺物は土器のみで甕形土器が3個体と小型壺、高杯となる。14~16は床面に接して出土しており本跡に伴うものと考えてよいであろう。また、ほかの土器についても一部は床面付近から出土しており時期的にも同一と考えて差し支えなからう。

遺物 11・12は甕形土器となる。器内外面の仕上げと淡い暗褐色の色調から同一個体と考えられる。13は大型の甕で底部が約1/2ほど遺存し、被熱により小片となった15点の土器片が接合したものである。14は壺の折り返しの口縁部片で約1/5程度の遺存である。器面は黒色で口縁はナデ、以下はヘラにより整形されている。15は小型壺で内外面に赤彩を施している。器形についてみると、口縁は大きく開いて口縁付近でやや湾曲する。器種としては埴形を呈するようでもある。16は高杯で接合部だけが遺存したものである。器面及び杯部にはわずかながら赤彩の痕跡が認められる。

033号 (第67図・第80図17・18、図版35・45) 本跡は9H-23グリッドに位置し、溝(017号)などにより北側部分及び北東コーナーが削平されていた。このため遺存状況は良好とはいえず、辛うじて平面プランの確認ができたところである。住居跡の形状は方形に近く長軸5.1m、短軸4.5mを計測する。主軸方位はN-44°-Wを測る。また削平を受けていない覆土からみると堆積は自然のものと考えられた。



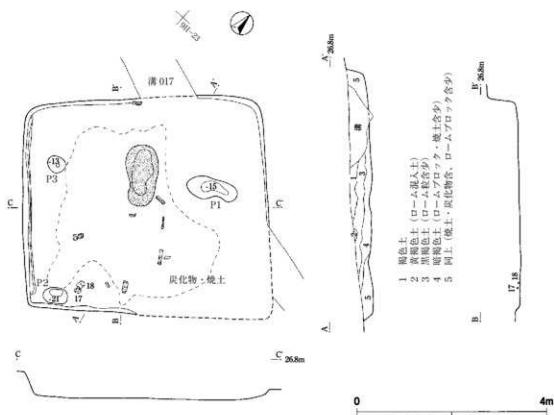
第66図 032号住居跡

炉跡の中央部は10cmほど掘り込まれ焼土と炭化物によって覆われていた。さらに床面付近の覆土には炭化材が各所にみられ、焼土・炭化物は広範囲に分布していた。このため本跡は火災に遭遇したものと考えられる。ピットは計3か所で検出できたが、柱穴としては浅く位置的にも疑問が残る。側壁についてみると、削平を免れた西側コーナーでは約60cmを計測し垂直に立ち上がるしっかりした壁が確認でき、4cm～5cmの浅い周溝もみられた。床面は炉跡周辺ではよく踏み込まれ平坦であり、東側コーナーの一部では凹凸が認められた。

出土遺物は少なく、図示した2点が南壁コーナーより出土した。ほかには土器の小破片が20点ほど出土しただけで図示できるものはみられなかった。

遺物 17は小型壺で胴上半部のみが遺存したものである。器面には鮮やかな赤彩が施され、内面でも頸部から上に赤彩の痕跡が認められる。18も小型の壺となろう。口縁の一部を欠損するもののほぼ完形品といえる。器面の仕上げを前者と比較すると整形はやや粗い。淡い褐色を呈しており、煤炭炭化物の付着が著しい。

034号 (第68図・第80図19～28、図版36・46) 本跡は9H-31グリッドに位置し、溝(018号)によって南側コーナー付近が大きく損傷を受けていた。住居跡の形状は隅円方形を呈し、長軸は推定5.6m、短

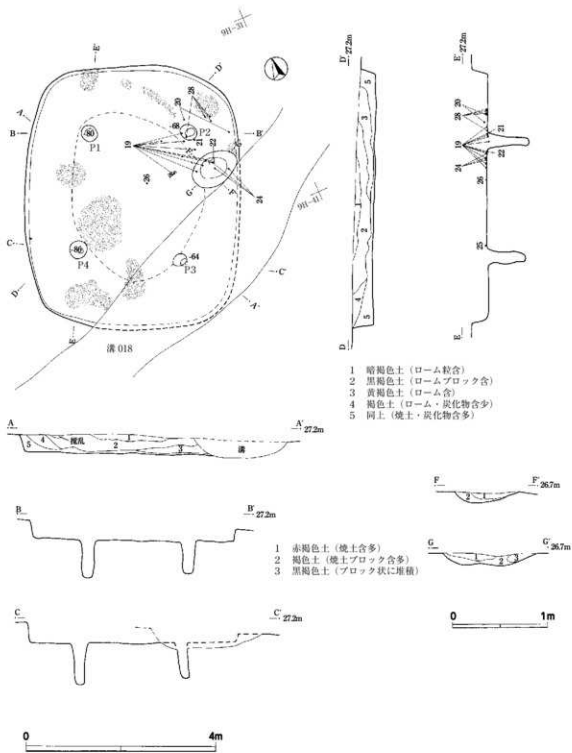


第67図 033号住居跡

軸は4.5mを計測する。覆土はレンズ状の自然堆積を示していた。炉跡（スクリーントーン略）は変則的な位置に設置されていたが、10cmほど掘り込んだ中には焼土や焼土ブロックが堆積していた。柱穴は4か所で検出され、ほぼ定位置に設置されていた。床面は平坦でよく踏み固められていた（破線部）が、床面を覆う堆積土には焼土・炭化物が含まれていた。また焼土は数か所で濃密に堆積していた。壁面は削平された部分を除くと垂直に近い立ち上がりを示しており、掘り込みも50cmと深かったためきれいな状態で検出できた。

遺物は炉跡周辺およびP2に接して集中的に出土している。器種も甕・高杯・器台・椀・浅鉢・手捏ね土器などがみられ、ほかの住居跡と比較すると豊富なものであった。いずれも床面直上から出土しており、本跡に伴うものか时期的にも近いと考えられた。

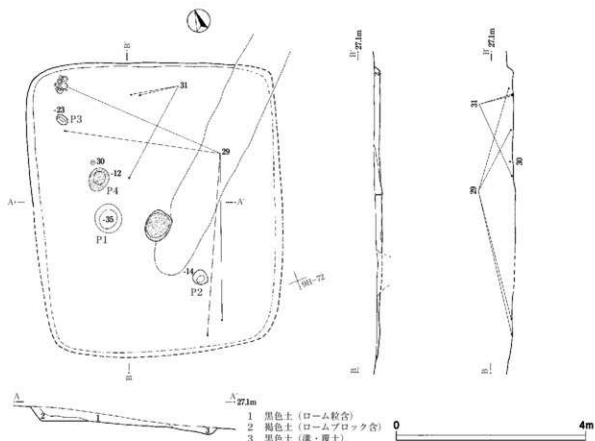
遺物 19は底部が欠損した甕で破片が広範囲に散乱したような状態で出土している。器面はヘラにより軽く削れた丁寧に仕上げられている。20は口縁から体部の破片であり、大きく外反する作りから大型の鉢と思われる。口縁は平縁に近い作りで明瞭な後縁を作り出している。器面はヘラによる整形で、裏面ではミガキによる調整も観察できる。21は椀形を呈した小型の鉢で底部は丸底に近く、わずかな平坦面が認められる。口縁端部は「く」の字状に外反した独特な作りとなっている。器内外面ではミガキによる調整も加えられている。22は口縁と裾部の一部が欠損するがほぼ完形の器台で器高は11cmを計測する。杯部の内面では明瞭な後が形成されている。また接合部には径16mmの孔が穿たれ、脚部では3か所にみられる。胎土は赤褐色を呈し、器面は塗彩したように鮮やかな色彩部分も存在する。23・24は壺ないしは埴形製品となろう。小型のため器厚は薄く赤彩もみられない。25は小型の甕で口縁部と底部を欠損し、胴部の1/3



第68図 034号住居跡

ほどが遺存するものである。焼成が不十分のためか内外面の剥落が著しい。26・27は粗雑な作りから手捏ねによるものである。28は高杯の杯部を再利用したものであり、底部をきれいに整形している。器面には鮮やかな赤彩が残るが、内面では剥落が顕著で赤彩は痕跡程度の遺存である。高杯杯部の転用としては希有な例といえよう。

035号 (第69図・第80図29~31、図版37・46) 本跡は9H-61グリッドに位置しており地形的には谷頭部分にあたる。このため遺構としての遺存状況は悪く、溝や後世の耕作により約1/2は失われていた。住

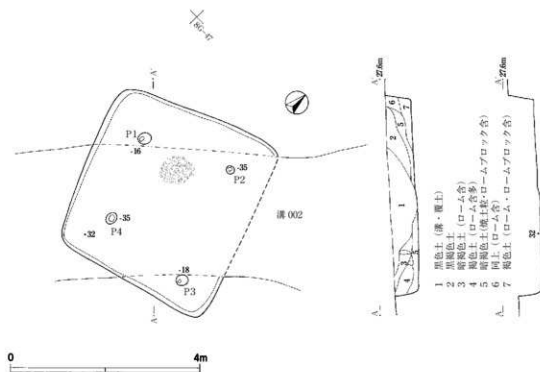


第69図 035号住居跡

居跡はおそらく隅円方形を呈していたものと思われる。覆土は堆積状態の良い北側コーナーで約30cmの層厚が認められた。炉跡と思われる痕跡は2か所で確認できたが、主に使用された炉は中央部に設置されたものとなろう。10cmに満たない掘り込みであったが焼土の堆積とともに底面はよく焼けていた。ピットは3か所で検出されており、柱穴と考えられるものはP1・P3となる。なお、床面は一部での確認にとどまった。

遺物は一括品としての壺が北側コーナーで出土しており、数点の破片は約6m南から出土して接合したものである。ほかに2点を図示したが、いずれも出土位置から本跡に近い時期の所産と考えられるものとなろう。

遺物 29は胴中央部に最大幅を有する甕で底部と口縁の1/2を欠損する。器面は刷毛状工具で縦方向に整形されており均整のとれた作りといえる。胴中央部には5cm幅で煤炭炭化物が巡る。内面の剥落もみられるところから長期にわたって使用された甕といえよう。30は高杯のミニチュア品となろう。脚部だけの遺存である。器面はへらによる縦方向のナデにより調整され滑らかな仕上げとなっている。底部には若干煤状の炭化物の付着がみられる。31は14片が接合した甕である。口縁部は折り返しており、その上を原体LRの縄文を横方向に回転させている。頸部は無文で、さらに縄文は胴上半部にも施文される。このタイプの甕は古墳時代初頭まで存続するものである。また胎土は淡い赤褐色で無文帯では調整が施されており、あたかも赤彩を想起させる作りとなっている。



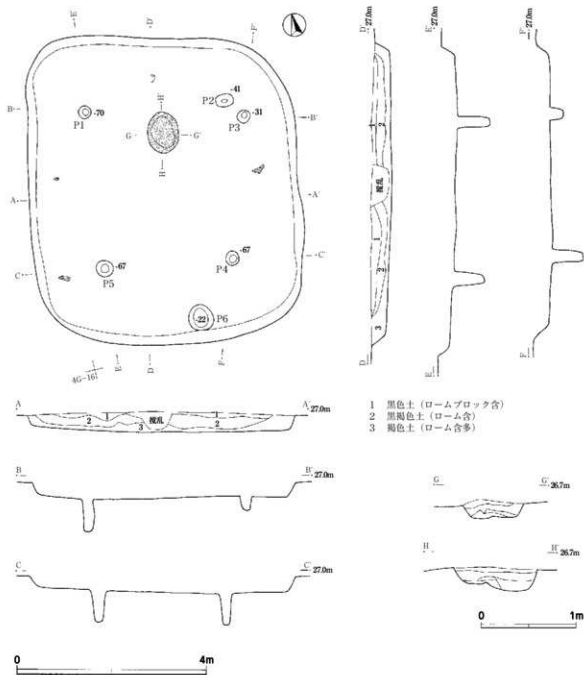
第70図 366号住居跡

366号 (第70図・第80図32、図版37) 本跡は8G-47グリッドに位置し、中央部を溝(002号)によって削平されている。そのため遺構としての状態は決して良好とはいえないが、掘り込みが深く確認面から55cm程度あったため形状などは把握できた。その形状はほぼ方形に近い隅円で長軸が4.0m、短軸が3.6mを計測する。覆土は溝を除外すれば自然堆積の様相を示していた。主軸方位はN-19°-Wとなり、炉跡・柱穴ともに定位置に検出されている。床面は深く掘り下げられていたためきれいな平坦面を形成していた。壁面もほぼ垂直に立ち上がり、しっかりした面が確認できた。

遺物の出土量は少なく、図示した甕が西側コーナーとP4の間から出土している。ほかは壺や甕の小破片であったため図化は省略した。

遺物 32は壺の口縁部が約1/3が遺存したものである。出土層位は覆土中とはいえず溝に削平された地点となり、本跡に伴う土器と断定することはできない。その形状は032号出土の壺(14)と類似しており、口縁が大きく外反するタイプとなろう。折り返し状の口縁やへら状工具での器面整形という点でも共通している。

401号 (第71図、第81図33) 本跡は4G-07・08グリッドに位置し、覆土の一部に擾乱を受けていたが大きな損傷には至っていなかった。堆積土も自然堆積を示していた。形状は隅円方形を呈し、長軸は6.5m、短軸は5.7mを計測する。主軸方位はN-15°-Eとやや東にとる。炉跡は中央北側に設置され20cmほど掘り込まれており焼土層の堆積が認められた。なおピットは6か所で検出されており、P1・P3・P4・P5が主柱穴となろう。P2はその形状からP3の支柱穴と考えられる。P6は浅く掘られたもので貯蔵穴となろう。床面はほぼ平坦な面で数か所に炭化材の塊が認められた。なお、焼土などはみられなかったため火災に遭ったとは思われない。



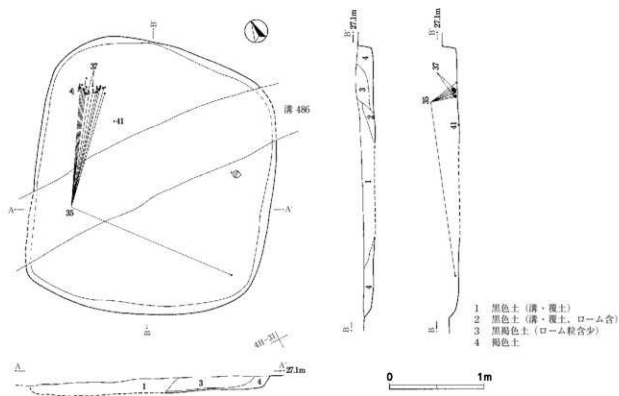
第71図 401号住居跡

遺物の出土量は少なく、図示した1点のほかに10点ほどの小片が出土したのみであった。

遺物 33は小型の壺で約1/3が遺存したものである。色調は淡い褐色で、裏面には輪積痕を残す。覆土中から出土しているため本跡に伴うものとはいえない。

402号 (第72図・第81図34~41、図版46) 本跡は4H-31・32に位置しており、溝(486号)によって中心部が深く削平されていた。そのため遺存状況は不良で方跡や柱穴などは確認できなかった。形状は概ね隅四方形を呈しており、長軸は5.8m、短軸は5.1mを計測できた。

出土遺物は住居跡の遺存状態からみると多いものであり、大形片など8点を図示することができた。35

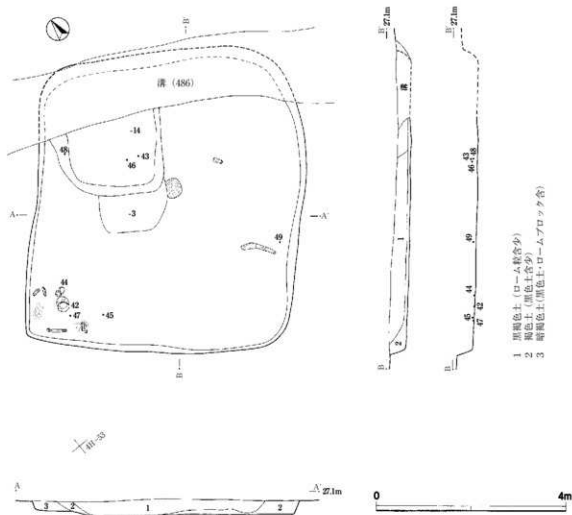


第72図 402号住居跡

の甕は北側コーナー付近から押しつぶされたような状態で出土している。また37の底部片は403号から出土した底部片(43)と接点は見出せなかったが同一個体と思われた。おそらく削平により403号のほうに移動してしまったものであろう。41の土製紡錘車を含めた3点は、その出土状況から本跡に伴うものと考えられる。

遺物 34は胴部片及び底部となるが接合までには至らなかった。器面は刷毛状工具で整形され底部にまで及ぶ。35は底部を欠損するがほぼ復原できた甕であり、被熱により器面は赤褐色に変色している部分が多くみられる。口唇部ではヘラ状工具により刻目が密に施され、口縁部には輪積みの痕跡を残す。36・37は大型甕の底部片でともに内面の剥落が著しい。38は高杯の杯部と考えられる。塗彩されていないが内面は丁寧にミガキ加工が施されている。39は口縁が大きく外反する甕となろう。器内外面はヘラ状工具で横方向にきれいに整形され、内面では若干調整も加えられる。色調は淡褐色で整形・調整という点で403号出土の甕(45)と共通しており同一個体と考えられる。40は鉢か壺の口縁となろう。内外面に赤彩が施されている。41は小型の紡錘車で径26mm、表裏面では凹凸がみられ厚さ5.0mm～7.5mmとなる。色調は明褐色から暗褐色で文様などはみられない。

403号 (第73図・第81図42～49、図版38・46) 本跡は4H-44グリッドに位置し、中世の方形竪穴や溝によって削平されていた。遺存状況としては良好とはいえない。堆積土についてみると、遺物が集中的に出土した西側コーナーではレンズ状に堆積した覆土の一部を確認することができた。形状は方形に近い隅

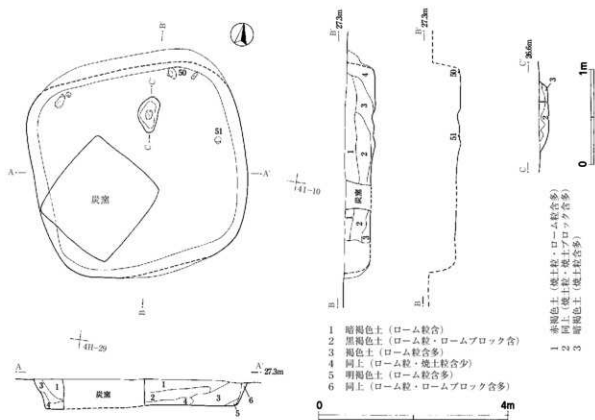


第73図 403号住居跡

円を呈していたものと思われる。長軸は溝によって削平されるが概ね6.0m、短軸は5.6mを計測する。主軸方位はN-43°-Eを示す。炉跡は中世遺構が構築された時に削平されたようで痕跡をとどめていた程度であった。また柱穴などについては検出できなかった。

遺物についてみると、西側コーナーで出土した土器群や土製品(49)は本跡に伴う遺物とみてよいであろう。一方、中世遺構内から出土した土器群には一括品は認められず、大型の破片を図化したもので本跡に伴う遺物とはいえない。43・45は402号でも同一個体と考えられる土器が出土しており、溝を掘削した時に紛れ込んだものと考えられる。

遺物 42は器面全体と口縁の内面が粗い刷毛状工具によって整形された甕である。器面の色調は褐色ないし暗褐色を呈しているが、赤褐色に変色している部分もみられる。また胴部には煤状炭化物の付着が著しく黒色化し、変化に富む色合いを現出している。なお内面でも煤状炭化物の付着がみられるところから甕として長期に使用されていたものであろう。43は隣接する402号出土の甕底部(37)と同一個体と考えられる。内面の剥落が著しい。44は小型の壺で口縁部は欠損するがおおよその器形はうかがえる。器面には鮮やかな赤彩が施され、ミガキ調整も丁寧である。45は402号出土の甕片(39)と同一個体と思われるが



第74図 404号住居跡

再掲した。46・48も同一個体の可能性が高い。器面は42の甕と同様な工具で整形され、内面ではミガキも加えられている。色調は異なり、46が褐色で48は黒色を呈している。47は鉢あるいは高杯の口縁となろう。内外面に赤彩がみられる。49は鈴を模した土製品と考えられる。頂部は欠損しており、焼成前の穿孔が認められる。また全面に赤彩の痕跡を残す。

404号 (第74図・第81図50・51、図版38・47) 本跡は4H-09・19グリッドに位置し、遺構の西側には後世の炭窯跡が検出されたため遺存状況は必ずしも良好とはいえなかった。ただ炭窯が比較的小さかったため住居跡の形状などは把握できた。住居跡は隅円方形で一辺が4.5mを計測する。堆積土は概ね自然堆積の状況を示していた。主軸方位はN-19°-Wにとり、炉跡は北よりに設置され20cmほど掘り込まれており、焼土や焼土ブロックが充満していた。また柱穴についてみると、他の住居跡と比較すると小さめであり遺構内には柱を設置しなかったものと思われる。

遺物は少なく図示した2点のほかには壺や甕の小破片が10数点出土しただけであった。2点はいずれも床面に接した状態で出土しており、本跡に伴う土器とみてよいであろう。

遺物 50は杯部と脚の一部が遺存したもので、杯部の口径は22.5cmで欠損はみられない。口唇部と脚部に赤彩が施され、ほかではみられず珍しい例といえよう。口縁部と脚の接合部では横方向にヘラでナデ整形し、内面は縦方向に調整が加えられる。色調は明褐色で丁寧な作りといえよう。51は小型の鉢である。器内外面の作りは粗雑でヘラによる簡単な整形を施し仕上げている。色調は明褐色で、内面では焼成によるものか部分的に暗褐色を呈している。

405号（第75図・第82図56～66、図版39・40・47） 本跡は4H-39・49グリッドに位置しており、東壁の一部を浅いピットにより削平されていた。遺存状況は良好といえよう。堆積土は大きく2層に分離されきれいなレンズ状の堆積を示していた。住居跡の形状は隅円方形を呈しており、長軸は5.9m、短軸は5.5mを計測する。主軸方位はN-31°-Wを示し、炉跡は楕円形状に20cm～30cmと深く掘り込まれ焼土・焼土ブロック層が多く混入しており長期の使用を物語っていた。柱穴は定位置に検出されいづれも深く掘り込まれていた。また床面上には広く炭化材が散布しており火災に遭遇したものと考えられた。炉跡周辺での焼土と炭化物の堆積層（波線部）の広がりは火災を裏付けるものとも思われる。さらに掘り込みが深いためか壁面の状況も良好で垂直に近い立ち上がりとなっていた。

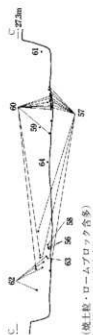
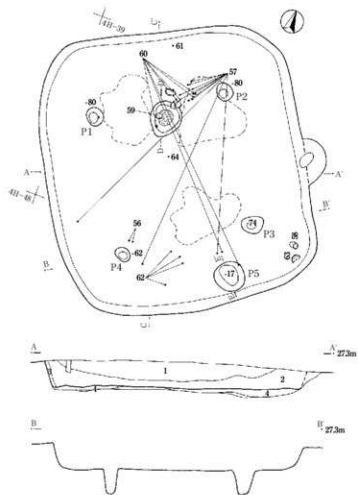
出土遺物は豊富で壺・甕・瓶・器台などの器種があり、炉跡の周辺で集中的に出土している。また57・60の壺や甕は破片が広範囲に散っており、投棄されたことも想定される。なお、56と62は出土位置と層位から本跡に伴うものではないと思われる。

遺物 56は大型壺の肩部片で、上部は粘土接合部からきれいに破損している。器面は結節したLRの細縄文が施文され、内面では剥落が著しい。57は口縁部が欠損した小型壺で、胴部は均整のとれた球形を形作る。器面はヘラによる調整が軽く施されている。58も小型の壺で、前者よりやや小さめの作りとなる。口縁の一部を欠損するがほぼ完形に近い。口縁及び胴部の器厚は薄く4mm～5mmでヘラ状工具により削り取られているようである。器面は褐色を呈し、若干煤状炭化物の付着もみられる。59も前者と同様な作りで器厚の薄い部分は3mm程度に削られている。内外面ともに暗褐色から黒褐色を呈し、内面では粘土接合痕が整形されずに一条残っている。60は口縁と底部が欠損する甕で器内外面での剥落が著しい。また器面はヘラケズリによる粗い整形で、色調は煮沸時の被熱によるものか赤褐色を呈している。61は頸部に輪痕を残す甕の大型破片である。器面は赤褐色で煤状炭化物の付着もみられる。62は大型甕の底部片で図示したように器厚は厚くしっかりした作りである。63は瓶として使用されたものであるが、底部の穿孔は焼成後におこなっている。整形はヘラを横方向に使用した丁寧なものである。器面は被熱によるものか赤褐色を呈しており、煤状炭化物が一周する。64は口縁部に幅広の粘土帯を貼り付けた甕片で類例が少ないため図示した。65は小型の鉢で半球形を呈しており、遺存は1/5程度である。66は器台の脚部片であり、穿たれた孔は5.5mmと細い。色調は器面が淡い褐色で塗彩は認められず、裏面は煤を塗ったような黒色を呈している。

406号（第76図・第81図52～55、図版40・47） 本跡は4H-58グリッドに位置し、遺構としての遺存状況は良好であったが標準土層としての第Ⅱ層である暗褐色土の堆積が厚かったため、一部の壁面は軟弱な様相を呈していた。堆積土はほぼレンズ状の堆積を示しており自然堆積といえよう。遺構の形状は隅円方形となり、長軸は4.2m、短軸は4.0mを計測する。主軸方位はN-31°-Wとなり、炉跡は浅く数cmの深さで焼土が5cmほど堆積していた。住居跡としては小型であり、柱穴は検出できなかった。また床面は炉跡周辺を除き、全体が軟弱であった。

遺物についてみると、炉跡の南側で図示が可能な甕（52）と高杯（55）が出土している。なお、甕は投棄されたような出土状況で小破片が30数点接合したものである。2点とも住居跡と近い時期の所産となろうが、本跡に伴う土器とは認定しがたい。

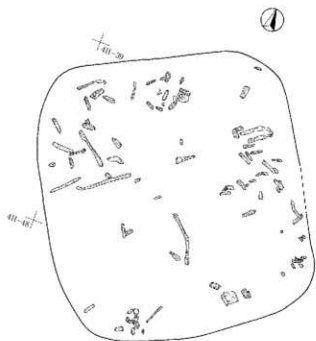
遺物 52は平均的な大きさの甕で口縁の大部分と底部を欠損する。わずかに遺存する口唇部には刻目が施され肩部には一条の輪痕を残す。色調は明褐色で器面をヘラ状工具で横方向に丁寧にナデて整形してい



- 1 暗褐色土 (黄土粒・ロームブロック含多)
- 2 赤褐色土 (黄土粒・ローム粒含多)
- 3 同上 (ロームブロック含多)
- 4 明褐色土 (ロームブロック含多・細り方)

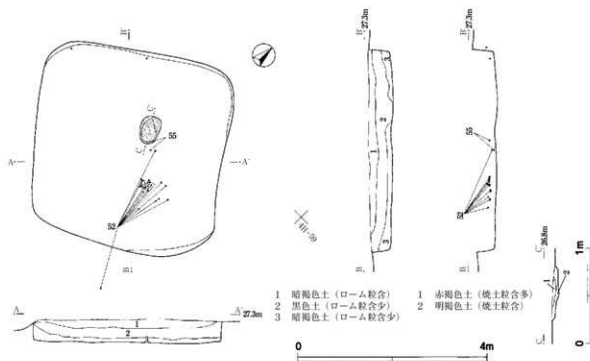
- 1 暗褐色土 (黄土粒・ロームブロック含多)
- 2 赤褐色土 (黄土粒・ローム粒含多)

0 1m



0 4m

第75図 405号住居跡



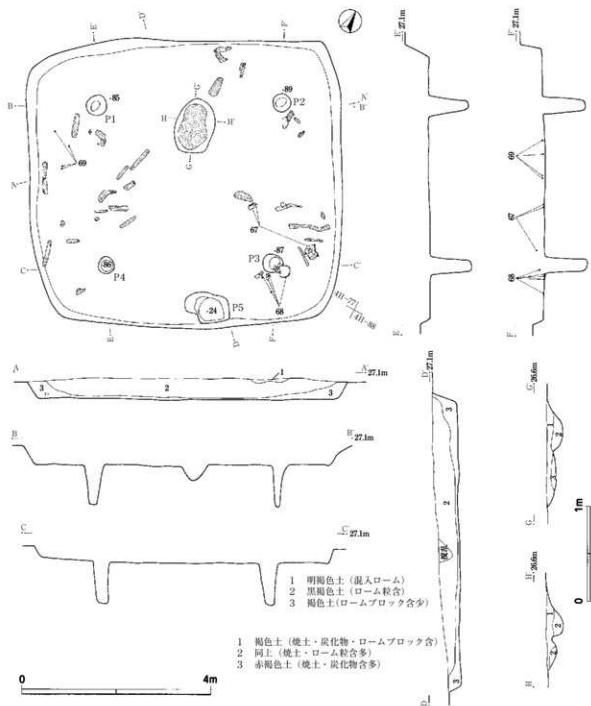
第76図 406号住居跡

る。53は甕の底部となろう。内面は焼成が不十分なためか剥落が著しい。54は小型壺の底部である。器面はヘラにより簡単な整形となるが、内面は滑らかに仕上げられている。55は高杯の脚部が遺存したもので、裾には4孔が穿たれている。器面は淡い褐色を呈しており、接合部に残された杯部にも赤彩は認められない。

407号 (第77図・第82図67～71、図版41・48) 本跡は4H-76・77グリッドに位置し、溝(486号)の内側に存在していたため遺存状況は良好であった。堆積土も一部に攪乱が認められたものの自然堆積の状況を呈していた。住居跡の形状は方形に近い隅円で、長軸6.6m、短軸6.1mを計測する。主軸方位は単軸上にあり、N-25°-Wを示す。炉跡は北側で15cm、南で10cmの掘り込みが認められ焼土や炭化物が堆積していた。さらに炉跡の土層断面図から焚き口の位置を変更し2期にわたって使用した可能性も否定できない。つまり長期にわたって使用されてきた炉跡といえよう。ピットは5か所にみられ、主柱穴はP1～P4で頗る深い。なお、壁に接して設置されたP5は貯蔵穴となろう。床面は平坦であり、壁に沿って炭化材が散乱するような形で出土した。床面から10cmほど浮いて検出されており、火災というよりも投棄されたものと思われた。

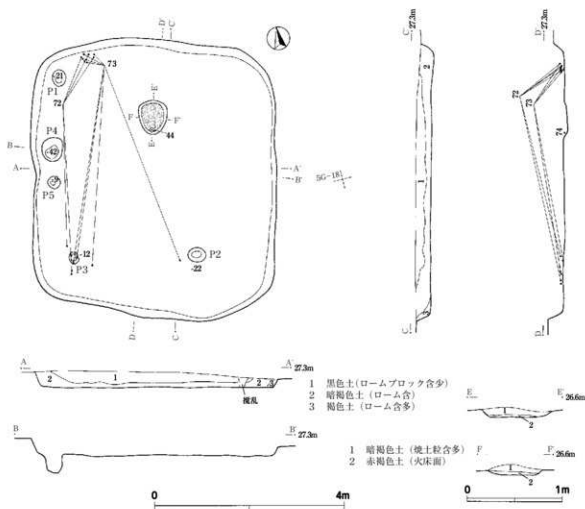
遺物は多く出土しているが、細片がほとんどで形を把握できるものは3点にとどまった。67・68の甕などは本跡に伴うものと考えてよいであろう。

遺物 67は口縁の一部が欠損するのみで全体を把握できる甕である。最大径は胴下部に位置し、器面は刷毛状工具できれいに整形されている。口縁部も刷毛でナデるように整形し、口縁端部には同一の工具で刻み目を密に施す。色調は赤褐色で器面および内部の底面では煤状炭化物の付着がみられる。68は比較的大きな甕で口縁を欠損する。器面は被熱によるものか赤褐色を呈し、あたかも赤彩を施したような鮮やかな



第77図 407号住居跡

色彩となる。器面はヘラ状工具を用いたナデ整形で整えられている。大型品ゆえか分割して製作されたものであろう。胴下部には粘土紐の接合痕を残す。また内面ではヘラによる整形痕が顕著にみられる。69は10数片破片が接合した高杯の杯部で、淡い褐色を呈し、内外面では若干剥落が観察できる。70は小型壺の口縁が約1/3程度遺存するもので折り返し口縁の端部に棒状工具で刺突を加えている。器面はナデにより丁寧に整形されている。71は小型の鉢となろう。口縁から胴部にかけて1/2ほどが遺存したものである。器面の整形はヘラにより乱雑に施されている。

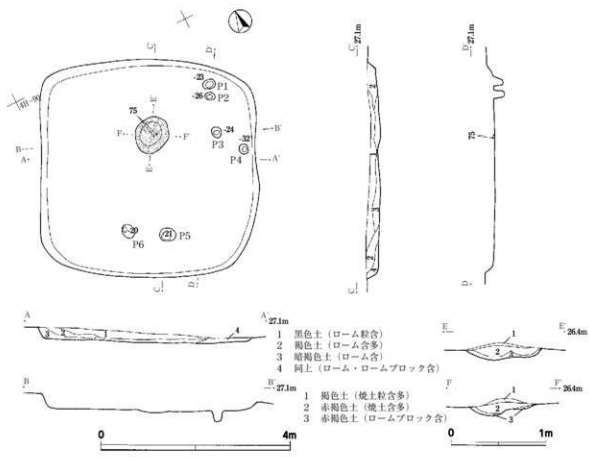


第78図 408号住居跡

408号 (第78図・第83図72~74、図版41・48) 本跡は5G-17・18グリッドに位置し、溝との重複もなく遺存状況は良好であった。堆積土は緩やかに中央部へ流れ込むように堆積している。住居跡の形状は隅四方形を呈し、長軸は5.9m、短軸は5.1mを計測する。主軸方位はN-14°-Eを示す。炉跡は北壁よりに設置され10cmほど床面を掘り込んでいた。堆積土には焼土が多く含まれ床面はよく焼けていた。ピットは5か所で検出できたが、炉跡の東では確認できなかった。P2・P3は主柱穴の位置となるがP3は小規模で12cmと浅い。またP4は貯蔵穴の可能性が高い。床面はよく踏み込まれており、側壁は若干崩れ落ちているところもみられた。

遺物の出土は少なく図示できたものは3点となる。図示したように住居跡の北・南の壁付近で出土しており、投棄された可能性も否定できない。ただ床面直上から出土したため本跡と近い時期の所産とみて間違いない。

遺物 72は大型の壺で胴部が1/3ほど遺存したものである。胴部での最大径は推定37cmとなる。胴上部には撚りの異なる2本の原体を横方向に回転させて羽状縄文を表現する。器面は丁寧に調整が加えられ滑らかな面を呈していた。色調は淡褐色ないし暗褐色で、内面では若干剥落がみられる。73は胴下半部から底部が1/2ほど遺存した甕で、器面はヘラケズリにより整形されている。器内外面は黒褐色で煤状炭化物の



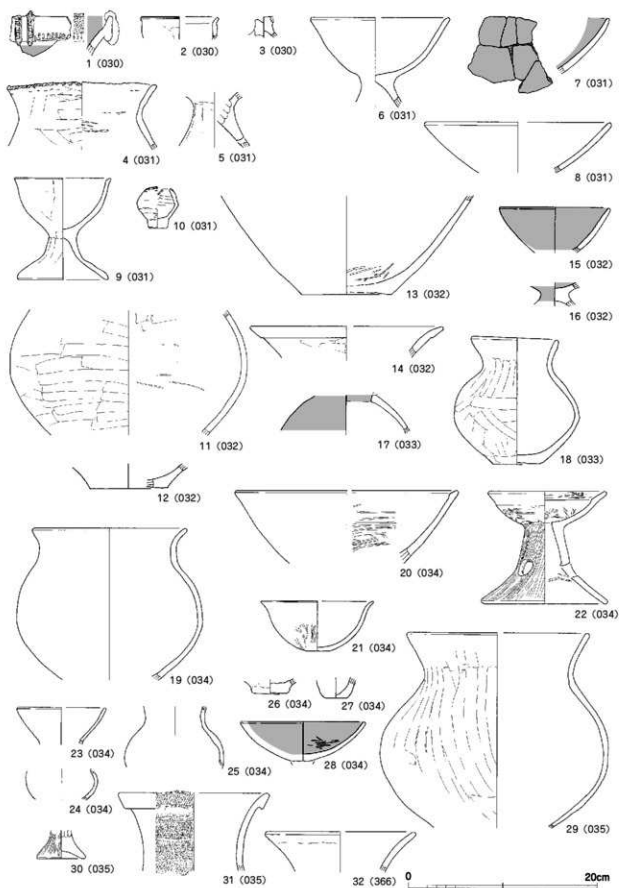
第79図 409号住居跡

付着が顕著に認められる。74は小型壺の胴部片である。胎土及び器面の色調は赤褐色で内外面の剥落が著しい。

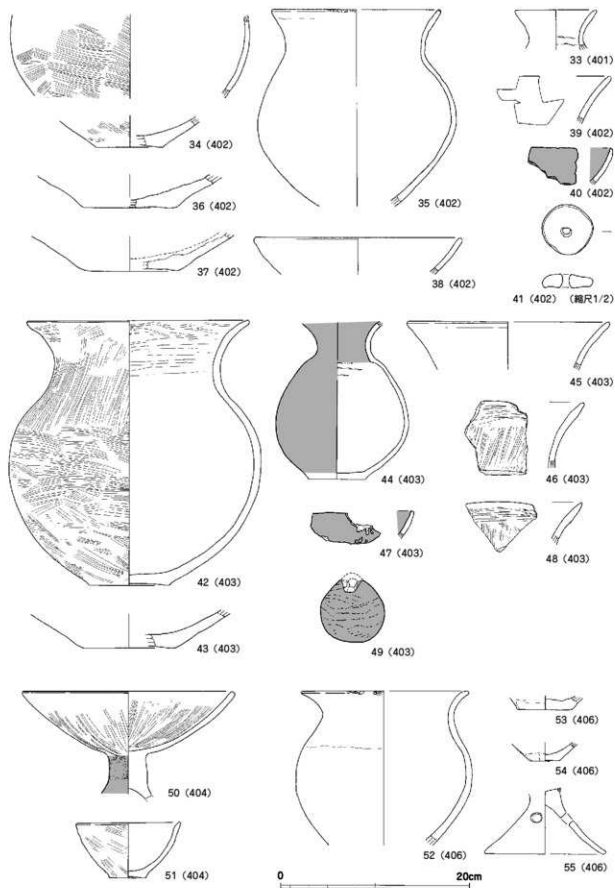
409号（第79図・第83図75、図版41） 本跡は4H-90グリッドに位置し、遺構内では擾乱などもみられず遺存状況としては良好であった。確認面から床面までは浅く、場所によっては10cm程度であったが、覆土は自然堆積であった。住居跡の形状は隅円正方形となり、長短軸ともに4.6mを計測する。主軸方位N-27°-Eとなり、炉跡は中央やや北寄りに位置し、床面を10数cm掘り込んでおり底面はよく焼けていた。ピットは6か所で検出されたが、柱穴としてはP5・P6となろう。床面は平坦で、壁面の立ち上がりはやや傾斜していた。

遺物は少なく、図示した壺片が炉跡上面から出土したほかに細片が10点ほど覆土から出土したのみであった。

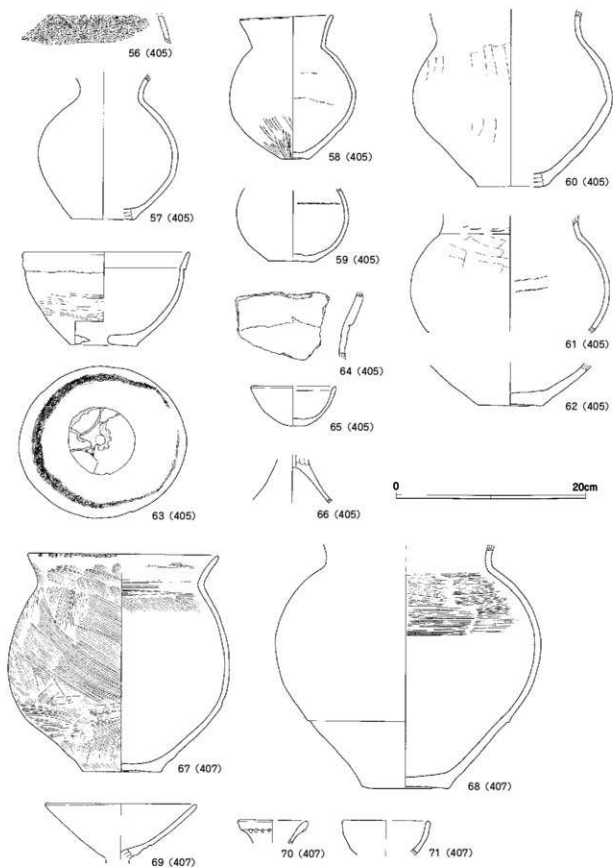
遺物 75は口縁が大きく開く甕で、口唇部を内外面から押捺し小さな波状口縁を作る。このタイプの甕は弥生時代の残影が表現されたものといえよう。器面はヘラにより整形され、色調は器内外面ともに褐色となる。



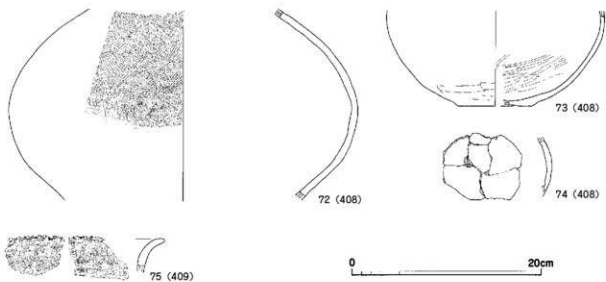
第80図 住居跡出土遺物 (1)



第81図 住居跡出土遺物(2)



第82図 住居跡出土遺物(3)



第83図 住居跡出土遺物 (4)

第5章 奈良・平安時代

第1節 概要

奈良・平安時代に属する遺構は住居跡3軒の検出にとどまった。そのうちの1軒(436号)は北へ延びる台地の先端部に位置しており単独で存在したものであった。一方、ほかの2軒は調査区の南に位置し接近して存在した。いずれにせよ集落構成という様相はみられず、各住居跡は単独で存在していたものと考えてよいであろう。また出土遺物という点からも時期的な推移がうかがわれ、436号は明らかに後出のものとなろう。

第2節 遺構と遺物

199号跡 (第84図・第87図1～4、図版42・48) 本跡は11G-80・90グリッドを中心に検出され、カマド部分の一部に攪乱が認められたものの遺存状態は良好であった。覆土は概ねレンズ状に堆積し、住居跡の形状は長軸が3.9m、短軸が3.4mを計測しわずかの差ながら長方形となる。主軸方位はほぼ北を示しており、いわゆる北カマドの典型となろう。カマドは中央よりやや東に設置され、裾部の砂質土も崩れずに残っていた。火床部はわずかに掘り込まれ内部からスサを混入した土製支脚の一部(4)が出土している。また堆積層は焼土・焼土ブロックが主体であった。ピットは2か所で検出されており、P1は12cm～16cmほど掘り込まれており焼土混入層が認められたため作業用に掘られたものとも思われる。P2の掘り込みは浅く梯子ピットとなろう。壁面は垂直に近い立ち上がりとなり、深さ5cm～6cmの周溝が壁に沿って全周していた。

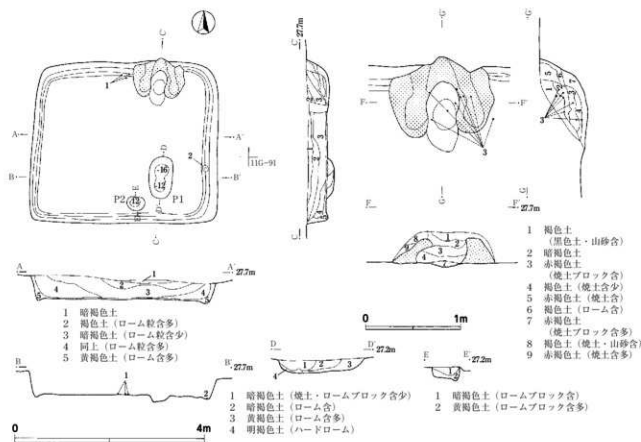
遺物の出土量は少なく、甕と杯2点がカマド及び周溝から出土している。

遺物 1は胴部のみが遺存した甕で、胎土には雲母のほか小石が多く混入されている。胴下部以下では縦方向にヘラによるミガキが施されており、その特徴から常総甕と呼称されるものである。2は完形の土師器の杯で、底部も含めて内外面に赤彩の施されている。ロクロ成形により製作されたもので、底部はヘラ削りにより整形されている。3は須恵器の杯で、約2/3が遺存する。色調は淡い灰褐色で胎土には雲母が多く混入されている。4は土製支脚の一部でありカマド内から出土している。


200号跡 (第85図・第87図5～8、図版43・48) 本跡は11F-77・78グリッドで検出されており、199号の北西に位置する。遺存状況は良好で、堆積土も自然な堆積状況を示していた。形状はやや変形を呈した方形となり、主軸方位はN-28°-Eを示す。カマドの遺存も良好で東側袖部に接して6・7・8の土師器が出土している。なおカマド内からは破損した土製支脚の一部が出土した。ピットは6か所で検出されており、P1～P4は主柱穴となろう。P5は小規模で浅く梯子ピットと考えられる。壁はほぼ垂直に近い立ち上がりで周溝が巡る。

出土遺物は土師器のみでP1とP4の間で小型の甕が床面に接して出土した。いずれの土器も本跡に伴う遺物とみてよいであろう。

遺物 5は小型の甕で口縁部の一部を欠損する。小型ながら器厚は8mm前後と厚く頑強な作りである。器面の整形はヘラケズリにより整えられているが、口縁部では軽く横にナデを加えただけで輪痕を残す。



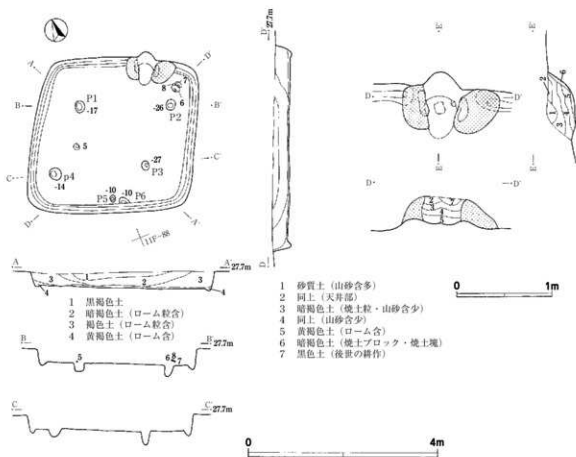
第84図 199号住居跡

器面は赤褐色を呈し底部では黒褐色となる。6は高台の付いたほぼ完形の椀である。口縁部では横ナデ、体部ではヘラケズリ後に若干のミガキ調整を加えている。高台は整形後に接合されたもので、接合部ではヘラ痕が顕著に認められる。器面の仕上げは粗雑なものであるが、内面は丁寧なミガキ調整で仕上げられている。色調は褐色ないし赤褐色となる。また体部には墨書が認められるものの一部欠損しており判然としない。7は椀形を呈した杯で、口縁にわずかな欠損がみられる程度ではほぼ完形品といえる。口縁に輪積痕を残すものの器内外面の整形や仕上げは6と類似しており同一人の製作を思わせる。色調は褐色で体部から底部にかけて黒斑を残す。8は接合により完形品となった蓋である。内径は19cmとなり、6の高台付椀の外径と合致するため2点を組み合わせて使用した可能性が高い。さらに器面には図示したような墨書「」が認められる点も共通といえよう。色調や整形・調整も6と類似したものである。前出の住居跡出土土器も含めて、これらの土器群は概ね8世紀後半に位置づけられよう。

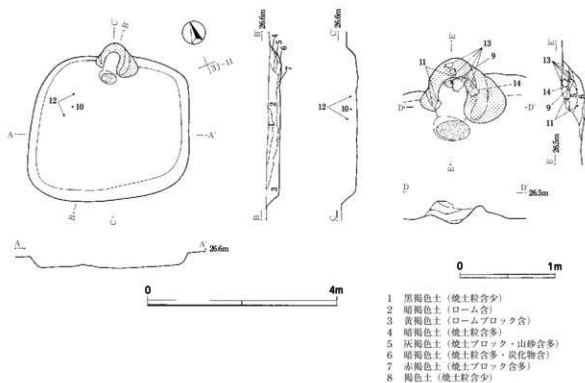
436号跡 (第86図・第87図9~14、図版44・48) 3J-10グリッドに位置し、遺存状況は比較的良好といえた。覆土もレンズ状に堆積し自然な埋没を示すものであった。住居跡の形状はやや横長の隅円方形となり、長軸3.4m、短軸3.1mを計測する。主軸方位N-13°-Eを示し、カマドの形状は把握できた。柱穴は遺構自体が小さいため検出できなかった。壁の立ち上がりはやや傾斜しており、周溝は検出できなかった。

遺物はカマド周辺で多くみられたが、完形品は皆無であった。

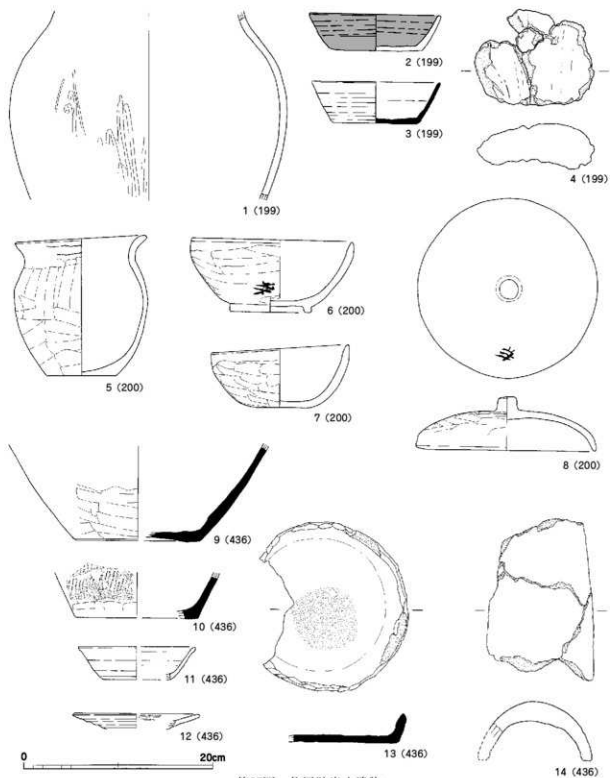
遺物 9は須恵器の甕で、底部が1/3ほど遺存したものである。器面はヘラにより整形されている。10も須恵器の甕で叩き目痕がみられる。11はロクロ成形の杯で、焼成は土師器に近く底部を欠損する。12は皿



第85図 200号住居跡



第86図 436号住居跡



第87図 住居跡出土遺物

形の土師器で、内面はよく研磨されている。13は須恵器甕の底部であり、意識的に周囲を打ち欠き硯として再利用したものである。中央部は滑らかでわずかに墨痕を思わせる煤状の炭化物が付着している。14は丸瓦の破片で、胎土には小石や白色の鉱物が多量に含有されており、裏面には布目痕がみられる。カマドから出土しており支脚として使用されたものであろう。本跡で出土した土器群は9世紀の前半となろう。

第6章 中世・近世

第1節 概要

中世に属する遺構としては、第37図・第38図に示したように方形竪穴・地下式坑・土坑・溝・掘立柱建物跡など多岐にわたる遺構が検出されている。それらの中には一部近世に属する遺構もみられたが、ほとんどは中世に営まれたものと考えられた。とりわけ注目できる遺構として方形竪穴をあげることができよう。後述するように40基以上が検出されるとともに溝や掘立柱建物跡なども含めて総合的にみれば中世村落の一つの形態を垣間みることができたといっても過言ではなからう。ただ土坑については遺物の出土がみられず、その時期を決定づけるまでには至らなかった。また出土遺物についてみても13世紀後半から14世紀に生産された瀬戸産の片口鉢や常滑産の大甕がみられ、出土量としては多くはないものの本地域の空白時期を満たすような希少な遺物がみられた。一方、近世遺物は僅少で図化した磁器のほかは数点の陶磁器が出土したのみであった。

また、本遺跡では時間的に幕末頃から近代にかけて作られた炭窯も多数検出できた。他では貯蔵のためのイモ穴などもみられたが、炭窯も含めて確実に当該期の遺構としてとらえることができないものについては全測図には加えたが遺構番号などは省略した。

第2節 遺構と遺物

1 方形竪穴（第88図～第92図・第107図1～6、図版49～52・65）

方形竪穴は第38図に示したように、9G区で集中的に検出されている。これらの中には019号～024号例のように狭い地域に重複して設けられている場合も数例認められた。このような検出例から考えると、9G区周辺では中世の一時期継続的に方形竪穴が作られてきたようである。そこで、本節では重複した遺構や遺物が出土した遺構などについてのみ説明を加え、その他のものについては形状・堆積土などを記した一覧表に譲りたい。

019号～024号 本方形竪穴群は9G-88・89グリッドで検出されたもので5基が重複していた。堆積土はいずれも同様な土層であり、その層順から新旧関係を把握するまでには至らなかった。掘り込みの深さから推測すると、020号・021号は019号の一部を掘削して作られていた。また堆積土の観察から自然堆積を裏付けるようなレンズ状の堆積は認められず、ロームブロックがほぼ全層でみられたため意識的な埋め戻し行為があったものと思われた。施設内部についてみると、床面は平坦で024号以外には周溝が巡り、023ではピットが穿たれていた。

遺物（図版65-7・8） 遺物は024号跡の覆土中から出土したもので、いずれも壺の破片である。色調はともに青灰色を呈しており、8の器面では炭化物の付着が認められる。

022号 本跡でも重複関係が認められたためa・bの2基とした。ただb号の掘り込みは他と比較して浅い。a号では浅いピットとともに周溝が認められ、床面はほぼ平坦な面となっている。

026号・027号 本跡は周溝の有無と堆積土による新旧関係から4基の方形竪穴が重複したのと考えられた。ここでも026a号と027号には周溝が認められた。またピットも計9か所に穿たれており、026a号

では周溝部にみられる。これらのピットは026 a号の柱穴としてとらえることが妥当であろう。なお、堆積土にはロームブロックが多く含まれており、自然堆積によるものではない。

054号・059号 いずれも周溝を有する方形堅穴で、重複部分の床面は若干掘りくぼめられていた。堆積土についてみると、順序よく堆積しているようであるがロームブロックの大きさにより区分しており、埋め戻し行為を示唆するものであった。

067号・068号 10G-07・17グリッドにかけて位置し、067号の北側と068号の南側の一部が互いに切り合うような形で検出された。このため新旧関係を把握するまでには至らなかった。067号では周溝は認められなかったが整然とした長方形で床面も平坦なものであった。068号での周溝は全周に近い。ここでの堆積もロームブロックが全体にみられた。

411号 唯一遺物を出土した方形堅穴で、南壁側面では施設に付随するかのよう浅い掘り込みがあり、南西コーナーには一段深い掘り込みが認められた。全体の形状は台形に近く、北壁に沿って焼土混入層が床面から10cmほどの厚さで堆積していた。また堆積土は第5表に記したように黒色土やロームブロックを混入した土層で構成されており、自然堆積か人為的な堆積か判別し難かった。

遺物は3の大甕底部片が床土20cmの高さで出土しているが、ほかは覆土上層において出土したものである。

遺物(第107図1～6) 1と4は片口鉢となる。1は底部を欠損するが、口縁から底部近くまで約1/4を遺存する。口唇部を段状に製作しているところが特徴的である。底部にはヘラによる整形痕を残す。色調は青灰色で胎土には小石の混入がみられる。内面ではわずかに白色の自然釉が認められる。口唇部の特徴から14世紀を前後する瀬戸産と思われる。4は口縁部片であり、1と同様な作りとなる。自然釉は口縁部で顕著にみられる。ただ口縁は隆帯状に鮮明に製作されており、前者よりも後出のものと思われる。2は大甕の底部で、器面は灰赤色に変化している。底面は平坦となり、内面にはオリーブ色の自然釉が付着する。3は底部から大きく開く大甕の底部片で、底部には砂が付着し凹凸が著しい。5は大甕の胴部片で溝(486号・487号)でもその一部が出土した。器面はきれいな赤褐色で光沢を帯び、内面は灰赤色となっている。6は密に入れた叩き目から須恵器の大甕片となろう。中世に再利用されたようで左側面では磨耗が著しい。いずれも常滑産と思われる。

412号 本跡は3基が重複したもので、それぞれ南から時計回りにa・b・cとした。新旧関係についてみると、層序などからc→b→aの順に作られたようである。周溝についてみると、aでは浅い溝ながらも全周しており、b・cではみられない。床面は3基とも平坦な面であった。

413号 5H-02・03に位置した本跡は、本遺跡において検出できた方形堅穴のうち最大規模を有するものであった。やや台形さみであり、一部に浅い周溝が巡る。堆積土は一応分層したが、すべてロームブロック混入層であり意識的な埋め戻しと考えられた。

以上が調査により検出された方形堅穴となる。これらを規模と内部施設として設けられた周溝の有無をもとにまとめると第93図のようになる。その性格については次章で若干触れてみたい。

2 地下式坑(第94・106図、図版53・66)

ここでは以下の3基を地下式坑として分類したが、いずれの遺構も掘り込みは深く、平面形が一定せず方形堅穴として分類できないため一括して地下式坑とした。

012号 012号・013号は第38図に示したように368号の内側に位置し、互いの一部が重複するような形で検出された。012号の平面形は不整の隅円長方形を呈しており、長軸は4.7m、短軸は2.8mを計測する。ま

た長軸方位はN-63°-Eを示す。検出面からの掘り込みは1.4mとなり、底面部は若干の凹凸がみられた。柱穴を思わせるピットは3か所に穿たれており、深さは15cm~28cmを計測する。さらにピット間には深さ5cmほどの周溝が確認できた。堆積土についてみると、覆土上半部はレンズ状の堆積を示しており人為的な埋め戻しはなかったようである。以上のような点を考慮すると、形状からここでは地下式坑として分類したが前述した方形竪穴と共通する点も見出せる。

遺物 (図版66-7・22) 関連遺物としては中世陶器である壺と大甕片が2点出土している。いずれも覆土中から出土しており、7は口縁部から肩部にかけて約1/3が遺存するもので、口縁端部の整形は粗雑である。器内外面は青灰色を呈しており、口縁内面と肩部には白色で胡麻粒状の自然釉が付着している。

013号 本跡の北側コーナーが012号と接していたが、土層断面の観察では新旧関係は把握できなかった。平面形は深い部分ではほぼ方形を呈していたものの、長軸に沿って階段状の掘り込みが認められ地下式坑のような形態を示していた。長軸は階段部を含めて4.0m、短軸は中央部で2.6mを計測する。長軸方位はN-60°-Wを示す。検出面からの掘り込みは約2mと深いものであった。底面部は平坦で、堆積土の層順からは自然堆積とみなされた。

遺物 (図版66-8・23) ここでも陶器の大甕片が2点出土している。8は覆土中層から出土したもので、器内外面が青白色を呈した大型甕の胴部片となる。器面は2cm幅の板で叩かれており須恵器の叩き目を想起させる。また器面上部には012号出土品にみられる白色で胡麻粒状の自然釉が認められる。裏面の整形は粗雑で粘土紐の接合部では凹凸が多々みられる。器面の特徴などから常滑産となろう。23は小破片で同様な色調を呈していた。

370号 本跡は012号・013号よりも南東に35mほど離れた10H-53グリッドで検出されたもので、天井部が確認できた唯一の遺構である。ここでも階段状の施設が認められ、形状は長軸が4.6m、短軸で1.2m~1.3mを計測し階円形を呈している。確認面からの深さは1.4m~1.5mで底面は平坦な面を形成していた。堆積土については具体的に記さなかったが前2基とほぼ同様なものであった。なお、遺物の出土は認められなかった。

3 土坑 (第95~103図、図版54~60)

本遺跡で土坑として取り扱った遺構は合計190基を数える。これらの中には明らかに重複している場合もあり、総数としては約200基となろう。検出状況についてみると、第36図に示したように9G区で集中的に検出された方形竪穴群の周辺に多くみられた。その形状は円形や楕円形を呈したものが多く、次いで隅円方形・隅円長方形といったタイプがみられた。さらに029号などのように方形を呈し周溝も認められるため竪穴方形としてとらえることも可能である遺構も規模が小さいためにここに加えた。065号や070号もその形状からみれば方形竪穴とも考えられるが、掘り込みの深さや規模などを考慮して土坑として一括した。また堆積土についてみると、第6表に示したようにロームブロックを混入する層が多くみられ、人為的に埋め戻していると思われる土坑が主体を占めていた。

一方、遺物についてみると、これらの土坑から出土した遺物は皆無であったため所属時期を決定するという点では根拠に欠けるところもある。しかし他の中世遺構と関連するものも少なくはないと考えてここで取り扱うこととした。

なお、これらの土坑群については、第6表のとおり一覧表として整理したため詳細な記述は省略することとしたい。

4 溝 (第37・38・104・105・107図、図版61～64・66)

溝は第37図・第38図に示したように大きく2か所で検出されている。調査区北側では4G区・5G区と4H区・5H区で486号・487号・488号の3条が存在し、南側では8G区～13G区のラインを中心に001号～368号まで14条が認められた。これらの規模などについては第7表にまとめたとおりである。ただ8G区に関しては2条～3条が存在するものの遺構番号は省略した。以下、各溝について簡単に触れておく。

001号 本跡は8G区の北東隅から9H区を抜け、9I区に至る。その後は東斜面部へと蛇行しており、そこで痕跡は消滅する。溝の幅は3.5mと広く、底面には1.5m間隔で50cmほどの掘り込みが連続的に認められる。このような掘り込みは後述する062号でも確認されており、9H区において重複関係の認められる017号を削平するようにならされているため、017号や018号よりも時期的に新しい溝としてとらえることができよう。

遺物 (第107図9・10) 図示した2点のほかには大甕の小破片が1点出土している。9は常滑産大甕の頸部で上部には軸葉を掛けたような暗赤褐色の発色が見られる。以下は白色の自然軸へと変化する。焼成は堅緻でしっかりした作りとなっている。10は胴上部片で大きく張り出した胴部の作りが特徴といえよう。器内外面は褐色を呈し裏面では叩き痕が楕円状に残る。それらの特徴から常滑産といえよう。

002号・003号 本跡は台地の中央部にあたる9G区から9F区を経て11E区で消滅しており、9F区から11E区においては003号と重複している可能性もある。しかし重複部では002号の掘り込みが明確ではなかったため、両溝の前後関係について明確にとらえることはできなかった。一方、003号は重複部から東に方向を変え10G区の南東隅にまで続く。

遺物 (図版66-24) 002号としては図示していないが、大甕片が3点出土している。そのうちの1点である24は頸部の小破片で、001号出土の9と同様部分的に暗赤褐色の色彩が見られる。器面は褐色で、胎土は13mmと厚く焼成が不十分で内部の色調はにぶい橙色となっている。

003号でも大甕の小破片が4点出土した。そのうちの2点を図版に掲載(写真図版66-25・26)したが、25は青灰色を呈した胴部片で器厚は10mm前後となる。器面にはヘラによる整形が認められる。26の器面は暗褐色に変化している。器厚は6mm前後と薄く、常滑産となろう。

004号 本跡は9G区内で終始する溝で、一部が002号と直交するような形で重複していた。重複部での堆積土観察から002号よりも新しく掘られたものであった。

015号 本跡は9G区と9H区にかけて所在する小規模な浅い溝である。また遺構番号は付さなかったが、本跡の南に所在する竪穴住居跡(035号)を掘削して小規模な溝が検出されている。

017号 8G区の南隅を起点として9H区へと続き、001号の掘削により消滅している。おそらく東の谷部に向かって延びていたものであろう。

遺物 (第107図19～21) 本跡では8G-97グリッドの覆土中から3点の土鏝が出土している。19は長さ58mmを計測し、色調は淡褐色を呈している。ほかの2点は黒褐色ないし黒色となる。いずれも下部端では使用によるものか磨耗が著しい。

018号 本跡は10G区で003号と交わり吸収されていくように消滅する。前後関係については明確にすることはできなかったが、10G区にみられる溝の底面は2条存在しており、本跡もまた東の谷部に向かっていった可能性もある。

遺物 (図版66-11・27) ここでは図示した片口鉢のほかには3点の大甕片が出土している。11は口縁部が

9 cmほど遺存したものである。口縁はわずかに丸味を有した作りとなり、器面ではロクロ成形痕ととも輪積の痕跡を残す。色調は灰オリーブ色で、裏面には白色の自然釉がみられる。时期的には13世紀後半から14世紀の所産となろう。また破損部の一辺には磨耗痕が認められるため砥石として使用されていたようである。27は青灰色を呈した9 mmほどの器厚をもつ大甕の胴部片で、裏面は斑状に暗赤褐色化している。常滑産となろう。

061号・063号 本跡は調査区の南にあり、平坦な台地を東西に横断するような形で検出されており最終的には東の谷津へ向かう。この間、063号と約20mにわたって重複しており、この部分の調査では062号を掘削後に063号が掘り込まれていることが確認できた。なお、西側台地上での調査は区域外となっていたため途中で断念せざるを得なかった。

062号 本跡もまた東の谷津部へと続く大きな規模の溝であり、底面にはビット状の掘り込みがみられる。その構造は001号と共通しており、溝を掘削した目的も同様なものと理解してよいであろう。なお、11F区・12F区においては063号と重複し、これを削平して構築されている。このため削平の順序を考えると、061号→063号→062号ということになる。

320号 本跡は11G区・12G区にかけて検出された溝であり、061号によって消滅を余儀なくされている。また見方を変えるならば、061号の掘削時に従来存在していた本跡を利用するような形で東方向の谷津部へと導いたものと図上では解釈できる。重複する地点から大きく南方向に進路を変えていることはその証左といえよう。いずれにせよ最古の溝としてとらえることができよう。

326号 本跡は掘り込みが浅く堆積土も軟弱であったため10F区の調査を持って終了した。

358号 本跡は11G区において検出された小規模な溝で、長さも5 mに満たないものであった。そのため記録は位置だけにとどめた。

368号 本跡は9G区・9H区で検出された長さ12mほどの短い溝で、9G区の南東隅に所在する方形竪穴群を囲うようにやや湾曲するような形状を呈している。

遺物 (図版66-28) 方形竪穴(301号)から出土した小破片が接合した大甕片である。色調は青灰色で器厚は11mmほどとなる。器面は刷毛状工具で丁寧に調整されている。

486号 本跡は4G区・5G区から4H区を経て、4I区の南西隅をかすめるように東斜面に向かい消滅していく。特に4H区に所在する底面にはビット状の小穴が穿たれており、柵状施設が存在が想定される。また溝は402号・403号といった古墳時代の住居跡を削平して構築されていた。しかも内側には10基ほどの方形竪穴がまとまって存在しており、溝と方形竪穴の関連を示唆するかのようである。

遺物 (図版66-12-15) 12・13は片口鉢の口縁部である。12の色調は青灰色となり、口唇の中央にくぼみを有する特徴的な作りとなる。14世紀前後の瀬戸産となろう。一方、13は素焼きで器面の色調は17に近似し明褐色を呈している。12と同様口唇部に浅いくぼみをもつが、産地は常滑の可能性もある。14は大甕の胴部片で、器面はオリーブ色の自然釉で覆われる。側面は著しく磨耗しており破損後は砥石として使用されていたものであろう。15は器面が赤褐色に変化した大甕片で、487から出土した破片と接合した。また前述したように方形竪穴(411号)から同一個体片が多量に出土している。

487号 本跡は486号の内側に掘り込まれた短い溝で重複することなく収束する。遺物の出土は前述したとおりである。

488号 本跡は5G区・5H区内に収まる溝であった。溝中の5H-43グリッドでは土坑、5H-53グリッ

下では方形の掘り込みがみられたが、その堆積土からいずれも後世のものであった。

490号 6C区～9C区にみられる溝で近世の野馬土手に伴う溝であり、調査区内において確認された部分の調査にとどまった。

5 井戸状遺構（第103図）

369号 本跡は調査区中央部東寄りの8G-68・78グリッドで検出されたものであり、平面形はほぼ円形を呈し次第に楕円形へと変化する。開口部の長径は1.6m、短径は1.4mを計測する。遺構確認面からの深さは約2.2mに及び、底面は武蔵野ローム付近まで掘り下げられていた。堆積土をみると、上部は黒色土が主体となり、下部では暗褐色土に変化しており自然堆積を示すものであった。なお、遺物の出土は認められなかったため確実な時期を把握することはできなかったが、中世遺構の一郭をなすものと考えられた。

6 掘立柱建物跡（第105・106図）

掘立柱建物跡は南北に延びる調査区のはほぼ中央にあたる10G区と9G区において規則的に位置するピット群によりその存在が確認された。遺構番号が付されていなかったため整理作業の段階でそれぞれをSB001・SB002とした。また周辺では大甍の小破片が若干出土しているが、確実に遺構に伴う遺物の出土は確認できなかった。しかし調査によって確認された方形堅穴や溝とともに中世遺構の一部であったと考えることが妥当であろう。なお、第105図のピット脇に書き込んだ数値は確認面からの深さを示した。

SB001 本跡は10G-15・25グリッドを中心に検出されたピット群で、その位置から推察すると建て替えられた可能性が強いものである。その前後関係については確認できなかった。柱穴と考えられるピットは確認面から計測すると、すべて20cm以上の深さを有しており開口部での大きさもほぼ一定となっている。なお、ピット間の間隔はP1～P2、P2～P3間では1.1m、P1～P7、P6～P7間では1.5mを計測する。一方、P1～P8、P9～P10では3.6m、P1～P10、P8～P9では2.2mとなっており掘立柱建物跡としてとらえてよいものと考えられた。

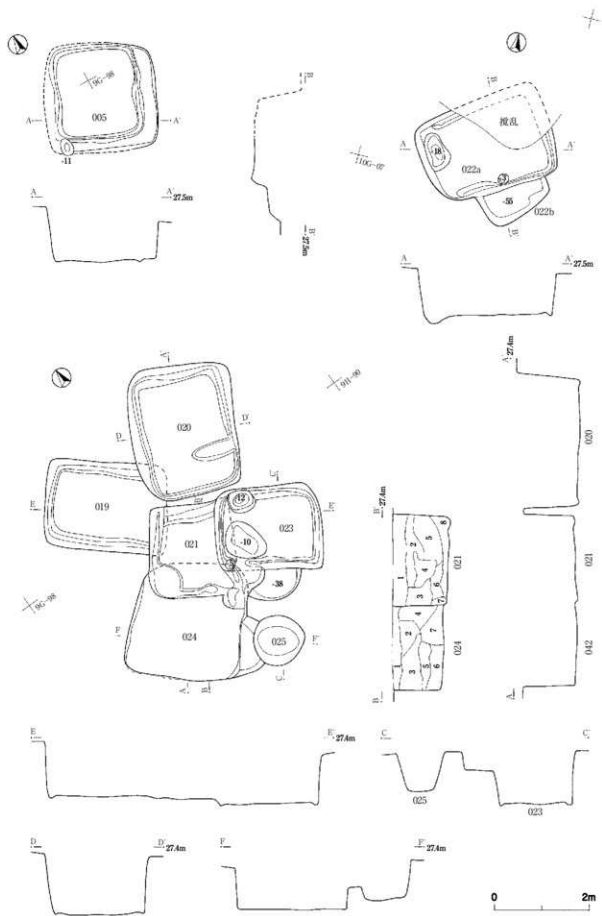
SB002 本跡は9G-25・35グリッドを中心に検出されたピット群で、掘り込まれた深さについては深浅様々である。P1は10cm、P4は19cmと浅く、P3は63cmと深い。ピットの間隔は図示したように一定ではない。ただP1・P7・P6間とP2・P3・P4間の距離は5.0mで一致している。またP8・P9・P10については、それぞれの掘り込みが20cm以上を有しており柱穴と考えて差し支えなからう。つまり掘立柱建物跡本体に伴う庇と考えたい。

7 グリッド出土遺物（第107図16～18、図版66）

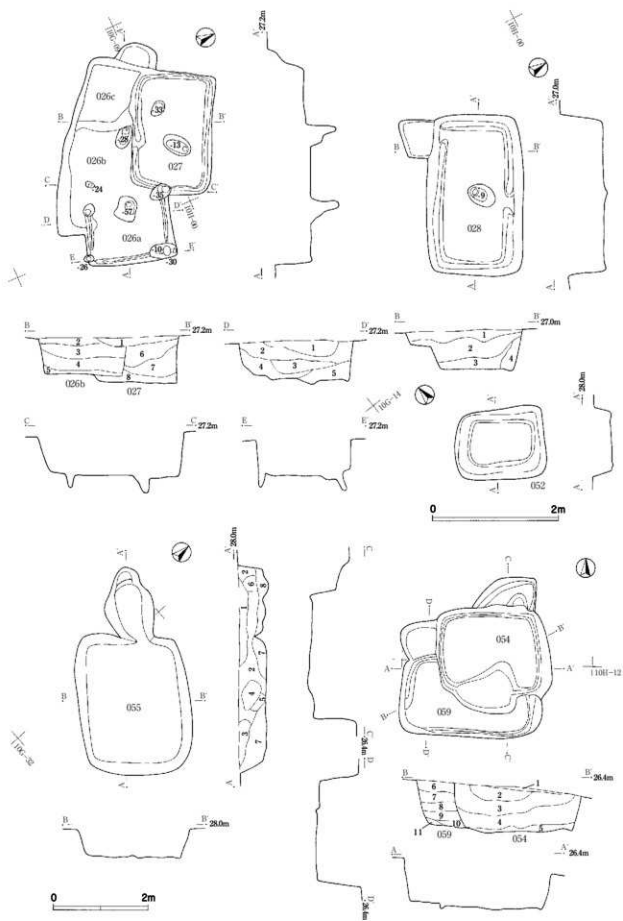
グリッド出土の遺物として3点を図示したが、このほかにも10点ほどの中世陶器が出土している。しかし近世磁器の類は僅少で図示した磁器以外には数点の唐津系陶器と肥前系磁器の小片が出土したにすぎず、主体は中世陶器によって構成されていた。

16は瀬戸産の片口鉢となろう。底部が1/3ほど遺存したものである。口縁部は欠損しており、体部は大きく開いて立ち上がる。底部付近にはヘラ整形の痕跡を残し、高台が付随する。色調は青灰色で胎土には小石が多くみられる。17も片口鉢であり、底部の作りから常滑系と思われる。器面にはヘラ痕を残し、内面にはロク口痕が明瞭に残る。底部は平底で凹凸が著しい。器面の色調は褐色で、裏面では褐灰色を呈している。18は肥前系磁器の茶碗で器面には草花文が描かれている。

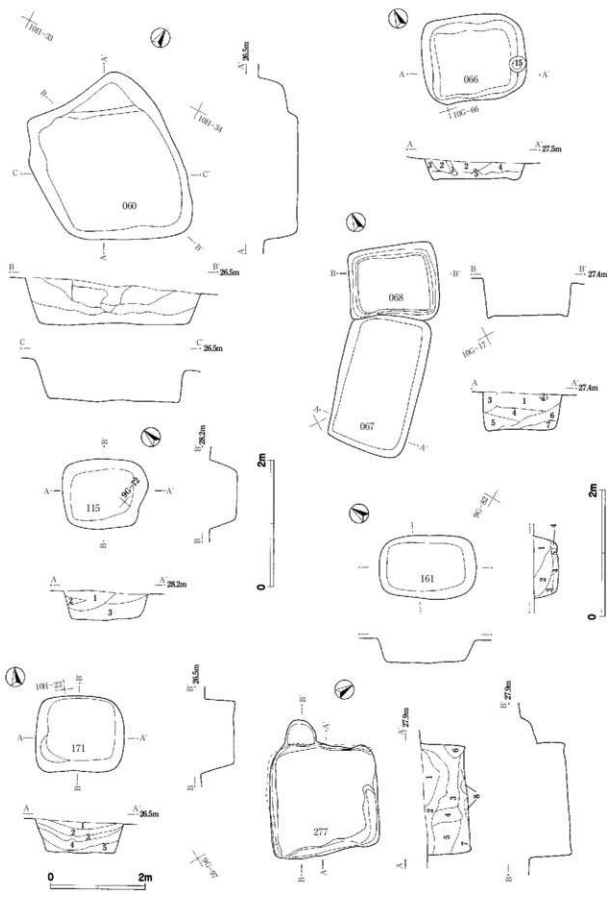
なお、その他のグリッドについてみると図示したような陶器が9G区・10G区を中心に30片ほど出土しているが量的にも多いものとはいえなかった。



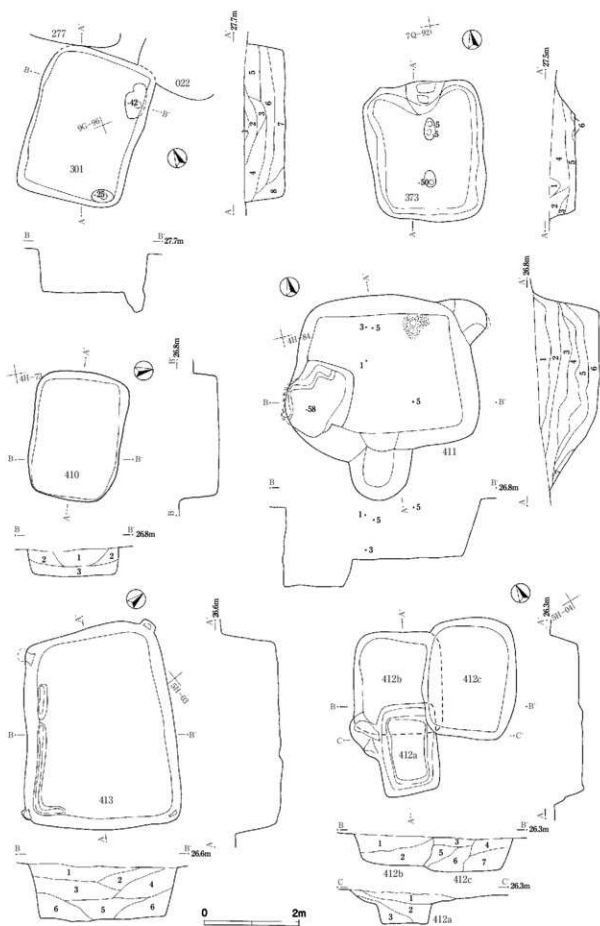
第88图 方形竖穴 (1)



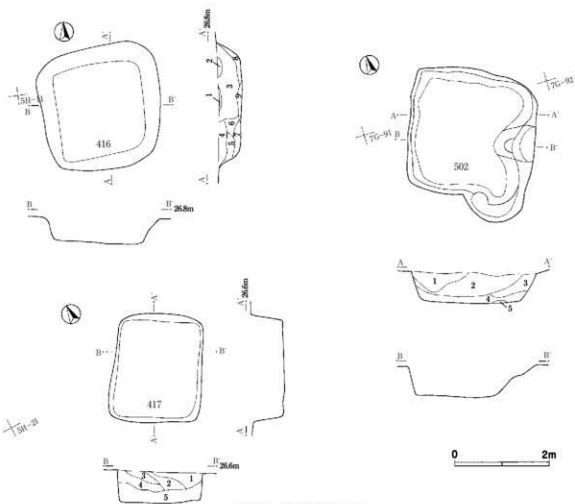
第89图 方形竖穴(2)



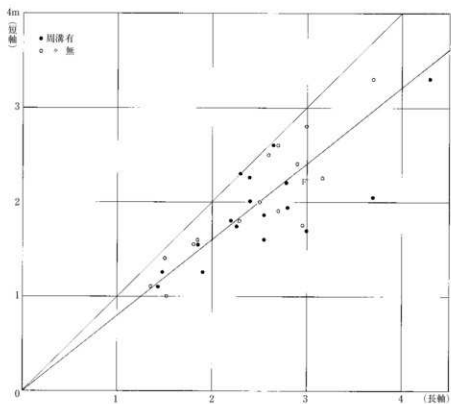
第90图 方形竖穴(3)



第91图 方形竖穴 (4)



第92図 方形竪穴 (5)



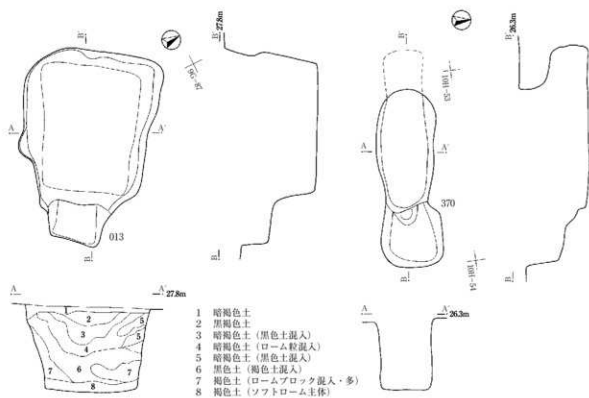
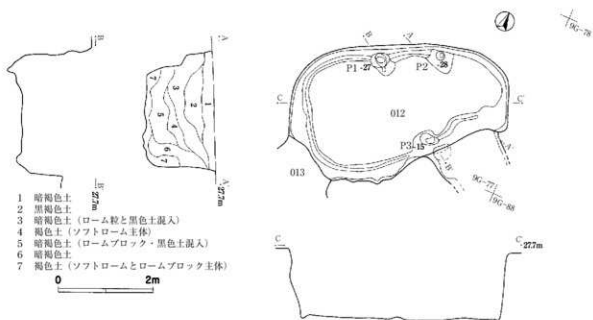
第93図 方形竪穴の規模と周溝の有無

第5表 方形竪穴一覧

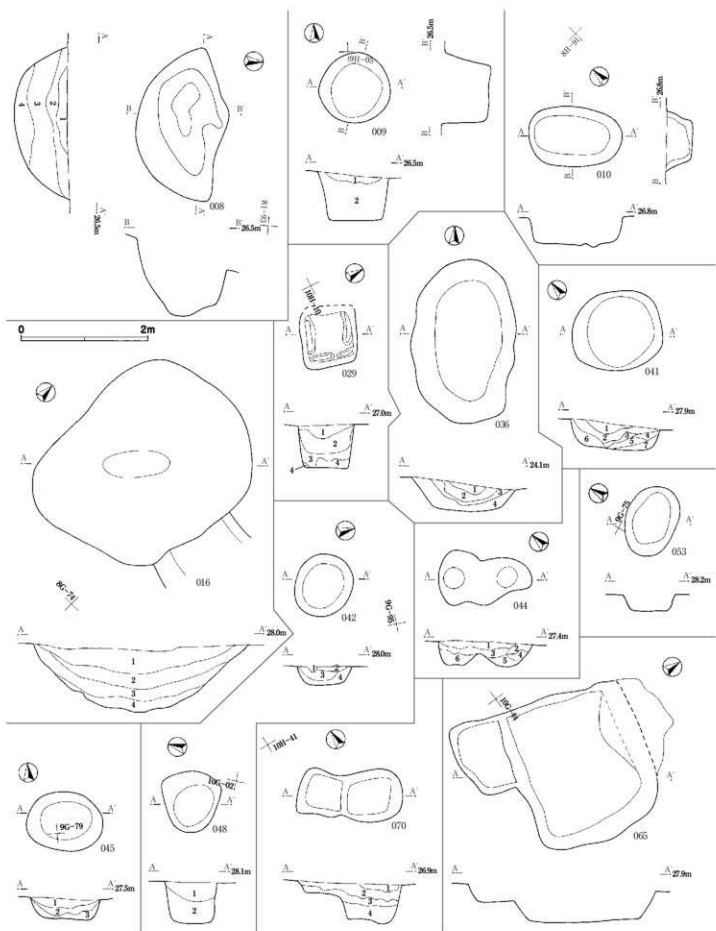
遺構番号	検出地点	長軸・短軸・深さ (cm)	主軸方位	堆 積 土	備考(遺物など)
005号	9 G-98	230・230・115	N-61°-W		周溝、ビットあり
019号	9 G-88	255・186・115	N-48°-W		周溝あり
020号	9 G-89	278・220・132	N-25°-W		周溝あり
021号	9 G-98	-・195・118	N-°-°-W	1 黄褐色土・ロームブロック混入 2 暗褐色土・ロームブロック混入 3 黄褐色土・ロームブロック混入 4 褐色土・ロームブロック混入 5 暗褐色土・ローム粒混入 6 黄褐色土・ロームブロック(3cm)混入 7 暗褐色土・ロームブロック(5cm)混入 8 黄褐色土	周溝あり
022a号	9 G-97	280・194・100	N-55°-E		遺物出土、周溝、ビットあり、一部損壊
022b号	9 G-97	-・150・55	N-°-°-W		022a号と重複
023号	9 G-99	226・174・105	N-57°-W	褐色～暗褐色土でロームブロックを多く含む	周溝、ビットあり
024号	9 G-98	-・240・88	N-°-°-W	1 黄褐色土・ロームブロック混入 2 褐色土・ローム粒混入 3 褐色土・ロームブロック(5cm)混入 4 褐色土・ロームブロック混入 5 暗褐色土・ロームブロック混入 6 暗褐色土・ロームブロック(3cm)混入 7 暗褐色土・ロームブロック(5cm)混入	遺物出土
026a号	10G-99	-・180・90	N-°-°-W		周溝、ビットあり
026b号	10G-99	240・-・88	N-°-°-W	1 暗褐色土・ロームブロック混入 2 黄褐色土・ローム粒混入 3 褐色土・ロームブロック混入 4 褐色土・ロームブロック(2cm)混入 5 褐色土・ロームブロック混入(少)	ビットあり
026c号	10G-99	-・-・75	N-°-°-W		一部のみ確認
027号	9 G-99	255・160・96	N-63°-W	6 黄褐色土・ロームブロック(2cm)混入 7 褐色土・ローム粒混入 8 褐色土・ロームブロック(5cm)混入	周溝、ビットあり
028号	10H-00	370・205・105	N-57°-W	1 黄褐色土・ローム粒混入 2 褐色土・ロームブロック混入 3 暗褐色土・ロームブロック混入 4 褐色土・ロームブロック混入	周溝、ビットあり
029号	10H-10	-・115・82		褐色土が主となりロームブロック混入	検乱が多く、図化略
052号	10G-14	143・110・30	N-56°-W		周溝あり
054号	10H-02	240・200・105	N-90°-W	1 黒褐色土 2 褐色土・ロームブロック(5cm)混入 3 褐色土・ロームブロック(5cm)混入(少) 4 褐色土・ロームブロック(2cm)混入(少) 5 褐色土・ロームブロック(5cm)混入	周溝あり
055号	10G-22	290・240・55	N-50°-W	1 褐色土・ロームブロック(1cm)混入 2 褐色土・ロームブロック(3cm)混入 3 褐色土・ロームブロック(1cm)混入 4 褐色土・ロームブロック(10cm)混入 5 褐色土・ロームブロック(3cm)混入 6 暗褐色土・ロームブロック(3cm)混入 7 褐色土・ロームブロック(10cm)混入 8 褐色土・ロームブロック(5cm)混入	土坑状の付帯施設あり

059号	10H-12	300・170・100	N-90°-W	6 褐色土・ローム粒混入 7 褐色土・ローム粒混入(少) 8 褐色土・ロームブロック混入(少) 9 褐色土・ロームブロック、炭化物混入(少) 10、褐色土・ロームブロック混入(少) 11、褐色土・ロームブロック(5cm)混入	周溝あり
060号	10H-33	300・280・96	N-55°-E	1 褐色土・ロームブロック(2cm)混入 2 褐色土・ロームブロック(1cm)混入 3 褐色土・ロームブロック(3cm)混入 4 褐色土・ロームブロック(5cm)混入 5 褐色土・ロームブロック(3cm)混入 6 褐色土・ロームブロック(1cm)混入	重複の可能性あり
066号	10G-56	220・180・40	N-75°-W	1 黒色土(攪乱) 2 褐色土・ロームブロック(1cm)混入 3 褐色土・ロームブロック(3cm)混入 4 褐色土・ロームブロック(5~10cm)混入 5 褐色土・ロームブロック混入(多)	東壁に沿ってビット 1か所 周溝あり
067号	10G-17	296・175・80	N-41°-E	1 褐色土・ロームブロック(2cm)混入 2 ロームブロック 3 暗褐色土・ロームブロック、炭化物混入 4 褐色土・ロームブロック(2cm)混入 5 暗褐色土・ロームブロック(3cm)混入 6 暗褐色土・ロームブロック(10cm)混入 7 褐色土・ロームブロック(2cm)混入	
068号	10G-17	185・155・78	N-67°-W		周溝あり
115号	9G-71	135・110・45	N-47°-W	1 暗褐色土・ローム粒混入 2 褐色土・ロームブロック(1cm)混入 3 褐色土・ロームブロック(3cm)混入	
161号	9G-82	152・100・40	N-28°-W	1 褐色土・ローム粒とロームブロック混入 2 褐色土・ロームブロック(1cm)混入 3 褐色土・ロームブロック(5cm)混入 4 暗褐色土・ローム粒混入 5 灰褐色土(粘土層)	
171号	10H-23	185・160・72	N-81°-W	1 褐色土 2 褐色土・ロームブロック(5cm)混入 3 褐色土・ロームブロック(5cm)混入(少) 4 褐色土・ロームブロックと黒色土混入 5 褐色土・ロームブロック主体の土層	
215号	7G-91	270・260・65	N-29°-E	主体はロームブロック混入土	
277号	9G-97	240・225・102	N-58°-W	1 褐色土・ローム粒とロームブロック混入 2 褐色土・ロームブロック(2cm)混入 3 褐色土・ロームブロックと黒色土混入 4 褐色土・ロームブロック黒色土(多)混入 5 褐色土・ロームブロック(5cm)混入 6 褐色土・ロームブロック(5cm)混入(少) 7 褐色土・ロームブロック(3cm)混入 8 褐色土・ロームブロック(3cm)混入、粘性	周溝あり
301号	9G-96	317・225・92	N-41°-E	1 褐色土・ロームブロックと黒色土混入(少) 2 褐色土・同上(ロームブロック1~10cm) 3 褐色土・同上(ロームブロック5cmが主) 4 褐色土・ロームブロック黒色土(少)混入 5 褐色土・ロームブロック(15cm)混入 6 褐色土・ロームブロック(10cm)混入(少) 7 褐色土・ロームブロック(5cm)混入 8 褐色土・ロームブロック混入(少)	遺物あり、ビットあり Q22号・277号との新 旧関係は確認できず

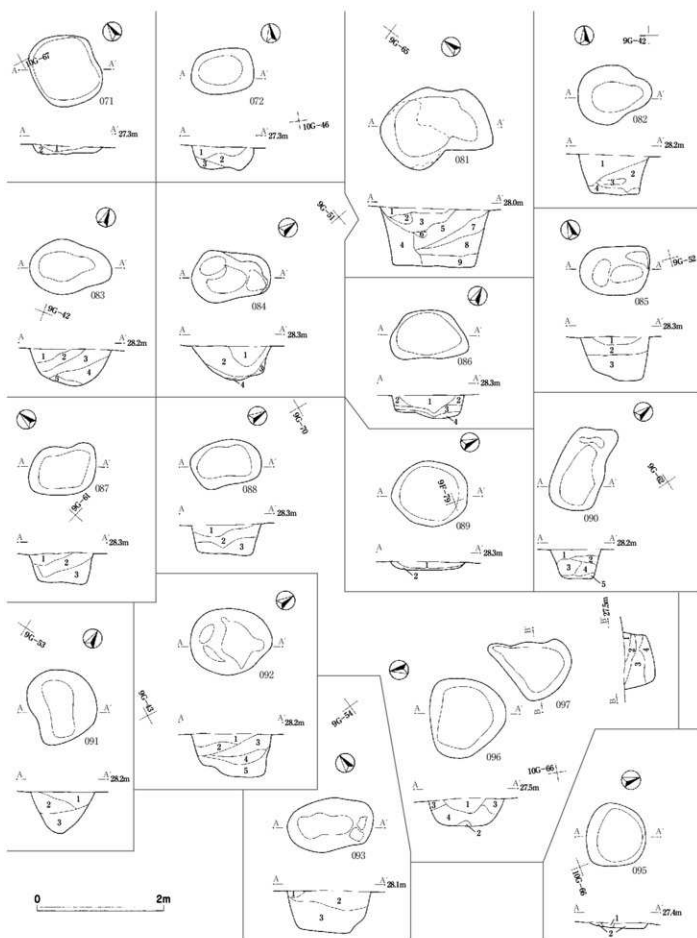
373号	7 G-92	148・125・50	N-9°-E	1 褐色土・ローム粒混入 2 黒色土・ローム粒混入 3 暗褐色土・ローム粒混入 4 褐色土・ローム粒、ロームブロック混入 5 明褐色土・ローム粒、ロームブロック混入 6 灰褐色土(粘土層)	ビットあり
410号	4 H-73	270・190・85	N-83°-W	1 暗褐色土・ローム粒混入(少) 2 黒色土・ロームブロック(1cm)混入 3 暗褐色土・ロームブロック(0.5cm)混入	
411号	9H-84	370・330・142	N-74°-W	1 暗褐色土・黒色土混入 2 褐色土・ローム粒混入 3 暗褐色土・ロームブロックと黒色土混入 4 暗褐色土・ローム粒と黒色土混入 5 褐色土・黒色土混入(少) 6 黄褐色土・ソフトロームの堆積 7 黄褐色土	付帯施設を伴う遺物を多く出土
412a号	5 H-03	190・125・69	N-27°-E	1 褐色土・黒色土混入 2 褐色土・ロームブロック(10cm)混入 3 褐色土・ロームブロック(5cm)混入	厨溝あり
412b号	4 H-94	(210)・(180)・64	N-27°-E	1 褐色土・ロームブロック混入(少) 2 褐色土・ロームブロック混入(多)	
412c号	5 H-04	250・200・69	N-36°-E	3 褐色土 4 褐色土・ロームブロック(3cm)混入 5 褐色土・ロームブロック(5cm)混入 6 褐色土・ロームブロック(10cm)混入 7 褐色土・ローム粒、ロームブロック混入	
413号	5 H-02	430・330・110	N-56°-W	1 褐色土・ロームブロック(3cm)混入 2 褐色土・ロームブロック(5cm)混入 3 褐色土・ロームブロック(1cm)混入 4 褐色土・ロームブロック(3cm)混入 5 褐色土・ロームブロック(10cm)混入 6 褐色土・ロームブロック(5cm)混入	一部に厨溝あり
416号	5 H-11	260・250・55	N-1°-W	1 黄褐色土・ソフトロームの堆積 2 褐色土・黒色土混入(少) 3 暗褐色土・ロームブロック、黒色土混入 4 褐色土・ロームブロック(1cm)混入 5 褐色土・ロームブロック(10cm)混入 6 褐色土・ロームブロック(5cm)混入 7 暗褐色土・ロームブロック、炭化物混入 8 暗褐色土・ロームブロック、黒色土混入	
417号	5 H-21	228・180・68	N-31°-E	1 褐色土・ロームブロック(2cm)混入 2 褐色土・ロームブロック(3cm)混入 3 褐色土・ロームブロック(5cm)混入 4 褐色土・ロームブロック(8cm)混入 5 褐色土・ロームブロック(4cm)混入	
502号	7 G-91	265・260・66	N-29°-E	1 褐色土・ロームブロック(3cm)混入 2 褐色土・ロームブロック(3cm)混入(少) 3 褐色土・ソフトローム 4 褐色土・ローム粒、ロームブロック混入 5 灰褐色土(粘土層)	
	8 G-35	150・140・66	N-64°-W		竪穴住居跡(030号)
	8 G-36	180・155・48	N-66°-W		同上と重複
	4 H-43	220・・・45	N-°-W		竪穴住居跡(403号)



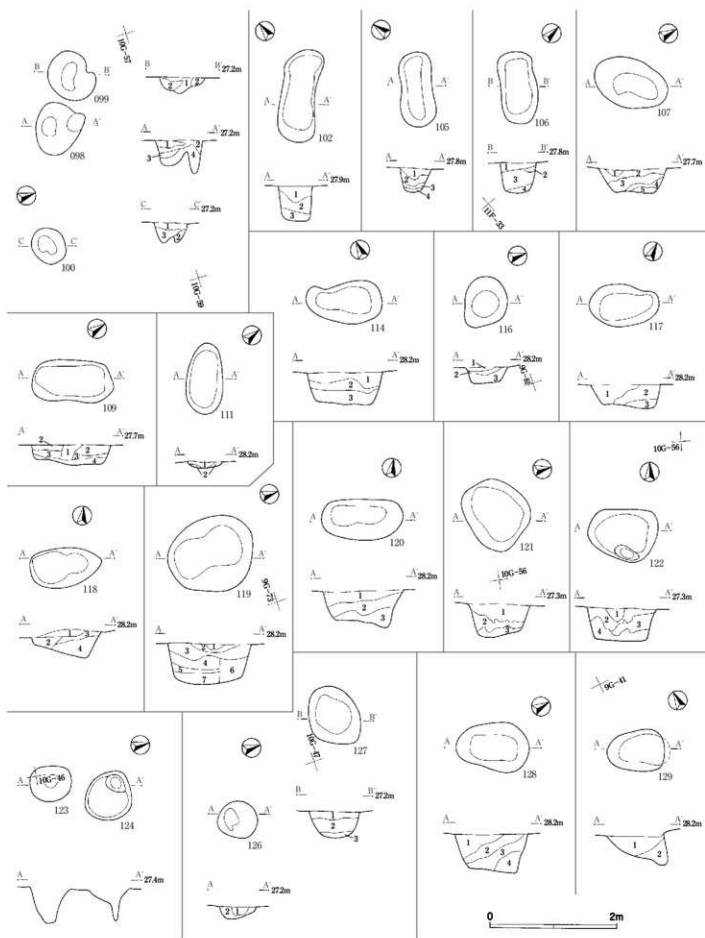
第94図 地下式坑



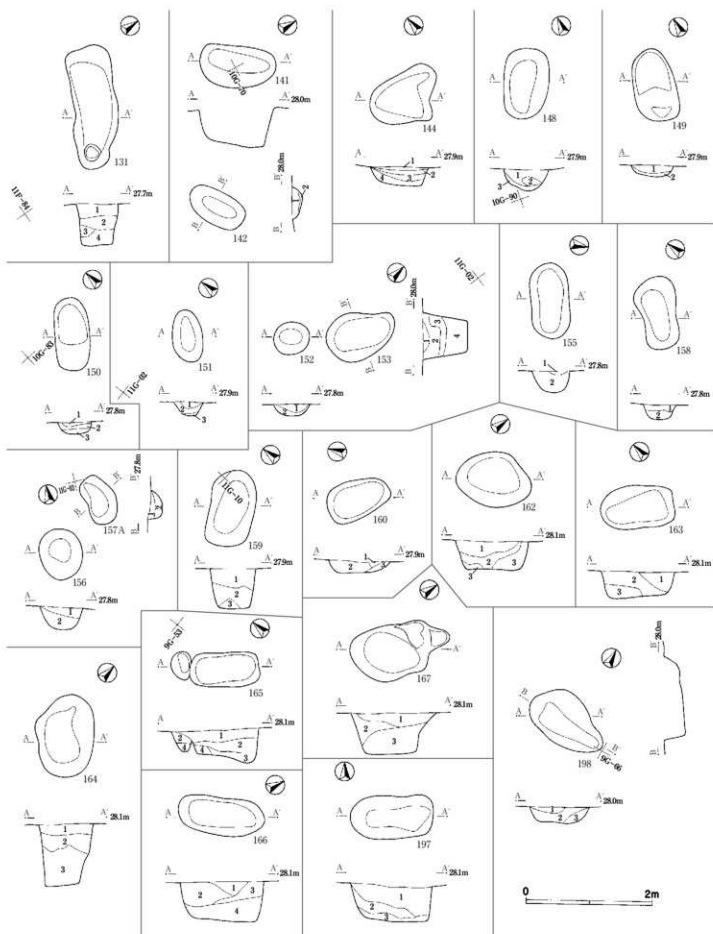
第95图 土坑(1)



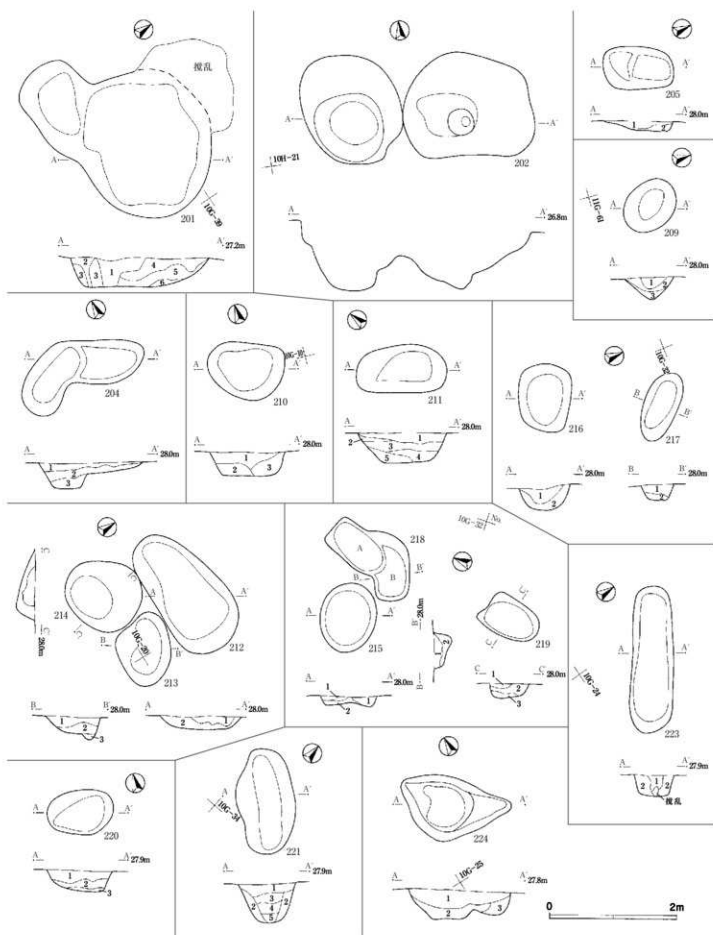
第96图 土坑(2)



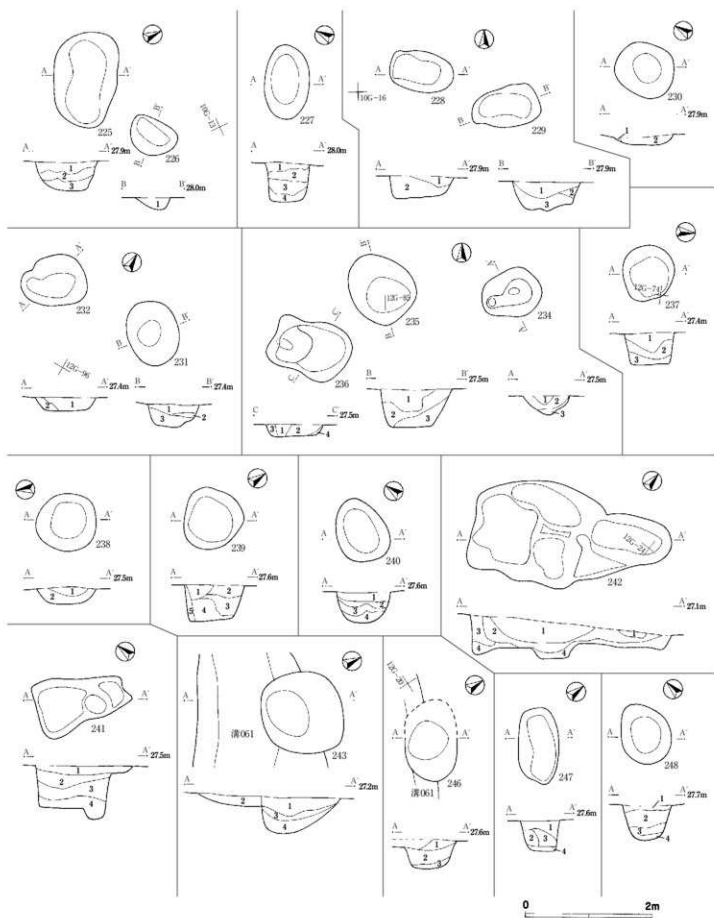
第97图 土坑(3)



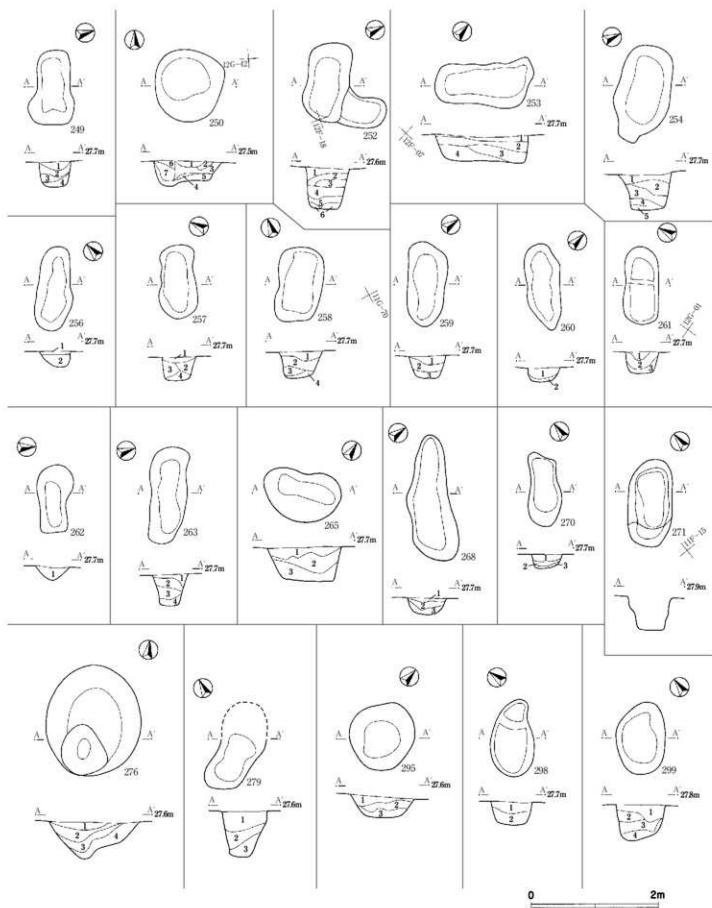
第98图 土坑(4)



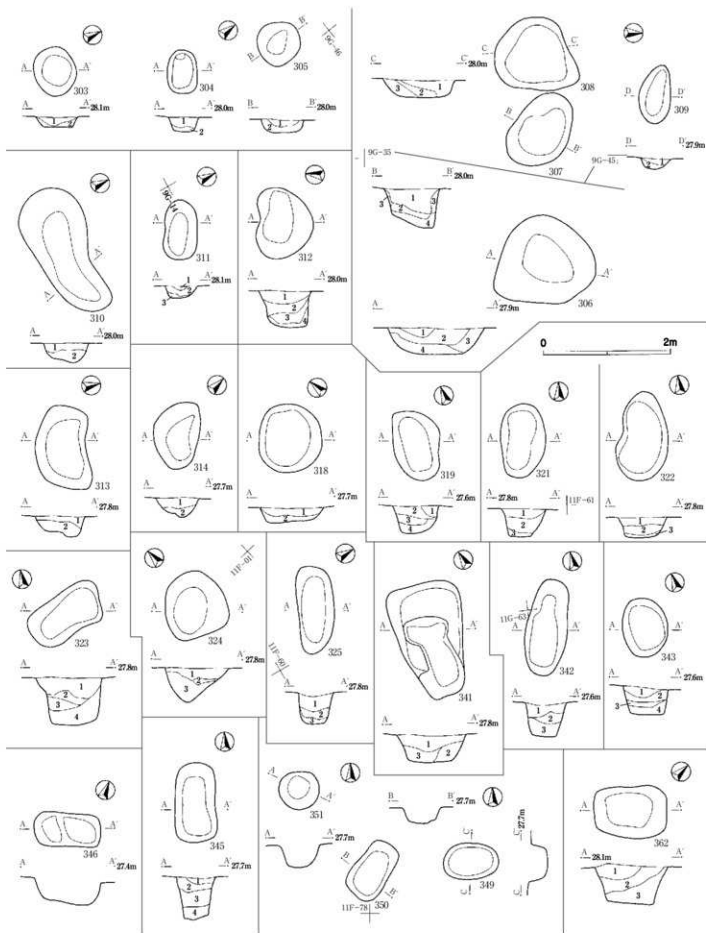
第99图 土坑(5)



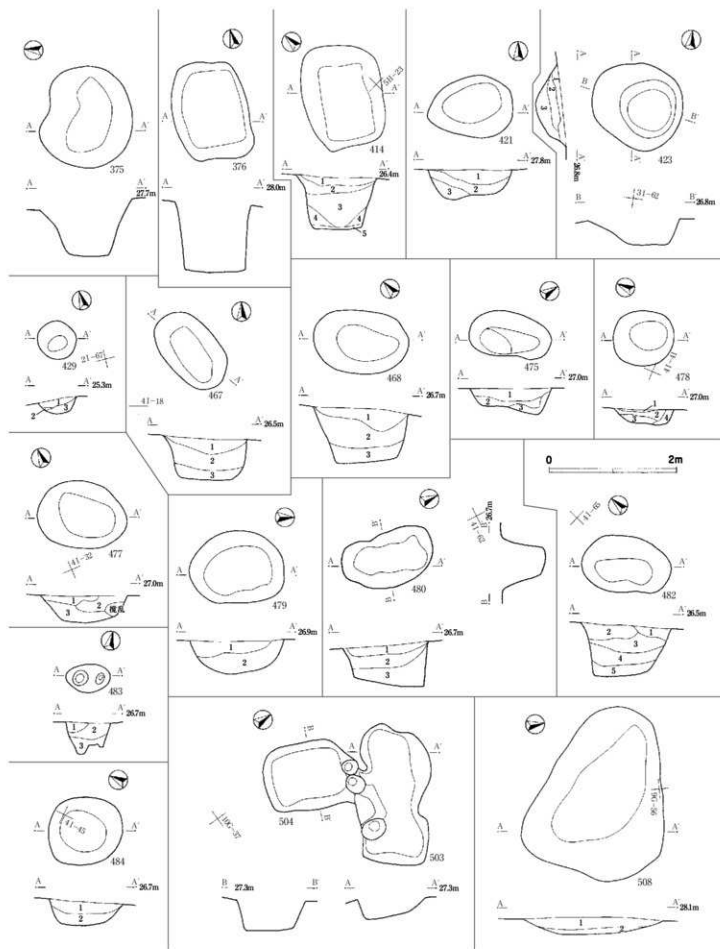
第100圖 土坑(6)



第101图 土坑(7)



第102图 土坑 (8)



第103图 土坑(9)

第6表 中世土坑一覧

遺構番号	検出地点	形状	長径・短径・深さ (cm)	堆積土	備考 (遺物など)
008号	8 I - 93	不整楕円形	240・142・125	1 黒褐色土 2 暗褐色土 3 黒褐色土 4 褐色土	
009号	9 H - 05	円形	112・110・75	1 暗褐色土 2 暗褐色土・ロームブロック混入	人為的な埋め戻し
010号	8 H - 91	楕円形	148・95・40	1 黒褐色土 2 暗褐色土	
016号	8 G - 74	隅円方形	350・270・105	1 黒褐色土 2 黒色土 3 黒褐色土・ローム粒混入 4 黒褐色土・ローム粒混入	
029号	10H - 10	方形	90・90・70	1 褐色土・炭化物混入(少) 2 褐色土・ロームブロック(3cm)混入 3 褐色土・ローム粒混入(少) 4 褐色土・ロームブロック(10cm)混入	周溝あり
036号	9 I - 12	楕円形	260・160・60	1 暗褐色土・ローム粒混入 2 褐色土・ロームブロック(1cm)混入 3 褐色土・ローム粒混入 4 褐色土・ソフトローム混入	
041号	9 G - 96	円形	140・130・42	1 褐色土・ローム粒混入(多) 2 褐色土・ローム粒混入 3 暗褐色土・ローム粒と黒色土混入 4 褐色土・ローム粒とロームブロック混入 5 暗褐色土・ローム粒と黒色土混入 6 褐色土・ロームブロック(5mm)混入 7 褐色土・ローム粒混入	
042号	9 G - 95	円形	100・90・30	1 暗褐色土・黒色土混入 2 褐色土・ソフトローム混入 3 褐色土・ローム粒と黒色土混入 4 褐色土・ソフトローム	
044号	9 G - 79	不整形	150・87・40	1 褐色土・ロームブロック混入 2 褐色土・ローム粒混入 3 暗褐色土・ロームブロック混入(少) 4 褐色土・ロームブロック(5cm)混入 5 褐色土・流失ローム 6 褐色土・ロームブロック混入	
045号	9 G - 79	楕円形	120・94・32	1 褐色土・ローム粒混入 2 褐色土・ロームブロック(1cm)混入 3 褐色土・ロームブロック(2cm)混入	
048号	10G - 02	不整楕円形	98・98・64	1 褐色土・ローム粒混入 2 褐色土・ロームブロック混入	
053号	9 G - 75	楕円形	114・80・26		
065号	10G - 44	不整形	290・240・56		2基の重複か
070号	10H - 41	不整長方形	166・85・60	1 褐色土・ロームブロック混入 2 褐色土・ロームブロック混入(少) 3 褐色土・ロームブロック(5cm)混入 4 褐色土・ロームブロック(5~10cm)混入	
071号	10G - 67	隅円方形	118・102・16	1 褐色土・ロームブロック混入(少) 2 褐色土・ローム粒とロームブロック混入	

072号	10G-46	楕円形	100・72・35	1 褐色土・ローム粒とロームブロック混入 2 褐色土・ロームブロック(5cm)混入 3 褐色土・ソフトロームとロームブロック(5cm)混入
081号	9G-65	不整形	176・108・90	1 灰褐色土・ローム粒と粘土混入 2 灰褐色土・ローム粒(多)と粘土混入 3 褐色土・ロームブロックと黒色土と粘土混入 4 粘土・褐色土混入 5 褐色土・ロームブロックと粘土混入 6 褐色土・ロームブロック混入 7 褐色土・ローム粒混入 8 褐色土・ローム粒とロームブロック混入 9 褐色土・ロームブロック(5-10cm)混入
082号	9G-42	不整形	117・93・62	1 褐色土・ロームブロック混入 2 暗褐色土・ロームブロック混入(少) 3 褐色土・ロームブロック(3cm)混入 4 褐色土・ロームブロック(5cm)混入
083号	9G-41	楕円形	130・88・58	1 褐色土・ロームブロック混入(少) 2 褐色土・ロームブロック(1-5cm)混入 3 褐色土・ローム粒混入 4 褐色土・ローム粒とロームブロック混入 5 褐色土・ロームブロック(4cm)混入
084号	9G-51	楕円形	124・82・54	1 褐色土・ローム粒とロームブロック混入 2 褐色土・ロームブロック混入 3 褐色土・ソフトローム 4 暗褐色土・ロームブロックと黒色土混入
085号	9G-51	楕円形	110・77・69	1 褐色土・ロームブロック混入(多) 2 褐色土・ロームブロック混入 3 褐色土・ロームブロック混入(多)
086号	9G-61	不整形	116・86・37	1 褐色土・ローム粒混入 2 褐色土・ローム粒とロームブロック混入 3 褐色土・ロームブロック(5cm)混入 4 褐色土・ローム粒混入
087号	9G-61	隅円方形	105・76・50	1 褐色土・ロームブロック混入 2 褐色土・ロームブロック(5cm)混入 3 褐色土・ロームブロック(5cm)混入(多)
088号	9G-70	楕円形	114・72・48	1 褐色土・ロームブロック混入 2 褐色土・ローム粒混入(少) 3 褐色土・ロームブロック(5cm)混入
089号	9F-79	円形	120・104・14	1 暗褐色土・ローム粒混入 2 暗褐色土・ローム粒とロームブロック混入
090号	9G-62	隅円方形	135・80・46	1 褐色土・ロームブロック(1-5cm)混入 2 褐色土 3 褐色土・ロームブロック(3cm)混入 4 褐色土・ロームブロック混入(少) 5 褐色土・ロームブロック(2cm)混入
091号	9G-53	不整形	118・110・66	1 褐色土・ロームブロック(1-5cm)混入 2 褐色土・ローム粒混入 3 褐色土・ロームブロック(1-5cm)混入
092号	9G-43	楕円形	130・105・70	1 褐色土・ローム粒混入 2 褐色土・ロームブロック(5cm)混入 3 褐色土・ロームブロック(3cm)混入 4 褐色土 5 褐色土・ロームブロック(3-5cm)混入
093号	9G-54	楕円形	136・83・67	1 褐色土・ローム粒混入 2 褐色土・ロームブロック混入 3 褐色土・ロームブロック(1-10cm)混入

095号	10G-66	円形	100・96・10	1 褐色土・ローム粒混入 2 褐色土	
096号	10G-66	楕円形	127・124・46	1 褐色土 2 ロームブロック 3 褐色土・ロームブロック (1~3cm) 混入 4 褐色土・ロームブロック (3cm) 混入	
097号	10G-67	不整形	132・104・52	1 暗褐色土・黒色土混入 2 褐色土 3 暗褐色土・黒色土混入 (少) 4 褐色土・ソフトローム	
098号	10G-57	不整形	82・70・40/52	1 褐色土・ロームブロック混入 2 褐色土・ロームブロック混入 (少) 3 褐色土 4 褐色土・ロームブロックと焼土混入	
099号	10G-57	不整形	80・65・26	1 褐色土・ロームブロックと焼土混入 2 褐色土・ロームブロック混入	
100号	10G-57	円形	60・54・32	1 褐色土・ロームブロック混入 2 褐色土・ロームブロック (3cm) 混入 3 褐色土・ローム粒混入	
102号	10F-67	長楕円形	148・60・55	1 褐色土・ロームブロック混入 2 褐色土・ローム粒混入 (少) 3 褐色土	
105号	11F-32	長楕円形	118・57・40	1 褐色土・ローム粒混入 2 褐色土・ロームブロック混入 3 褐色土・ロームブロック (5cm) 混入 4 褐色土・ロームブロック (1cm) 混入	
106号	11F-33	長楕円形	114・60・47	1 褐色土・ロームブロック (1cm) 混入 2 ロームブロック 3 褐色土・ロームブロック (2cm) 混入 4 褐色土・ローム粒混入	
107号	11F-62	楕円形	120・78・40	1 褐色土・ロームブロック (3cm) 混入 2 褐色土 3 褐色土・ロームブロック (1cm) 混入 4 褐色土 5 褐色土・ロームブロック (5cm) 混入	
109号	11F-83	長楕円形	130・65・34	1 褐色土・ロームブロック混入 2 褐色土・ローム粒混入 3 褐色土・ロームブロック混入 (少) 4 褐色土・ロームブロック混入	
110号	12F-01	楕円形	220・136・133	覆土上面は黒色土。下部はロームブロック混入の褐色土	国化省略
111号	9G-73	長楕円形	112・60・10	1 褐色土・ローム粒混入 (少) 2 褐色土・ローム粒と焼土混入 (少)	
114号	9G-63	不整形	120・69・52	1 褐色土・ロームブロック (2~5cm) 混入 2 褐色土・ロームブロック (1cm) 混入 3 褐色土・ロームブロック (2~5cm) 混入	
116号	9G-81	楕円形	84・70・26	1 褐色土・ローム粒混入 2 褐色土・ローム粒とロームブロック混入 3 褐色土・黒色土混入 (少)	
117号	9G-50	長楕円形	110・68・48	1 褐色土・ローム粒、ロームブロック、黒色土混入 2 褐色土・ロームブロック (1cm) 混入 3 褐色土・ロームブロック (1~3cm) 混入	
118号	9G-50	長楕円形	115・62・42	1 褐色土・ソフトローム 2 褐色土・ローム粒混入 3 褐色土・ローム粒とロームブロック混入 4 暗褐色土・ロームブロックと黒色土混入	

119号	9 G - 73	楕円形	140・118・64	1 褐色土・ロームブロック (5cm) 混入 (少) 2 褐色土・ローム粒混入 3 褐色土・ロームブロック (5~10cm) 混入 4 褐色土・ロームブロック (1cm) 混入 (少) 5 褐色土・ローム粒混入 (少) 6 褐色土・ロームブロック (10cm) 混入 7 褐色土・ロームブロック (5cm) 混入	
120号	9 G - 64	長楕円形	130・65・60	1 褐色土・ロームブロック (1~3cm) 混入 2 褐色土・ローム粒混入 3 褐色土・ロームブロック (1~3cm) 混入	
121号	10 G - 56	不整形	113・98・52	1 褐色土 2 褐色土・ローム粒混入 3 褐色土	
122号	10 G - 56	不整形	110・84・50	1 褐色土・ロームブロック (5cm) 混入 2 褐色土・ロームブロック (10cm) 混入 3 褐色土・ローム粒混入 4 褐色土・ロームブロック (5cm) 混入	
123号	10 G - 46	円形	63・56・58	ロームブロックを含む褐色土で構成	
124号	10 G - 46	円形	82・73・50	ロームブロックを含む褐色土で構成	
126号	10 G - 58	円形	63・58・19	1 褐色土・ロームブロック (1cm) 混入 2 褐色土	
127号	10 G - 47	楕円形	102・80・42	1 褐色土・ロームブロック (5cm) 混入 2 褐色土・ロームブロック (10cm) 混入 3 褐色土	
128号	9 G - 40	楕円形	116・78・62	1 褐色土・ロームブロック (1~3cm) 混入 2 褐色土・ローム粒とロームブロック混入 3 褐色土・ロームブロック (5cm) 混入 4 褐色土・ロームブロック (3cm) 混入	
129号	9 G - 41	楕円形	91・65・56	1 褐色土・ローム粒混入 2 褐色土・ロームブロック混入	
131号	11 F - 84	長楕円形	197・68・68	1 褐色土・ロームブロック (1cm) 混入 2 褐色土・ロームブロック (5~10cm) 混入 3 褐色土 4 褐色土・ローム粒混入 (少)	
141号	10 G - 60	楕円形	118・68・65	褐色土が主体となり、ロームブロックを含む層で構成される。	
142号	10 G - 70	楕円形	97・52・18	1 褐色土・ロームブロック (1cm) と黒色土混入 2 褐色土・ロームブロック (3cm) と黒色土混入	
144号	10 G - 71	不整形	120・90・30	1 褐色土・ロームブロック (1cm) 混入 2 褐色土・ロームブロック (2cm) 混入 3 褐色土・黒色土混入 (少) 4 褐色土・ローム粒とロームブロック、黒色土混入	
148号	10 G - 91	楕円形	111・72・33	1 褐色土・ロームブロック混入 2 褐色土・ロームブロックと黒色土混入 (少) 3 褐色土・ロームブロックと黒色土混入	
149号	10 G - 81	楕円形	116・68・20	1 暗褐色土・ロームブロック混入 2 褐色土・ローム粒とロームブロック混入	
150号	10 G - 83	楕円形	115・55・20	1 褐色土・ロームブロック混入 2 褐色土・ローム粒とロームブロック混入 3 褐色土・ロームブロック (5cm) 混入	
151号	11 G - 02	楕円形	83・50・22	1 褐色土・ローム粒混入 2 褐色土・ロームブロック (3mm) 混入 3 褐色土・ロームブロック (5mm) 混入	
152号	11 G - 02	円形	56・50・20	1 暗褐色土 2 褐色土	

153号	11G-02	楕円形	110・77・70	1 褐色土・ロームブロック混入 2 暗褐色土・ロームブロック混入 3 褐色土 4 暗褐色土・ロームブロック混入	
155号	11G-03	楕円形	120・60・33	1 褐色土・ロームブロック混入 2 暗褐色土・ロームブロック混入	
156号	11G-03	円形	80・70・35	1 暗褐色土・ロームブロック混入 2 褐色土・ローム粒と黒色土混入	
157号	11G-04	不整楕円形	80・48・25	1 褐色土・ローム粒混入 2 褐色土・ロームブロック混入	
158号	11G-04	不整楕円形	115・70・23	1 褐色土・ロームブロック (1cm) 混入 2 褐色土・ロームブロック (5cm) 混入	
159号	11G-10	楕円形	121・72・63	1 褐色土・ロームブロック (1cm) 混入 2 褐色土・ロームブロック (3mm) 混入 3 ロームブロック	
160号	11G-21	楕円形	102・60・20	1 褐色土 2 褐色土・ローム粒混入 3 褐色土・ロームブロック混入	
162号	9F-89	楕円形	122・88・86	1 褐色土・ロームブロック混入 2 暗褐色土・ローム粒と黒色土混入 3 褐色土・ロームブロック混入	
163号	9F-89	不整楕円形	118・69・44	1 褐色土・ロームブロック混入 2 褐色土・ローム粒とロームブロック混入 3 暗褐色土・ローム粒と黒色土混入	
164号	9F-78	不整楕円形	130・95・98	1 褐色土・ロームブロック (1~10cm) 混入 2 褐色土・ロームブロック (10~20cm) 混入 3 暗褐色土・ローム粒と黒色土混入	
165号	9G-53	隅角長方形	110・55・54	1 褐色土・ローム粒混入 2 褐色土・ロームブロック (1~2cm) 混入 3 褐色土・ローム粒混入 4 褐色土・ロームブロック (1~3cm) 混入	隣接して ビットあり
166号	9G-54	長楕円形	140・60・63	1 褐色土・ロームブロック混入 2 褐色土・ローム粒混入 3 褐色土・ロームブロック (3cm) 混入 4 褐色土・ロームブロック (5cm) 混入	
167号	9G-74	不整形	160・87・66	1 褐色土・ローム粒とロームブロック混入 2 褐色土・ロームブロック (3cm) 混入 3 褐色土・ロームブロック (5cm) 混入	
197号	9G-56	楕円形	132・69・62	1 褐色土・ロームブロックと粘土混入 2 褐色土・ロームブロック (1~5cm) 混入 3 褐色土・ロームブロック (5cm) 混入	
198号	9G-55	不整楕円形	132・80・34	1 褐色土・粘土混入 2 暗褐色土・黒色土混入 3 褐色土・ローム粒混入	
201号	10G-38	円形 不整形	235・ - ・47 - ・100・ -	1 褐色土・ロームブロックと黒色土混入 2 褐色土・ロームブロック混入 3 褐色土・ロームブロック (5~10cm) 混入 4 褐色土・ロームブロック (1~2cm) 混入 5 褐色土・ロームブロック (5~10cm) 混入 6 褐色土・ロームブロック (3cm) 混入	2基の重複
202号	10H-21	円形 不整楕円形	180・150・110 208・155・105		2基の重複
204号	10G-40	不整形	130・70・40	1 褐色土・ローム粒混入 2 褐色土・ローム粒と黒色土混入 3 褐色土・ロームブロック混入	

205号	10G-50	楕円形	112・68・15	1 褐色土・ロームブロック (1~2cm) 混入 2 褐色土・ロームブロック (3cm) 混入	
209号	10G-61	楕円形	93・72・35	1 暗褐色土・黒色土混入 2 褐色土・ローム粒と黒色土混入 3 褐色土	
210号	10G-10	楕円形	122・90・37	1 褐色土・ロームブロック (1~5cm) 混入 2 褐色土 3 褐色土・ロームブロック (3~5cm) 混入	
211号	10G-21	楕円形	142・76・48	1 褐色土・ロームブロック (5cm) 混入 2 褐色土 3 暗褐色土・黒色土混入 4 褐色土・ロームブロック (3cm) 混入 5 褐色土・ソフトローム	
212号	10G-20	楕円形	210・113・20	1 褐色土・ロームブロック混入 (多) 2 黒褐色土	
213号	10G-21	不整形	116・88・34	1 暗褐色土・ロームブロック混入 2 黒褐色土 3 ロームブロック	
214号	10G-30	円形	120・110・30	1 黒色土・褐色土混入 2 暗褐色土・ロームブロック混入	
215号	10G-32	楕円形	110・90・15	1 暗褐色土 2 褐色土・ローム粒とロームブロック混入	
216号	10G-31	隅円方形	106・83・40	1 暗褐色土・ロームブロック混入 2 褐色土・ソフトローム	
217号	10G-32	楕円形	114・53・26	1 暗褐色土・ロームブロック混入 2 黒褐色土・ソフトローム混入	
218号	10G-32	楕円形A 楕円形B	152・55・- 105・60・28	1 暗褐色土 2 褐色土	2基の重複
219号	10G-42	不整形	90・60・24	1 黒色土・ロームブロック混入 2 黒色土・ソフトローム混入 3 黒色土・ロームブロック混入 (多)	
220号	10G-43	楕円形	105・70・32	1 暗褐色土・ロームブロック混入 2 暗褐色土・ロームブロック混入 (多) 3 ロームブロック層で暗褐色土を少量含む	
221号	10G-34	長楕円形	167・92・62	1 褐色土・ロームブロック混入 (多) 2 褐色土・流失ローム混入 3 褐色土・ロームブロック混入 4 灰褐色土・炭化物混入 (少) 5 灰褐色土・ロームブロック混入	
223号	10G-24	長楕円形	230・69・33	1 暗褐色土・ロームブロック混入、軟弱な土層 2 暗褐色土・ロームブロック混入	
224号	10G-25	不整形	179・103・48	1 暗褐色土・ロームブロック (5cm) 混入 (多) 2 暗褐色土・ロームブロック (2cm) 混入 (多) 3 暗褐色土・ロームブロックと黒色土混入	
225号	10G-13	楕円形	150・100・50	1 暗褐色土・ロームブロック (1cm) 混入 2 褐色土・ロームブロック混入 (多) 3 暗褐色土・ロームブロック混入 (多)	
226号	10G-13	不整形	76・56・17	1 黒色土・ソフトローム混入	
227号	10G-14	楕円形	117・71・62	1 暗褐色土・ロームブロックと黒色土混入 2 暗褐色土・ロームブロック混入 (少) 3 褐色土・ロームブロック混入 (多) 4 暗褐色土・ロームブロック混入 (少)	
228号	10G-06	楕円形	102・65・35	1 暗褐色土・ロームブロック混入 (少) 2 暗褐色土・ロームブロック混入 (多)	

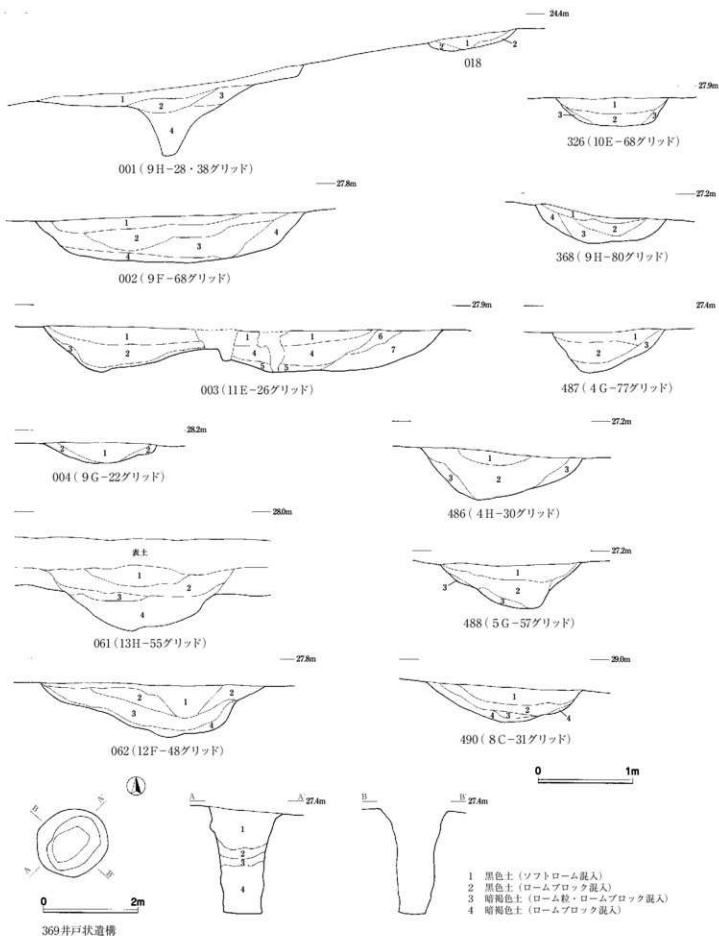
229号	10G-16	楕円形	110・65・46	1 暗褐色土・ロームブロック混入(多) 2 暗褐色土・ロームブロック混入(少) 3 暗褐色土・ロームブロック混入(多)	
230号	13G-06	円形	93・92・15	1 暗褐色土・ソフトローム 2 暗褐色土・ソフトローム、粘性に富む	
231号	12G-96	円形	102・80・37	1 暗褐色土・ロームブロック混入 2 褐色土・ロームブロック混入(多) 3 暗褐色土・粘性に富む	
232号	12G-95	楕円形	105・80・20	1 暗褐色土・褐色土混入 2 暗褐色土	
234号	12G-85	楕円形	98・78・30	1 暗褐色土・ソフトローム 2 暗褐色土・ソフトローム、緻密でしまる 3 褐色土・ロームブロック混入(多)	
235号	12G-85	円形	112・98・60	1 暗褐色土・ソフトローム 2 暗褐色土・砂質 3 暗褐色土・ロームブロック混入	
236号	12G-94	不整形	122・90・20	1 暗褐色土・ローム粒混入 2 暗褐色土・ローム粒とロームブロック混入 3 黒色土・ロームブロック混入 4 暗褐色土・ローム粒とロームブロック混入	
237号	12G-74	円形	90・83・50	1 暗褐色土・ロームブロック混入 2 暗褐色土・褐色粘質土混入 3 暗褐色土・	
238号	12G-64	円形	94・92・26	1 暗褐色土・ローム粒混入(少) 2 暗褐色土・ローム粒混入(多)	
239号	12G-73	円形	97・94・58	1 黒色土・粘質土粒混入 2 暗褐色土・ソフトローム混入 3 暗褐色土・ソフトローム混入、緻密でしまる 4 暗褐色土・粘性に富む 5 暗褐色土・ロームブロック混入	
240号	12G-61	楕円形	104・80・46	1 黒色土 2 暗褐色土・ロームブロック混入 3 暗褐色土・褐色粘質土混入 4 暗褐色土・ロームブロック混入(多)	
241号	12G-53	不整形	150・94・65(84)	1 暗褐色土・ロームブロック混入 2 褐色土・黒色土混入 3 褐色土・ロームブロック(10cm)混入 4 褐色土・ロームブロック(5cm)混入	
242号	12G-24	不整形	324・160・60	1 黒色土・ローム粒混入 2 褐色土 3 褐色土・ソフトローム 4 褐色土・暗褐色土混入	2基以上の 重複
243号	12G-34	円形	148・130・56	1 黒色土 2 黒色土・ローム粒混入 3 暗褐色土・ローム粒混入	
246号	12G-20	楕円形	-・85・46	1 暗褐色土 2 暗褐色土・ロームブロック混入 3 褐色土・ロームブロック混入(多)	
247号	12G-52	楕円形	122・65・48	1 暗褐色土・ローム粒混入 2 暗褐色土・褐色粘質土混入 3 暗褐色土・ロームブロック混入(多) 4 褐色土・ロームブロック混入(多)	
248号	12G-51	楕円形	100・78・54	1 暗褐色土・褐色土混入 2 暗褐色土・ロームブロック混入(少) 3 暗褐色土・ロームブロック混入(多) 4 褐色土・ソフトローム混入(少)	

249号	12G-50	不整形	128・74・40	1 暗褐色土・褐色土混入 2 暗褐色土・ロームブロック混入(少) 3 暗褐色土・ロームブロック混入(多) 4 褐色土・ソフトローム混入(少)	
250号	12G-42	円形	114・110・40	1 褐色土・ローム粒とロームブロック混入 2 暗褐色土・黒色土混入 3 褐色土・ロームブロック混入 4 褐色土・ロームブロックと黒色土混入 5 褐色土・ロームブロック混入 6 褐色土・ローム粒混入 7 暗褐色土・ロームブロックと黒色土混入	
252号	12F-07	不整形長方形	124・63・64	1 褐色土・ローム粒混入 2 暗褐色土・ローム粒混入 3 暗褐色土・ローム粒とロームブロック混入 4 暗褐色土・ロームブロック混入 5 暗褐色土 6 暗褐色土・ローム粒混入	2基の重複
253号	11F-97	不整形長方形	150・70・43	1 褐色土・ソフトローム混入 2 褐色土・ロームブロック(1cm)混入 3 褐色土・ロームブロック(1~5cm)混入 4 褐色土・ロームブロック(1cm)混入(少)	
254号	11F-96	不整形長方形	156・90・60	1 褐色土・ローム粒混入 2 褐色土・ロームブロック(1~5cm)混入 3 褐色土・ロームブロック(5~10cm)混入 4 褐色土・ロームブロック(1cm)混入(少) 5 褐色土	
256号	12G-00	長楕円形	133・60・24	1 褐色土・ローム粒混入 2 褐色土・ソフトローム	
257号	11G-90	不整形長方形	115・61・37	1 褐色土・ローム粒混入 2 褐色土 3 褐色土・ローム粒混入(少) 4 褐色土・ロームブロック混入	
258号	11G-91	隅円長方形	116・72・41	1 暗褐色土・ロームブロックと炭化物混入 2 褐色土・ロームブロック(1~5cm)混入 3 褐色土・ロームブロック(1cm)混入 4 褐色土・ロームブロック(2cm)混入	
259号	11G-70	長楕円形	135・62・36	1 褐色土 2 褐色土・ロームブロック混入(少) 3 褐色土・ロームブロック混入	
260号	11G-70	長楕円形	137・56・20	1 褐色土・ロームブロック混入 2 褐色土・ソフトローム	
261号	12G-01	楕円形	122・56・35	1 褐色土 2 褐色土・ロームブロック混入 3 褐色土・ソフトローム	
262号	11G-60	不整形	106・58・20	1 褐色土・ロームブロック混入	
263号	11G-50	長楕円形	153・56・48	1 暗褐色土・ローム粒混入 2 暗褐色土・ロームブロック(1cm)混入 3 褐色土・ロームブロック(1~10cm)混入 4 褐色土・ロームブロック(1~2cm)混入	
265号	11F-66	不整形	126・76・53	1 褐色土・ローム粒混入 2 褐色土・ローム粒とロームブロック混入 3 褐色土・ロームブロック混入	
268号	11F-36	不整形	200・73・26	1 褐色土・ローム粒混入 2 褐色土 3 褐色土・ロームブロック混入	

270号	11F-44	不整形	118・56・22	1 褐色土・ローム粒混入 2 褐色土 3 褐色土・ロームブロック混入	
271号	11F-15	楕円形	139・71・55		
276号	10G-62	楕円形	176・152・58	1 暗褐色土・ローム粒混入 2 暗褐色土・ロームブロック(5mm)混入 3 暗褐色土・ローム粒混入 4 褐色土・ロームブロック(5cm)混入	
279号	12F-04	不整形	-・60・72	1 暗褐色土 2 暗褐色土・ロームブロック混入(多) 3 暗褐色土・砂質で軟弱	
295号	11G-27	円形	107・102・33	1 褐色土・ロームブロックと炭化物混入 2 褐色土・ローム粒混入 3 褐色土・ソフトローム	
298号	10G-95	不整形	123・71・36	1 褐色土 2 褐色土・ロームブロック混入	
299号	10G-74	楕円形	104・80・58	1 褐色土・黒色土混入(少) 2 褐色土・ロームブロック混入 3 暗褐色土・ロームブロックと黒色土混入 4 褐色土・ソフトローム	
303号	9G-44	円形	78・67・16	1 褐色土・ローム粒混入 2 褐色土・黒色土混入(少)	
304号	9G-45	楕円形	68・47・23	1 褐色土・黒色土混入(少) 2 褐色土・黒色土混入	
305号	9G-45	円形	69・68・21	1 褐色土・黒色土混入(少) 2 褐色土	
306号	9G-45	不整形	156・90・40	1 褐色土・ロームブロック混入 2 褐色土・ローム粒と黒色土混入 3 褐色土・ロームブロック混入 4 褐色土・黒色土混入(少)	
307号	9G-35	楕円形	127・88・62	1 褐色土・ロームブロック混入 2 暗褐色土・ロームブロックと黒色土混入 3 褐色土 4 褐色土・黒色土混入(少)	
308号	9G-35	不整形	135・116・26	1 褐色土 2 褐色土・黒色土混入 3 褐色土・ロームブロックと黒色土混入	
309号	9G-36	長楕円形	94・50・16	1 褐色土・ローム粒と黒色土混入 2 褐色土・黒色土混入(少)	
310号	9G-34	不整形	212・102・31	1 褐色土・ロームブロック混入 2 暗褐色土・ロームブロックと黒色土混入(少)	
311号	9G-14	楕円形	94・52・20	1 褐色土・ロームブロック(3cm)混入 2 褐色土・ロームブロック(1cm)混入 3 褐色土・ローム粒混入	
312号	9G-15	不整形	112・87・56	1 褐色土・ロームブロック(3cm)混入 2 褐色土・ロームブロック(1cm)混入 3 暗褐色土・ロームブロックと黒色土混入 4 褐色土・黒色土混入	
313号	8G-97	不整形	126・80・32	1 褐色土・ロームブロック混入 2 褐色土・ロームブロックと黒色土混入	
314号	9G-07	不整形	108・74・31	1 褐色土・ロームブロック(1cm)混入 2 褐色土・ロームブロック(5cm)混入	
318号	12F-15	円形	108・100・24	1 暗褐色土・ロームブロック混入 2 暗褐色土・ロームブロック混入(多)	

319号	11G-54	楕円形	112・77・43	1 暗褐色土・ロームブロック混入(少) 2 暗褐色土・ロームブロック混入 3 暗褐色土・ロームブロック混入(多) 4 褐色土・ロームブロック混入(多)	
321号	11F-60	楕円形	117・72・44	1 褐色土・ロームブロック(1cm)混入 2 褐色土・ロームブロック(5mm)混入 3 褐色土・ロームブロックと黒色土混入	
322号	11F-50	不整形	141・81・32	1 褐色土・ロームブロック(1~5cm)混入 2 褐色土・ローム粒混入 3 褐色土・ロームブロックと黒色土混入	
323号	11F-21	隅円長方形	126・67・74	1 褐色土・ロームブロック混入 2 暗褐色土・ロームブロックと黒色土混入 3 褐色土・ロームブロック混入 4 暗褐色土・ロームブロック混入	
324号	11F-01	楕円形	107・101・53	1 褐色土・ロームブロック(2cm)混入(少) 2 褐色土・ロームブロック(1~2cm)混入 3 褐色土・ソフトローム	
325号	10F-80	長楕円形	138・57・48	1 褐色土・ロームブロック混入 2 暗褐色土・ロームブロックと黒色土混入 3 暗褐色土・多量の黒色土とロームブロック混入	
341号	11G-34	不整形	185・118・42	1 暗褐色土 2 暗褐色土・炭化物混入 3 暗褐色土・ロームブロック混入(少)	
342号	11G-64	長楕円形	153・66・53	1 暗褐色土・黒色土混入 2 黒褐色土 3 黒褐色土・ロームブロック混入	
343号	11G-83	楕円形	94・72・43	1 暗褐色土・ロームブロックと黒色土混入 2 黒色土・ロームブロック混入 3 褐色土・ロームブロック混入 4 黒色土・ロームブロック混入(多)	
345号	12G-01	隅円長方形	126・66・68	1 黒褐色土・ロームブロック混入 2 暗褐色土・ロームブロック混入(多) 3 暗褐色土・黒色土混入 4 暗褐色土・ロームブロック混入(多)	
346号	11G-74	隅円長方形	106・54・44		
349号	11F-79	楕円形	87・57・27		
350号	11F-78	隅円長方形	97・58・36		
351号	11F-78	円形	64・60・46		
362号	11F-78	隅円長方形	115・83・60	1 暗褐色土・ロームブロック混入 2 暗褐色土・ロームブロック混入(多) 3 暗褐色土・ロームブロック混入	
374号	7G-98	隅円方形	110・95・30	1 暗褐色土・ロームブロック混入 2 暗褐色土・ロームブロックと黒色土混入	国化省略
375号	8G-24	不整形	160・146・92		
376号	8G-33	隅円方形	156・120・110		
414号	5H-12	隅円方形	162・127・82	1 暗褐色土・黒色土混入 2 褐色土・ロームブロック(1cm)混入 3 褐色土・ロームブロック(3cm)混入 4 褐色土・ロームブロック(2cm)混入 5 褐色土・ロームブロック(5cm)混入	
421号	3I-66	楕円形	136・100・46	1 暗褐色土・ロームブロック混入 2 暗褐色土・ソフトローム混入 3 褐色土・ロームブロック混入	
423号	3I-61	円形	145・130・41	1 褐色土・ローム粒混入 2 暗褐色土・ローム粒混入(少) 3 暗褐色土・ローム粒と焼土流混入(少)	

429号	2 I - 67	円形	61・61・30	1 暗褐色土・焼土粒混入(少) 2 暗褐色土・ローム粒混入(多) 3 褐色土・ローム粒と焼土流混入(少)	
467号	4 I - 18	楕円形	137・84・70	1 暗褐色土・ロームブロック混入(多) 2 暗褐色土・ロームブロック混入(少) 3 褐色土・ロームブロック混入(多)	
468号	4 I - 27	楕円形	151・100・90	1 暗褐色土・ロームブロック混入(多) 2 暗褐色土・ロームブロック混入(少) 3 褐色土・ロームブロック混入(多)	
475号	4 I - 22	楕円形	130・71・42	1 暗褐色土・ソフトローム混入 2 暗褐色土・ロームブロック混入 3 褐色土・ロームブロック混入	
477号	4 I - 32	楕円形	142・106・42	1 黒色土・ロームブロック混入(多) 2 暗褐色土・ロームブロック混入(多) 3 暗褐色土・ソフトローム混入	
478号	4 I - 31	円形	95・88・23	1 暗褐色土・ソフトローム混入 2 暗褐色土・ロームブロック混入(多) 3 暗褐色土・ロームブロック混入 4 褐色土・ロームブロック混入(多)	
479号	4 I - 50	楕円形	150・113・54	1 暗褐色土・ソフトローム混入 2 暗褐色土・ロームブロック混入(多)	
480号	4 I - 61	不整形	148・97・71	1 暗褐色土・ソフトローム混入 2 暗褐色土・ロームブロック混入(多) 3 褐色土・ロームブロック混入	
482号	4 I - 65	楕円形	141・90・84	1 暗褐色土・ソフトローム混入 2 褐色土・ロームブロック混入(多) 3 暗褐色土・ロームブロック混入 4 暗褐色土・ソフトローム混入 5 褐色土・ロームブロック混入(多)	
483号	4 I - 54	楕円形	70・45・50	1 褐色土・ロームブロック混入 2 褐色土 3 褐色土・ロームブロック混入(多)	
484号	4 I - 45	円形	117・108・42	1 暗褐色土・ロームブロック混入 2 褐色土・ロームブロック混入	
503号	10G - 37	不整形	220・100・35		
504号	10G - 37	隅円方形	(140)・108・50		
508号	9G - 56	不整形	270・214・27	1 黒褐色土・ロームブロック混入 2 暗褐色土・ロームブロック混入	

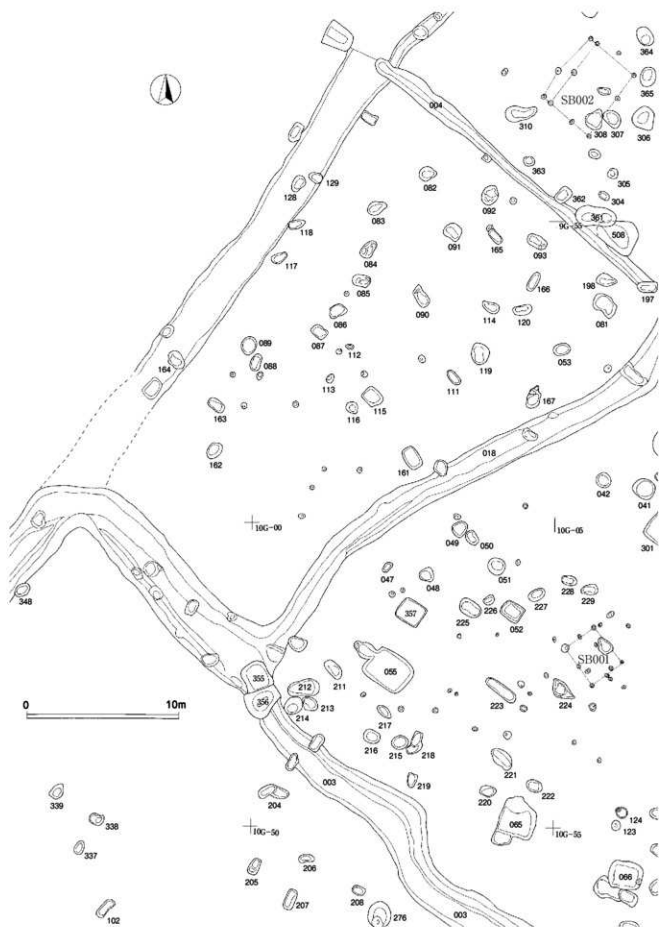


第104図 溝土層断面・井戸状遺構

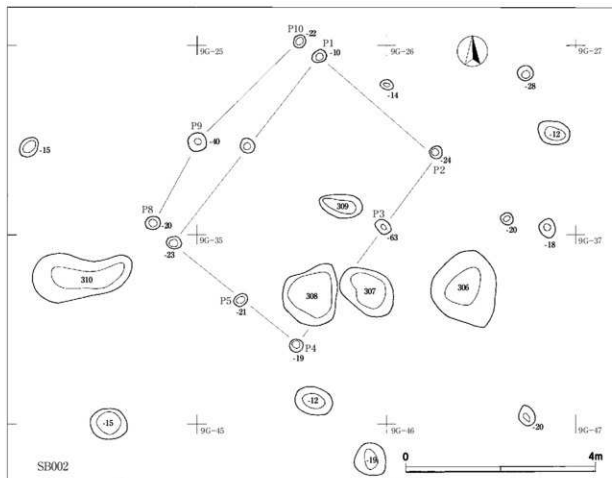
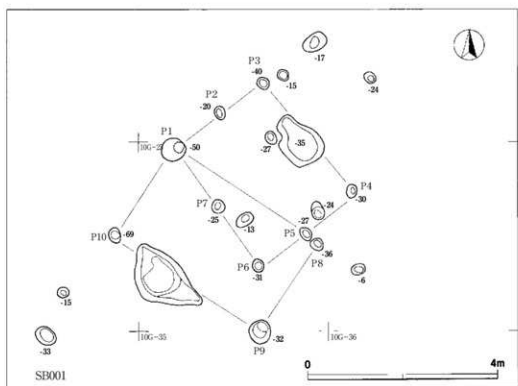
第7表 溝一覧

遺構番号	検出地点	長さ(m)・幅(m)・深さ(cm)	堆積土	備考
001号	8 G・9 H・9 I	115・3.5・35	1 暗褐色土・ソフトローム混入 2 暗褐色土・ソフトローム混入(多) 3 暗褐色土・ローム粒とロームブロック混入 4 褐色土・ソフトローム混入	断面はピット部分 遺物あり
002号	8 G・9 F	35・2.8・50	1 暗褐色土・ソフトローム混入 2 暗褐色土・ソフトローム混入(少) 3 暗褐色土・ソフトローム混入(多) 4 褐色土	003号と合流 遺物あり
003号	9 F・10 E・11 E	125・3.6・40	1 褐色土・ローム粒混入(少) 2 褐色土・ローム粒混入 3 褐色土・ローム粒とロームブロック混入 4 褐色土・ロームブロック(5mm)混入 5 褐色土・ロームブロック(1cm)混入 6 褐色土・ソフトローム混入 7 褐色土・ロームブロック(3~5cm)混入	2条の溝が重複 遺物あり
004号	9 G	24・1.0・20	1 暗褐色土・砂質土混入(少) 2 暗褐色土・ソフトローム混入	
015号	9 G・9 H	22・5.0・20		
017号	8 G・9 H	53・6.0・15		001号により削平・消滅 遺物土鏝3点
018号	9 G・9 H	120・1.2・15	1 暗褐色土・ソフトローム混入 2 暗褐色土・ソフトローム混入(多)	途中で断絶あり 遺物あり
061号	11 E~13 G	180・2.0・60	1 黒褐色土・ローム粒混入(少) 2 黒褐色土・ローム粒混入 3 黒褐色土・ロームブロック(1cm)混入 4 黒褐色土・ロームブロック(3~5cm)混入	
062号	11 E~13 G	109・2.2・50	1 褐色土・ローム粒混入 2 褐色土・ローム粒混入(多) 3 褐色土・ロームブロック(5mm)混入 4 褐色土・ロームブロック(1cm)混入	
063号	11 F・12 F	46・1.0・25		
320号	11 G~12 G	53・1.0・20		
326号	10 F~11 E	47・1.2・35	1 褐色土・ローム粒混入(少) 2 褐色土・ローム粒混入(少、粘性あり) 3 褐色土・ロームブロック混入	
358号	11 G82・83	4.8・0.3・10		
368号	9 G79~9 H91	12・1.5・35	1 暗褐色土・ローム粒混入 2 褐色土 3 褐色土・ロームブロック混入 4 褐色土・ソフトローム	遺物あり
486号	4 G・5 G・4 H	117・1.7・55	1 暗褐色土・ソフトローム混入 2 暗褐色土・ソフトローム混入(多) 3 褐色土・ロームブロック混入	遺物あり
487号	4 G	32・1.2・40	1 黒褐色土・ソフトローム混入 2 暗褐色土・ローム粒混入 3 暗褐色土・ロームブロック混入(多)	遺物あり
488号	5 G・5 H	52・1.3・40	1 黒褐色土・ローム粒混入(少) 2 黒褐色土・ローム粒混入(多) 3 暗褐色土・ローム粒とロームブロック混入	
490号	6 C~9 C	100・1.6・35	1 暗褐色土・ローム粒混入(少) 2 暗褐色土・ローム粒とロームブロック混入(少) 3 暗褐色土・ローム流とロームブロック混入 4 褐色土・暗褐色土混入	近野野馬土手に伴う溝 約100mのみ2条を確認

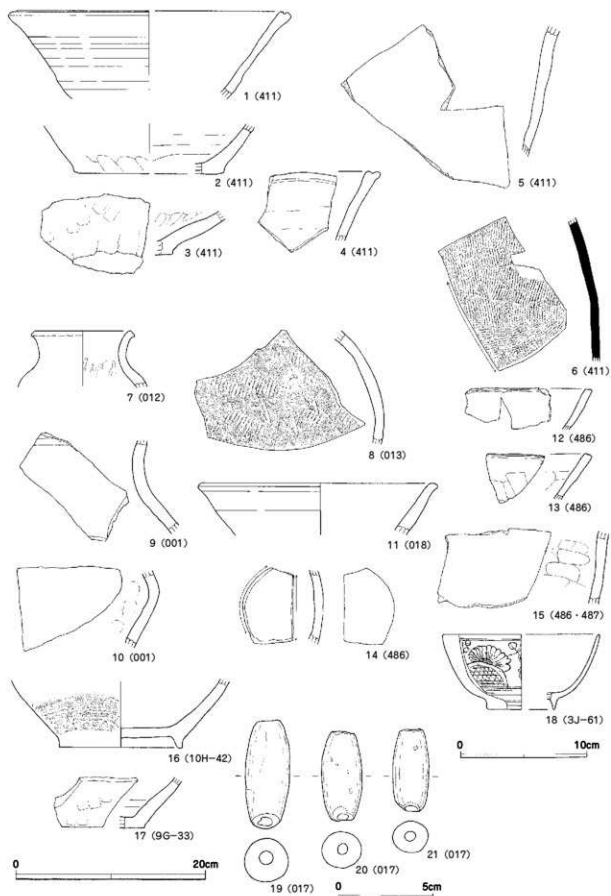
※ 長さは検出部分、幅・深さは検出面からの平均計測値



第105図 溝・掘立柱建物跡周辺図



第106图 掘立柱建物跡 (SB001・SB002)



第107図 中・近世遺構出土遺物

第7章 結語

本遺跡は、これまで述べてきたように旧石器時代から人びとの痕跡が認められ、その後、断続的に中世前半期に至るまで存続してきた。以下、各時代の概要をまとめてみたい。

旧石器時代では石器群の集中地点が5地点に認められた。出土層位は第Ⅳ層からⅣ～Ⅴ層にわたり、それぞれの地点では若干出土層位が異なっていた。最大の規模を有していた第1地点では第Ⅳ層のいわゆる暗色帯から出土したものであり、石器群の分布域は径20mにおよび小さいながらも環状を呈した分布となっていた。ここでの使用石材はメノウ・黒曜石が主体となっており、とりわけメノウ製の石核は原形を想定できるほどの大きさであった。一方、ほかの4地点でみられた石器群の広がりには4m四方のグリッドに収まる程度で、第3地点のみ長径10m、短径6mの範囲に及んでいた。石材についてみると、第3地点では黒曜石が主体を占めていたものの、他では頁岩系や黒曜石・チャート・黒色安山岩などで構成され石材についての共通性は認められなかった。これも出土層位と同様に時間差としてとらえることができよう。また定型石器としての製品も僅少であった。これは隣接して存在する角田台遺跡(注1)や向辺田遺跡(注2)での調査成果とともに総合的にとらえる必要があるものと考えられる。

次に縄文時代についてみると、確実な遺構としては早期の竈穴が検出されている。ほかに陥穴や土坑が確認できたが、土坑での出土遺物は僅少で明確に時期を把握できるものはほとんどみられず早期と後期の土器片が覆土中から若干出土した程度であった。ここで特筆できる成果としては土器の包含層をあげることができよう。主体を占める土器群は遺構を伴う早期の条痕文系となろうが、他に各時期の土器群が少量ずつ出土しており興味深い事実を提供している。つまり、第36図に示したように包含層は4H区、3I・4I区、3J区といった調査区に広がりをみせる。早期の土器群に加え前期から晩期初頭に至るまで10型式以上の土器群が出土したが、この範囲で住居跡を検出することはできなかった。しかも幾多の土器型式の存在は、この地に来訪した当時の人びとは短期間の逗留であったことを示す証左となろう。このような遺跡構成は近隣に位置する向辺田遺跡(注3)・式ト込遺跡(注4)や整理の途上である角田台遺跡でもみることができる。つまり本遺跡周辺の地は竈穴群が営まれた時期は別として、一定規模の集落を維持できるような食糧獲得が可能な地域ではなかったと推測できる。換言すれば、この地を訪れた縄文時代の人々は主に狩猟・採集を目的としたものであり、しかも多型式にわたる土器群の出土は当時の人びとが本遺跡周辺を頻繁に利用していたことを物語っている。また包含層として認識できる地点は地形的にもみても舌状台地の先端部にあたり微高地を形成しており条件的にも好環境であったものと考えられる。

古墳時代から奈良・平安時代を概観すると、検出できた遺構は竈穴住居跡のみで古墳時代前期においては小規模ながらも集落を構成していたことが確認できた。調査区北側の4H区周辺で9軒の住居跡が検出され、そこから120mほど南の8J区・9H区で7軒の住居跡が確認されている。出土土器の様相から推察すれば大きな時期差は認められないため、この2か所において数件単位の集落が営まれていたものと考えられる。このように小規模な集落構成は式ト込遺跡(6軒)でもみられる。一方、奈良・平安時代の遺構は多少時期差が認められる。199号・200号住居跡は出土土器から前者は8世紀中頃、後者は後半に存在したのと考えられるが、台地先端部に位置する436号住居跡は若干新しい時期となり、いずれも単独で

存在した住居跡であろう。この時代の遺跡として周辺では既に角田台遺跡（注5）や向辺田遺跡・武ト込遺跡などの報告がある。角田台遺跡では住居跡41軒、掘立柱建物跡5棟が検出されており、内容的にも一定規模の集落を形成していた。また住居跡から出土した土師器甕には「匠瑤郡物部黒麻呂方・」の長文の墨書土器などが出土しており、距離的にも近いことから本遺跡で検出された住居跡は角田台遺跡で営まれた集落の一部とも考えられる。

最後に中世の遺構・遺物について触れておきたい。本遺跡における中世を概観すると遺構数は多いものの概して出土遺物は少ない。そして各種の遺構が検出されたことは前述したとおりである。とりわけ注目できる遺構として方形堅穴をあげることができる。そこで、この方形堅穴の規模（長径・短径）についてまとめてみると第93図（注6）のようになる。その形状は方形というよりはやや長方形タイプとなるようである。長径：短径の比率についてみると概ね5：4前後となり、平均すると2.5m×2.0m程度の大きさとなろう。また内部施設として注意しておきたいものに周溝とピットがある。周溝は基本的に全周しており掘り込みの深い場合に多くみられる。022a号や028号のように一部を欠如していることもあるが、半数以上に周溝が設けられており居住空間を想起させる。しかも022・023・026・027・028・301・373の各号には柱穴状のピットが存在する。深さは50cmから10cm前後と深浅を有するが上屋の存在は否定できない。底面積も約5㎡が平均的であり、広いものでは12㎡を超える。こうした点を考慮すると、本遺跡で検出された方形堅穴は掘立柱建物跡とともに当時の人びとの住居であった可能性を否定しきれない。これに類似した遺構は隣接する角田台遺跡においても集中的に検出されている。ここでは形状と覆土に共通した点を見出すことができるが、周溝や柱穴を思わせるピットは存在していない。しかし、これらの遺構群も本遺跡で確認された中世村落の一端を担っていたものと考えられよう。

一方、出土遺物についてみると、大甕・片口鉢・壺などの破片が主であり、その器形をうかがえるものは皆無であった。編年的には12世紀後半から13世紀前半に位置づけられる陶器類で、生産地は常滑や渥美・知多半島（注7）となる。これらの陶器類は、いわば日常雑器類であり一般民衆が使用する什器となる。中世の遺跡、特に城館跡の調査では青磁や天目茶碗といったような当時の支配者層が使用していた輸入陶磁器を伴うことが一般的といえる。しかし出土した陶器類はすべて国内産によって占められていた。

以上のような出土品の生産地や時期から推察すると、時期的には鎌倉時代前半期の地方に営まれた一般民衆の集落跡としてとらえることができよう。本地域における中世遺跡の調査例では戦国期に築造された城館跡に関する調査例はみられるが、それ以前の遺跡は僅少で貴重な一例を提示したものと見える。

注

- 1 角田台遺跡の旧石器時代・縄文時代については目下整理中である。
- 2 宮 重行ほか2009「印旛村向辺田遺跡」〔千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書〕XXI（財）千葉県教育振興財団
- 3 向辺田遺跡では茅山下層式期の住居跡が1軒と竈穴・陥穴などが検出されている。
- 4 香取正彦ほか2008「本桝村武ト込遺跡」〔千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書〕XX（財）千葉県教育振興財団
- 5 香取正彦2006「本桝村角田台遺跡（弥生時代以降）」〔千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書〕XXIII（財）千葉県教育振興財団
- 6 図で示した方形堅穴は、長径・短径が計測できるものについてのみ取り上げた。
- 7 中世陶器の産地・年代については愛知学院大学藤澤良祐氏の御教示による。

写 真 图 版



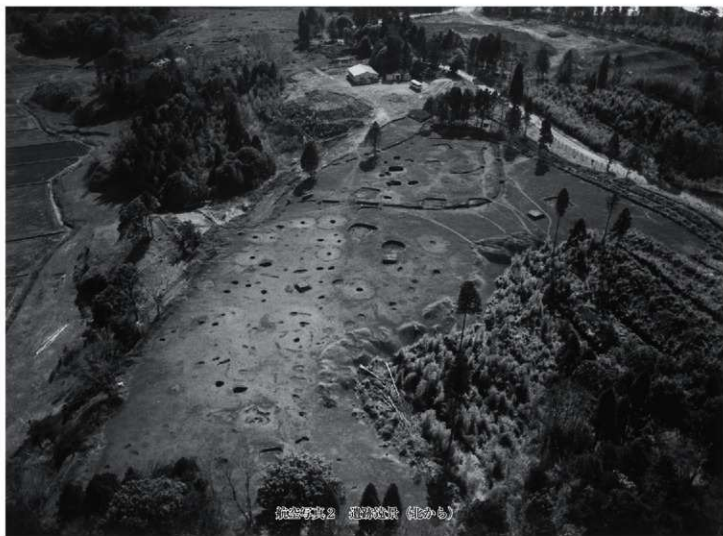
天王台西遺跡

雨台遺跡

向畑遺跡

角田合遺跡

武下遺跡





航空写真3 遺跡近景（上・北から、下・南から）



土層断面 (10E-28グリッド)



第1地点石器群出土状況 (西から)



第2地点石器群出土状況 (東から)



第3地点石器群出土状況（東から）



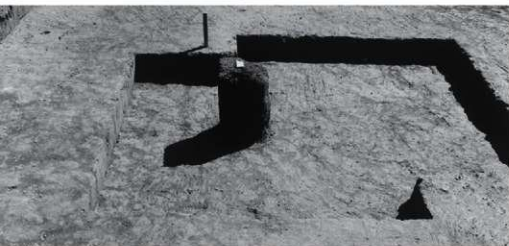
第4地点石器群出土状況（西から）



第5地点石器群出土状況（東から）



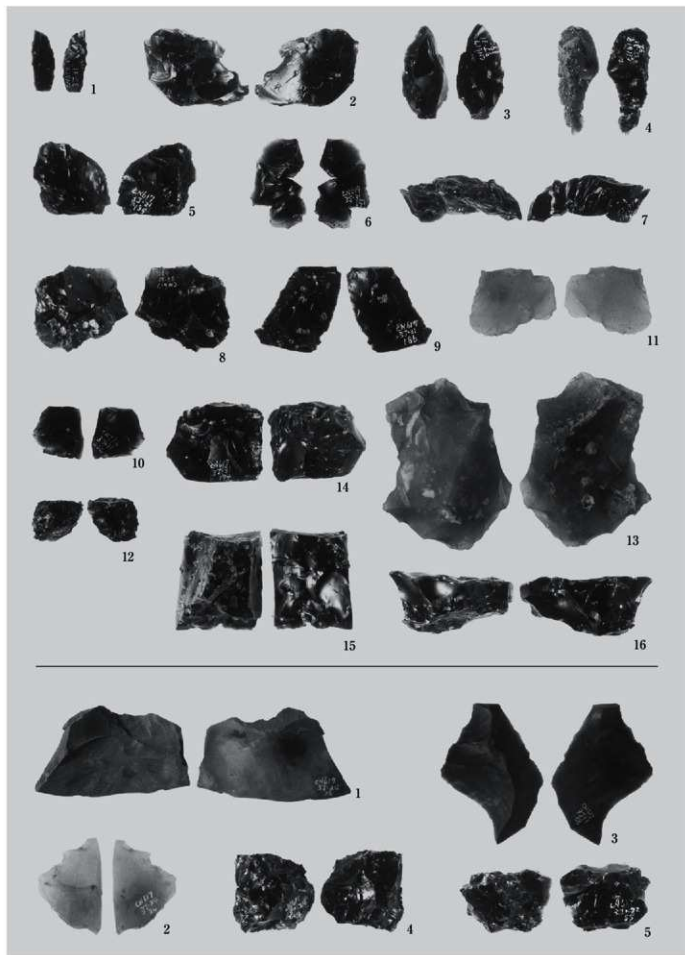
単独出土の石器 (6G-20)



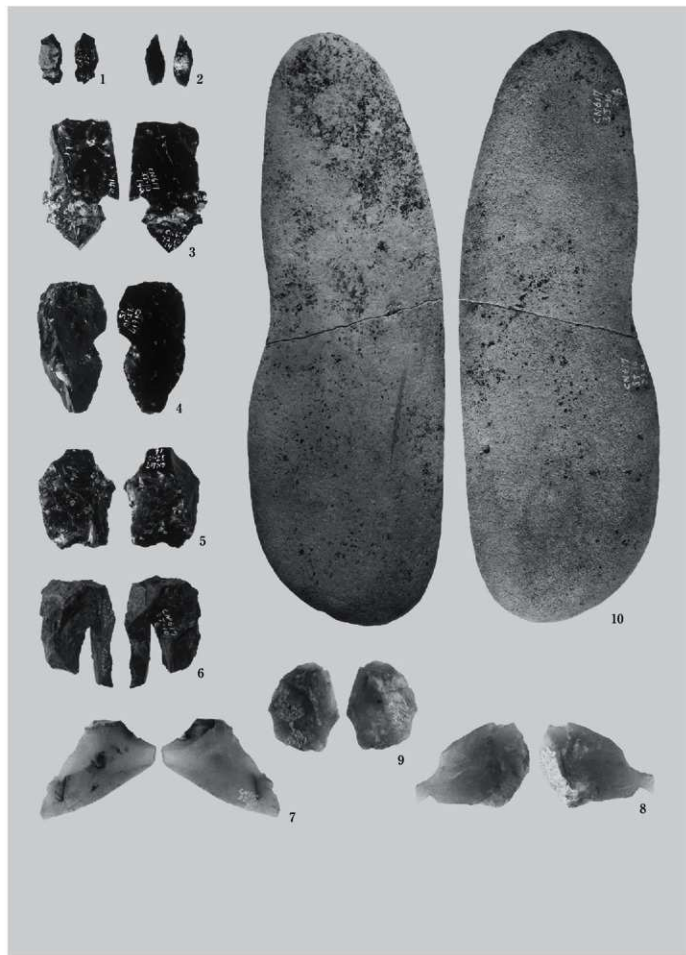
同上 (5G-02)



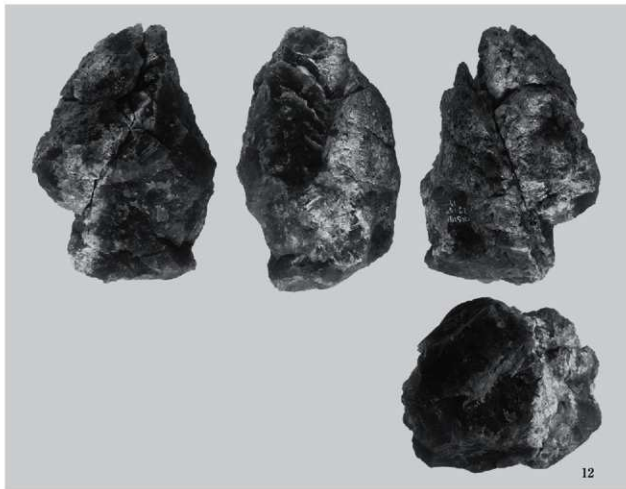
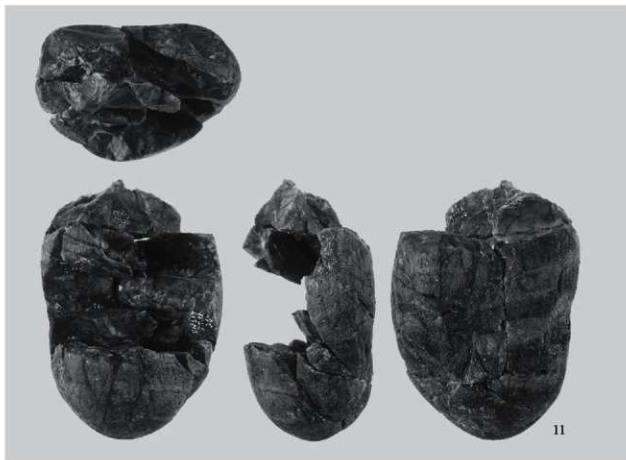
同上 (9B-30)



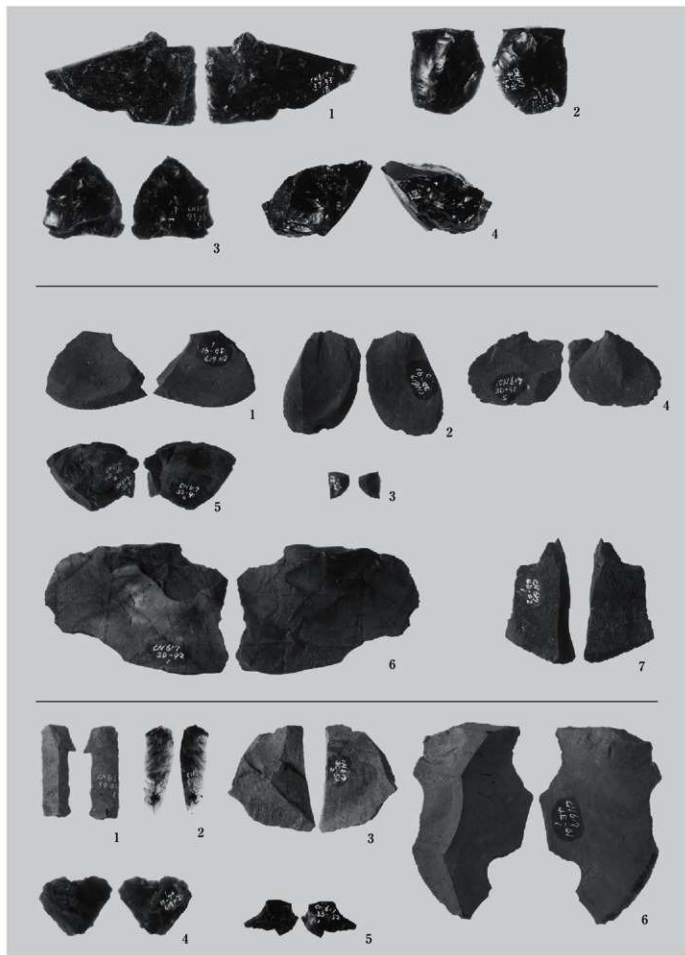
第 1 - A 地点出土石器 (上)、第 1 - C 地点出土石器 (下)



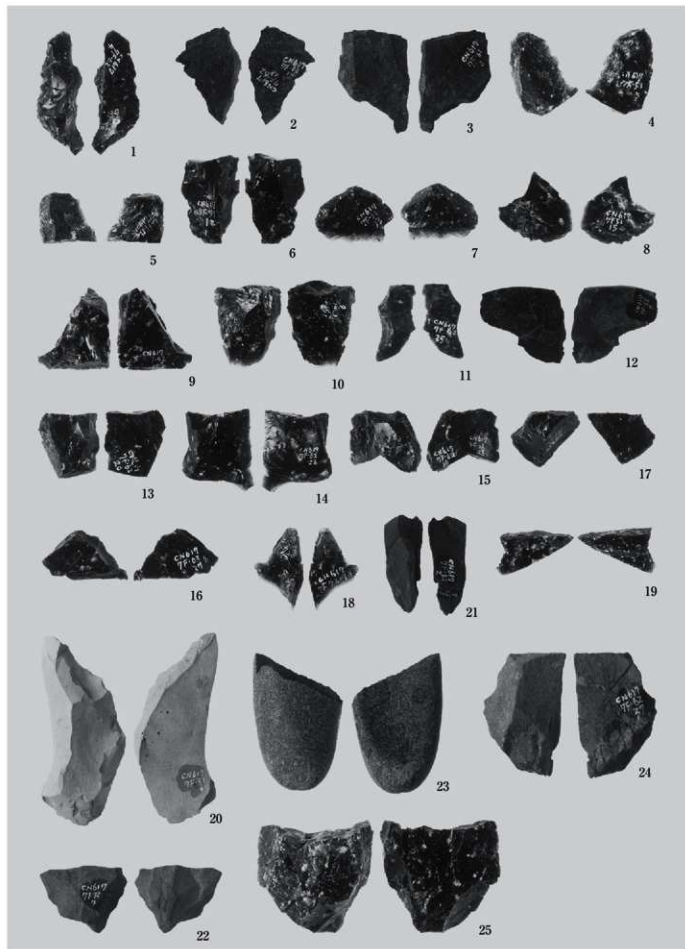
第1-B地点出土石器(1)



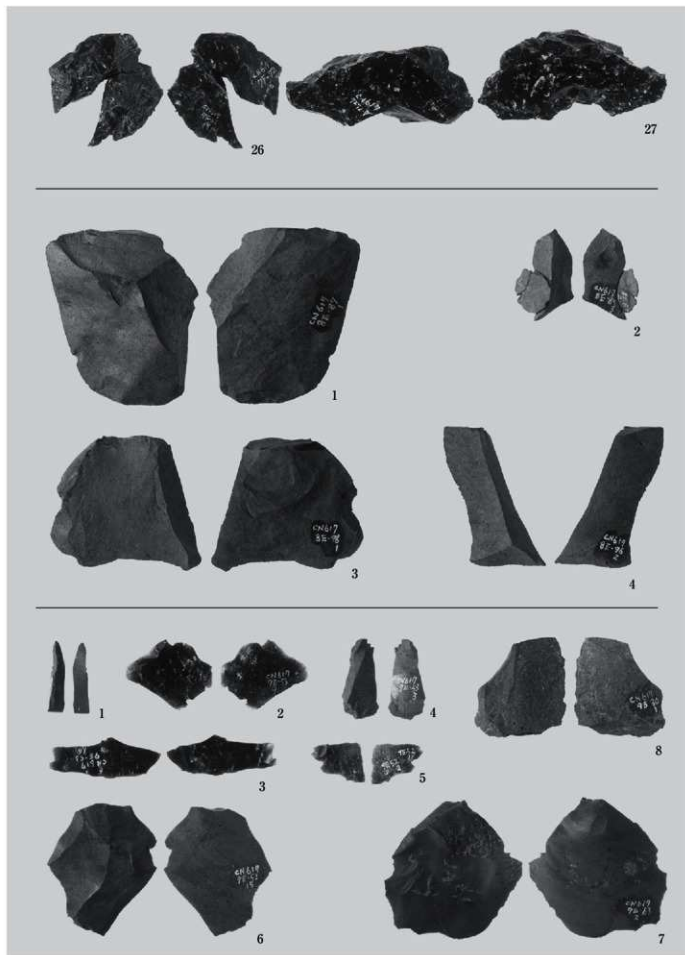
第1-B地点出土石器(2)



第1-D地点出土石器(上)、第2地点出土石器(中)、単独出土の石器(下)



第3地点出土石器(1)



第3地点出土石器(2)(上)、第4地点出土石器(中)、第5地点出土石器(下)



図版 13

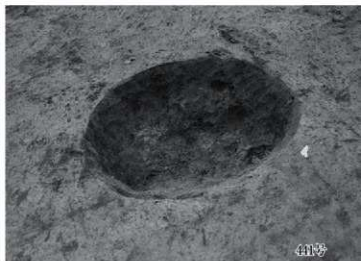
422号

425号 (斜向)・426号



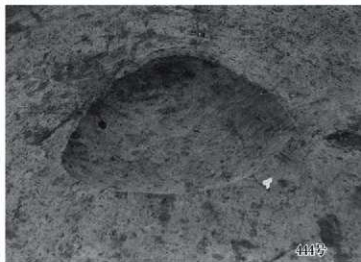
437号

437号



439号・440号 (左)

441号



443号

444号

炉穴全景・遺物出土状況 (1)



445号



453号



455号



461号



470号



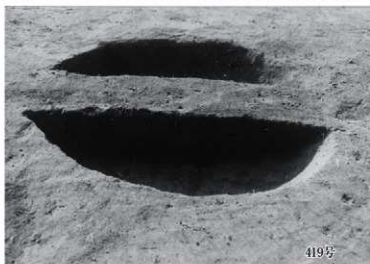
455号

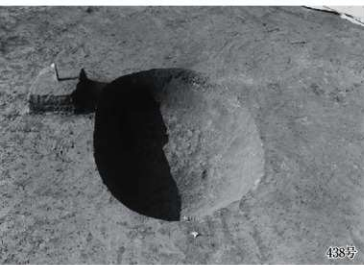


492号



493号~494号~495号







4 I - 05 グリッド周辺



同上



同上



4 I - 52 グリッド周辺



4 I - 80 グリッド周辺



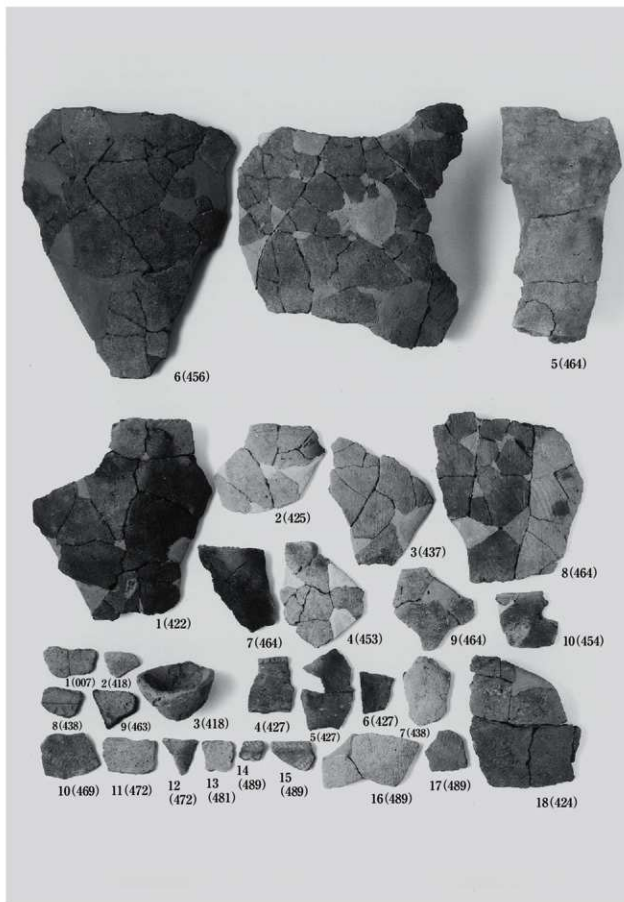
3 J -00グリッド周辺



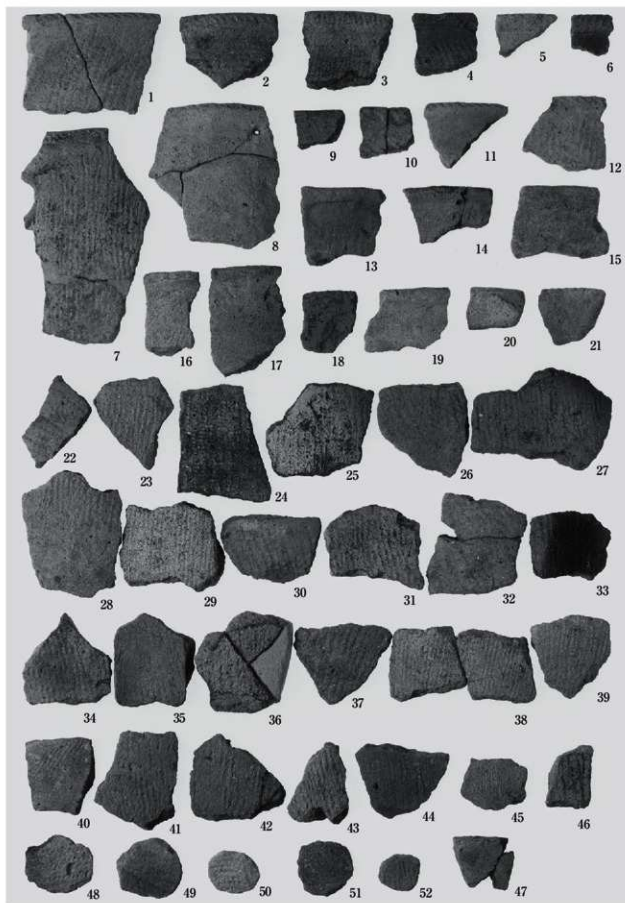
3 J -60グリッド周辺



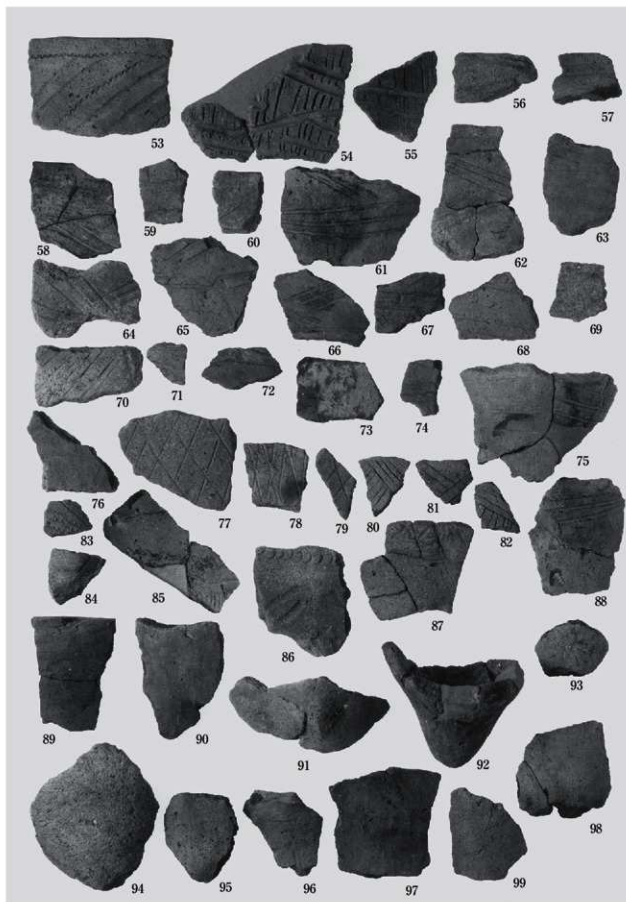
3 J -80グリッド周辺



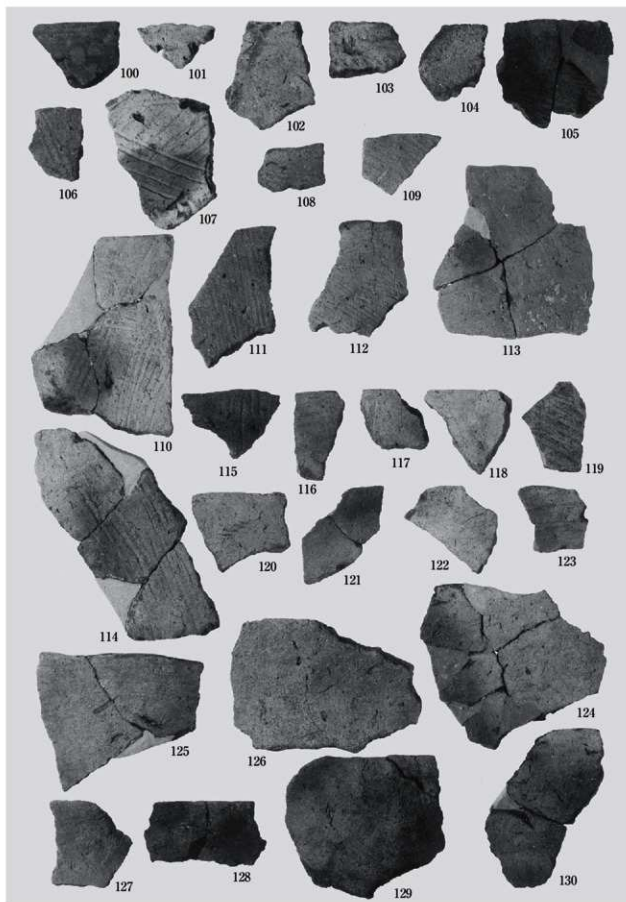
遺構出土土器（炉穴・土坑）



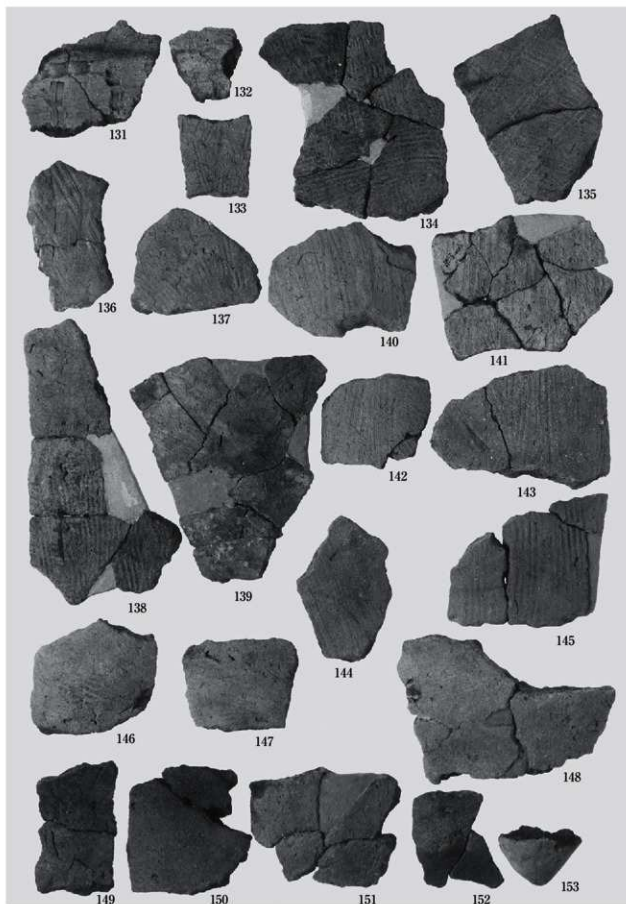
グリッド出土土器 (1)



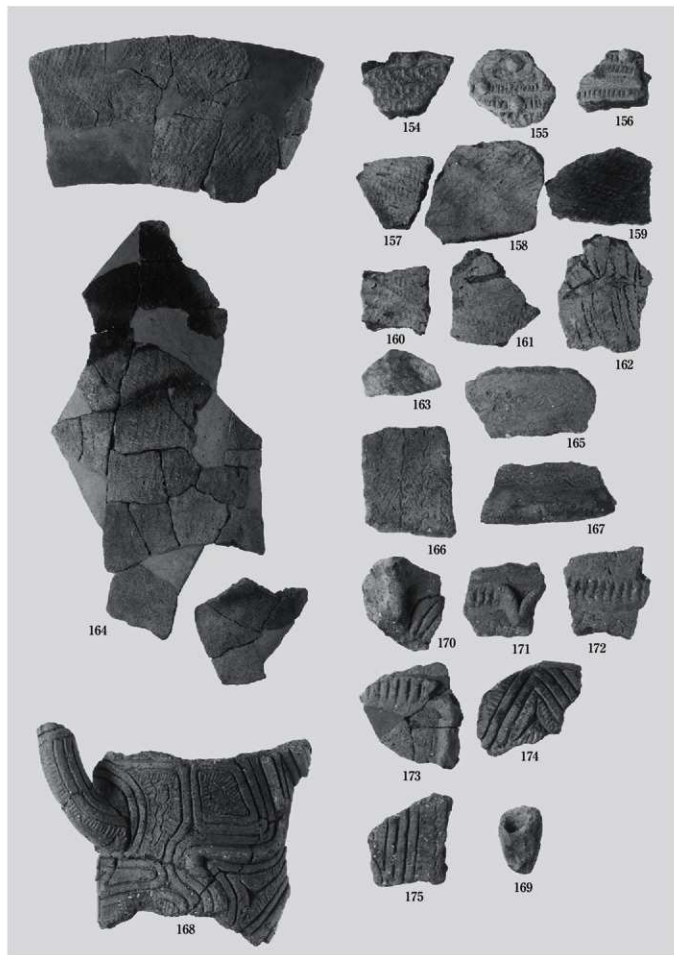
グリッド出土土器 (2)



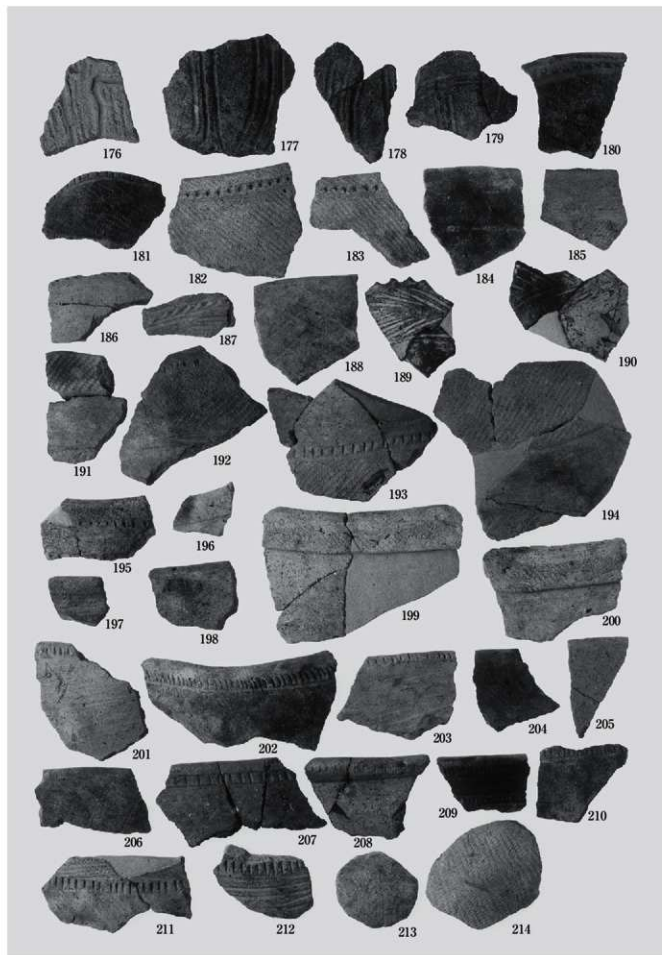
グリッド出土土器 (3)



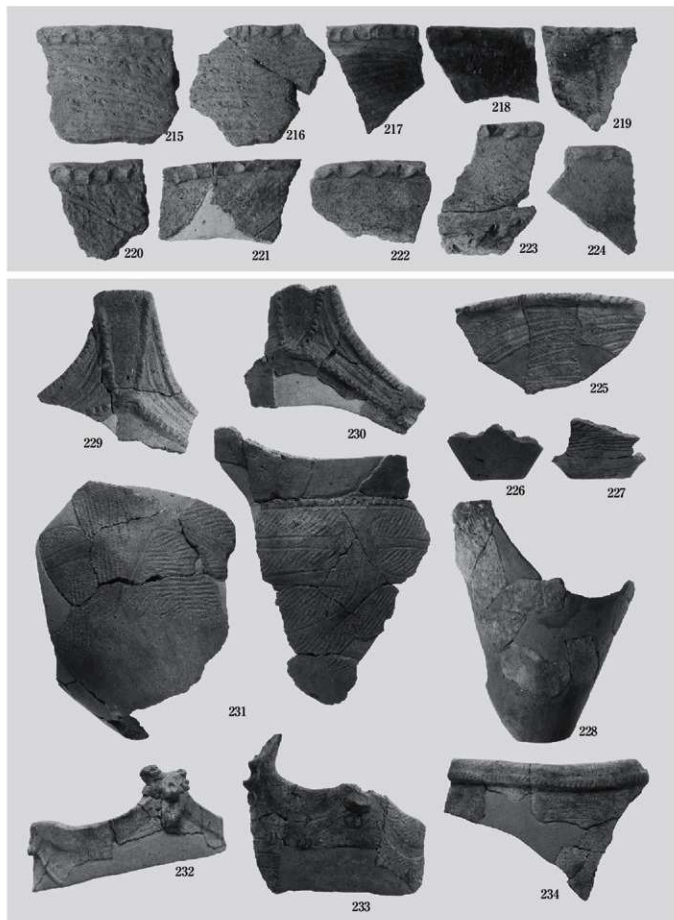
グリッド出土土器 (4)



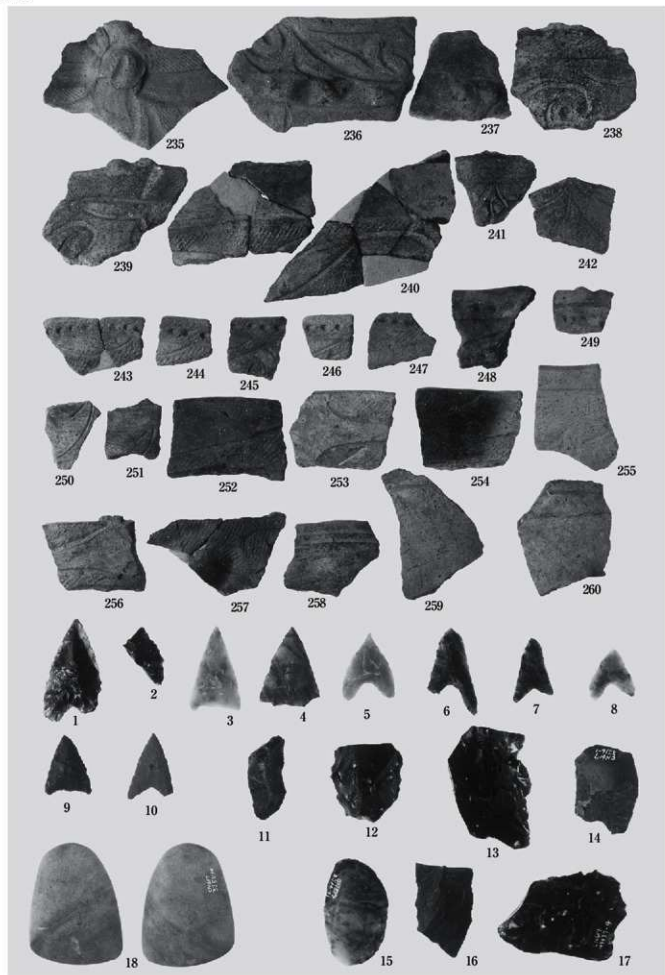
グリッド出土土器 (5)



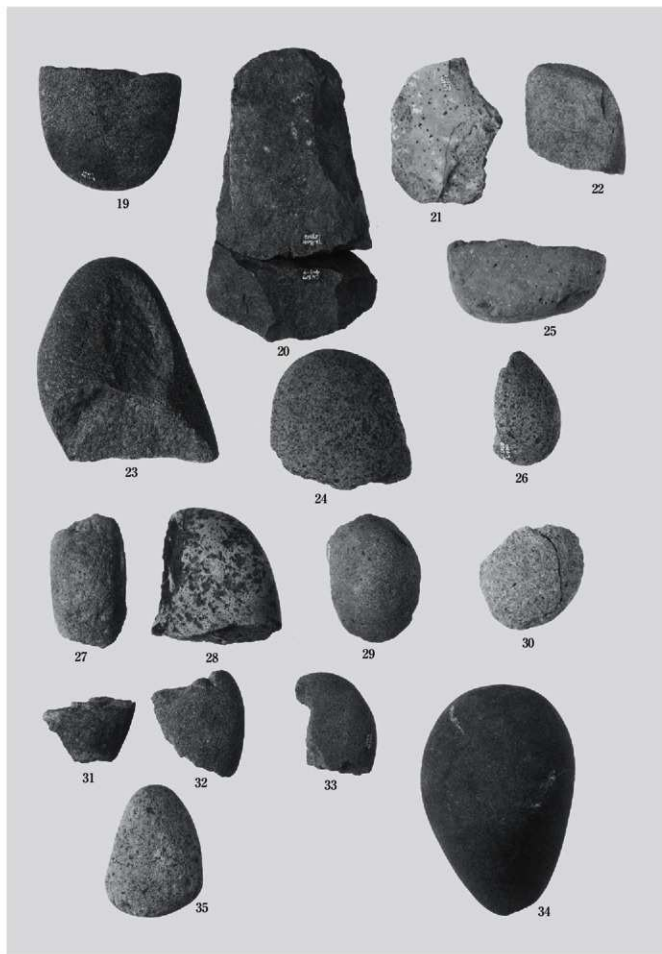
グリッド出土土器 (6)



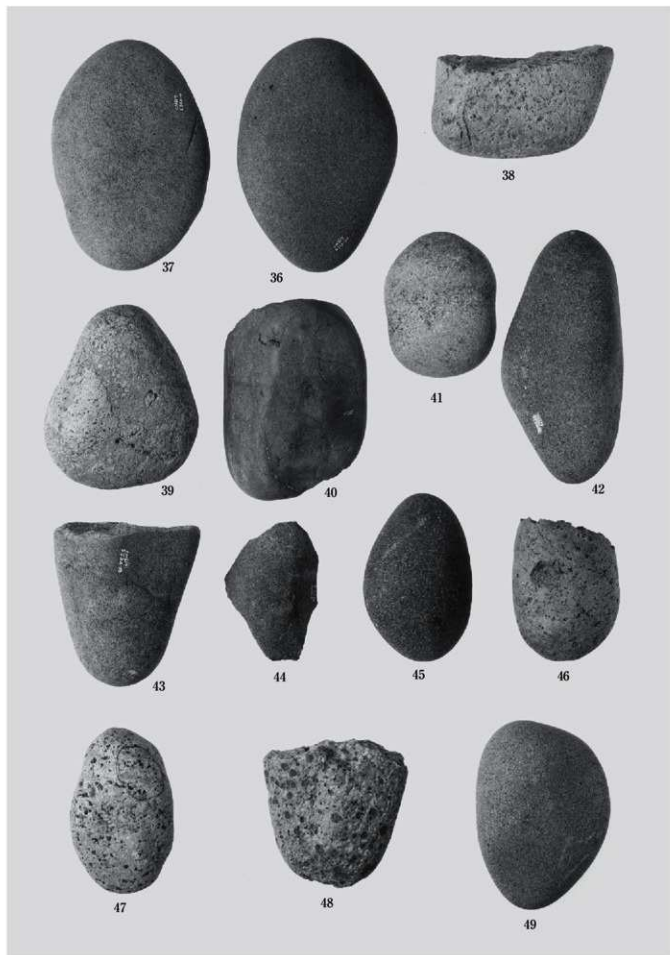
グリッド出土土器 (7)



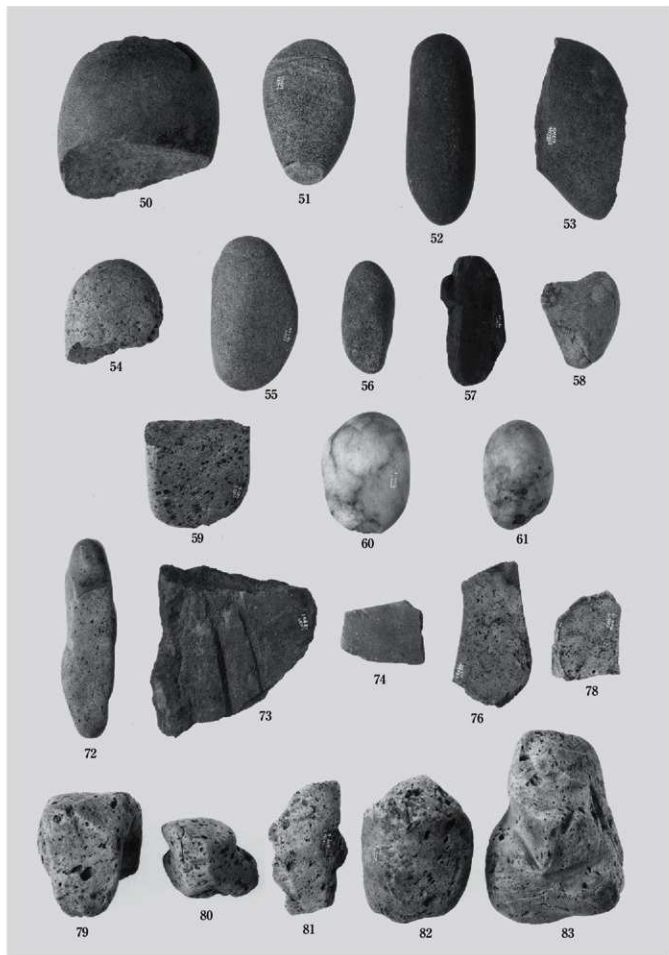
グリッド出土土器 (8), グリッド出土石器 (1)



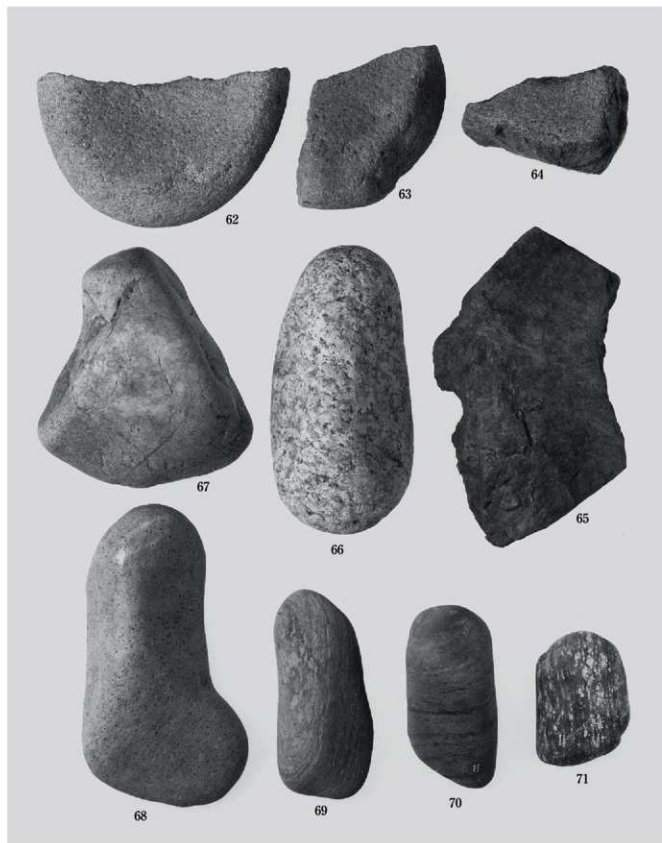
グリッド出土石器 (2)



グリッド出土石器 (3)



グリッド出土石器 (4)



グリッド出土石器 (5)



031号住居跡全景



同上土層断面



同上遺物出土状況



同上遺物出土状況



032号住居跡全景



同上土層断面



同上遺物出土状況



033号住居跡全景



同上土層断面



同上遺物出土状況



034号住居跡全景



同上土層断面



同上50号住居跡



同上50号住居跡



035号住居跡全景



同上遺物出土状況



366号住居跡全景



403号住居跡遺物出土状況



404号住居跡全景



同上遺物出土状況



405号住居跡全景



同上土層断面



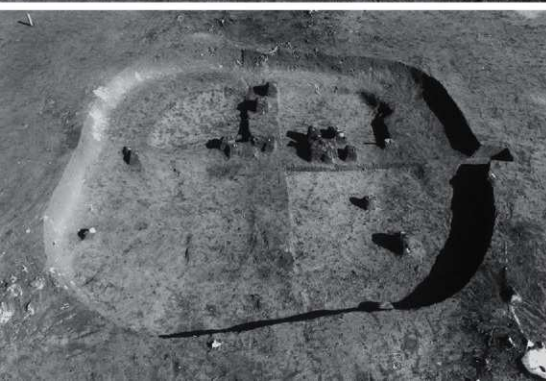
同上遺物出土状況



405号住居跡炭化物検出状況



406号住居跡全景



同上遺物出土状況



407号住居跡遺物出土状況



408号住居跡土層断面



409号住居跡土層断面



199号住居跡全景



同上カマド検出状況



同上土層断面



同上遺物出土状況



200号住居跡全景



同上土層断面



同土層下の出土状況



同土層下の出土状況



同上遺物出土状況



同上遺物出土状況



436号住居跡全景



同上土層断面



同上遺物出土状況



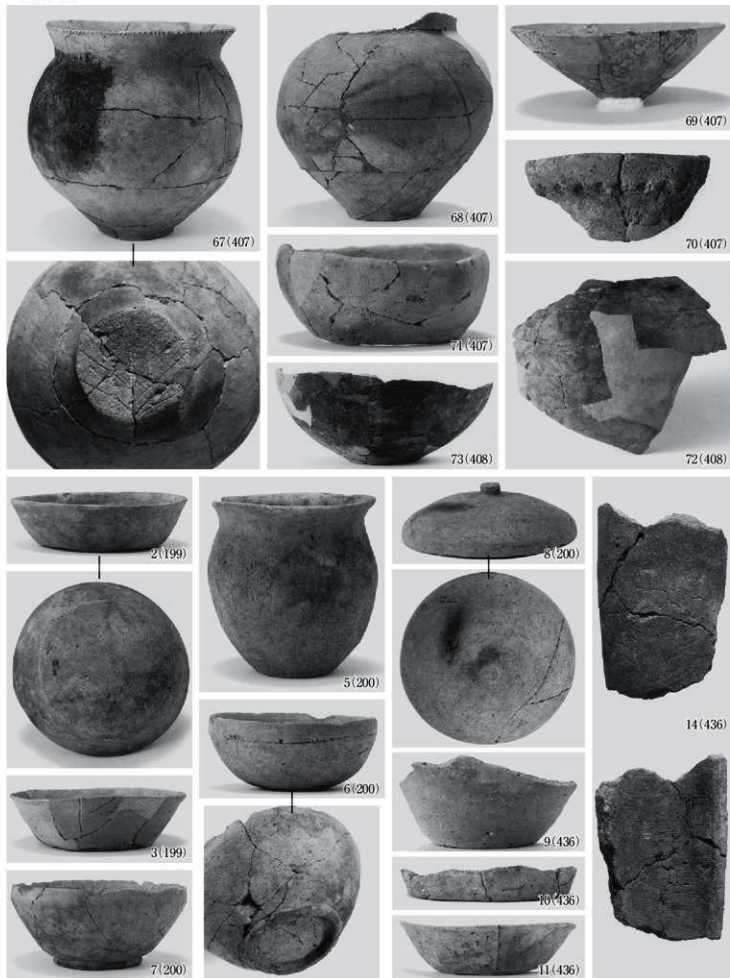
同上少々下層跡出土状況

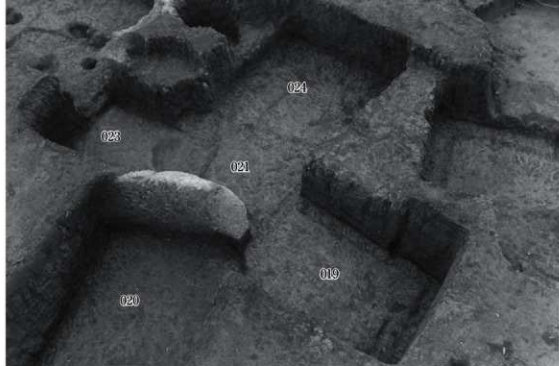


030号・031号・032号・033号住居跡出土遺物





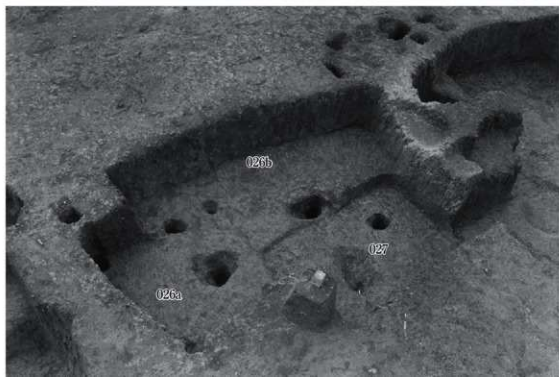




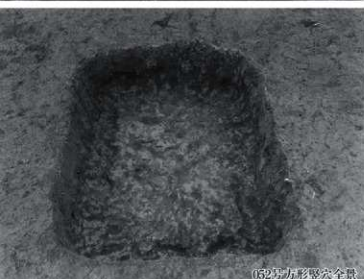
019号~025号
方形竖穴全景



022号·277号·301号
方形竖穴全景



026号·027号
方形竖穴全景





161号方形彩穴全景



012号-013号-022号方形彩穴土層断面



023号方形彩穴土層断面



024号-025号方形彩穴土層断面



026号-027号方形彩穴土層断面



028号方形彩穴土層断面



059号方形彩穴土層断面



060号方形彩穴土層断面



167号方形竖穴土層断面



171号方形竖穴土層断面



277号方形竖穴土層断面



301号方形竖穴土層断面



411号方形竖穴土層断面



412号方形竖穴土層断面



413号方形竖穴土層断面



416号方形竖穴土層断面



012号地下式坑全景



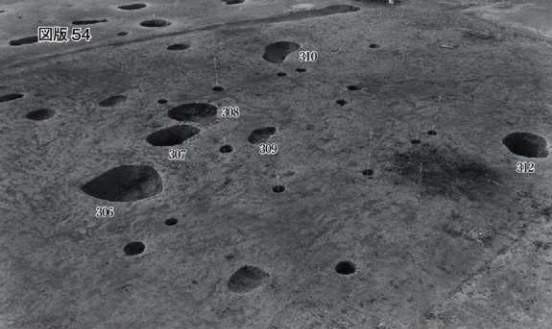
012号·013号地下式坑土层断面



012号·013号
地下式坑全景



013号地下式坑周边



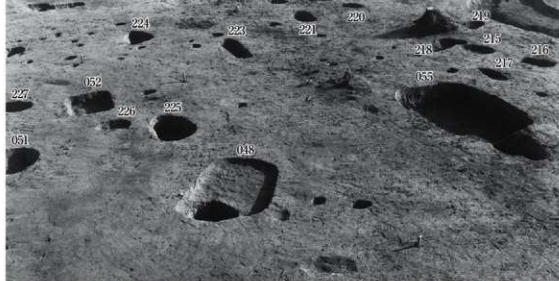
9 G-35グリッド周辺



9 G-43グリッド周辺



9 G-82グリッド周辺



10G-13グリッド周辺



10G-56グリッド周辺



同上



11F-86グリッド周辺



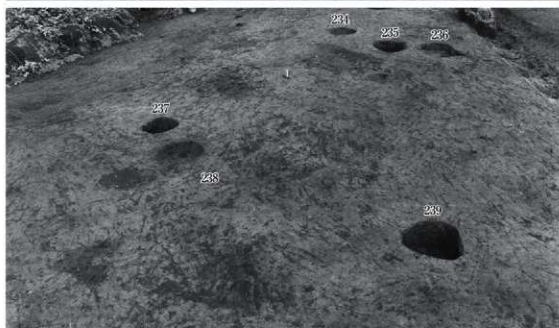
11G-22グリッド周辺



11G-50グリッド周辺



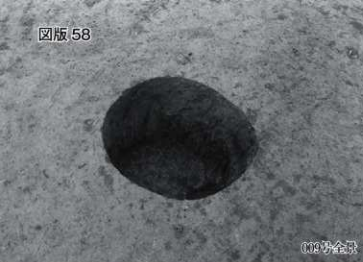
12G-42グリッド周辺



12G-65グリッド周辺



12G-95グリッド周辺



009号全景



010号全景



011号全景



012号全景



202号全景



421号全景



479号全景



480号全景



207号全景



475号全景



477号全景



482号全景



483号全景



484号全景



081号粘土検出状況



082号泥砂出土状況



029号土层断面



045号土层断面



055号土层断面



088号土层断面



086号土层断面



090号土层断面



098号土层断面



201号土层断面



002号 (南西から)



003号 (南東から)



061号・062号・063号
(北西から)



320号 (南から)



486号 (西から)



同上遺物出土状況



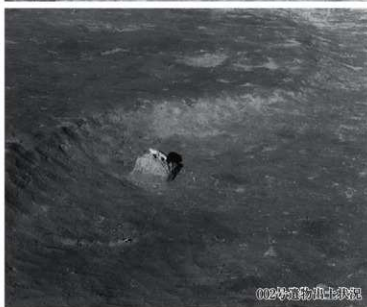
486号・487号
(南西から)



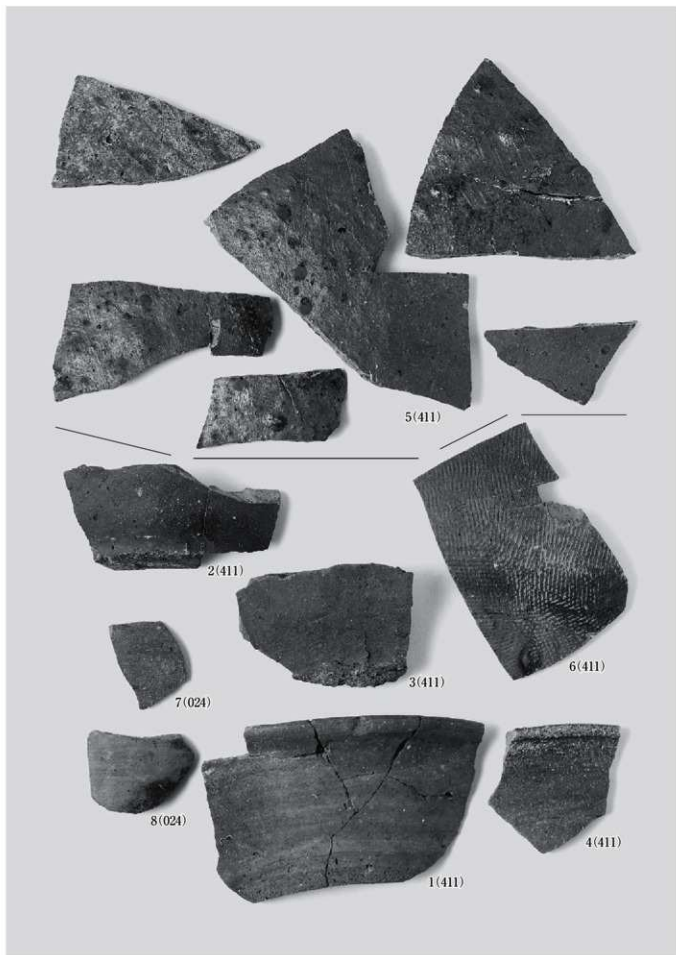
488号 (南西から)



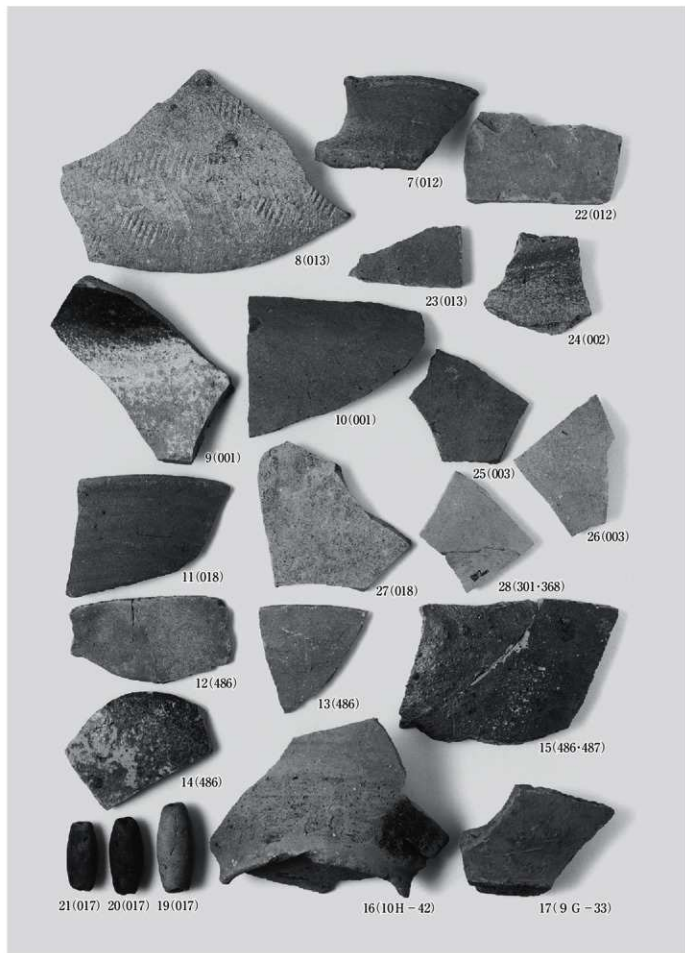
490号 (南から)



溝 (4)



方形竖穴 (024号·411号) 出土遺物



地下式坑・溝・グリッド出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ちばにゆーたうんまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ							
書名	千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書							
副書名	印西市天王台西遺跡							
巻次	24							
シリーズ名	財団法人千葉県教育振興財団調査報告							
シリーズ番号	第669集							
編著者名	高橋博文 古内 茂							
編集機関	財団法人千葉県教育振興財団 文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿波809番地の2 Tel. 043-424-4848							
発行年月日	西暦2011年10月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		経緯度		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
天王台西遺跡	千葉県印西市竜腹寺 字天王台西 208他	12231	CN617	35度 47分 53秒	140度 11分 10秒	19890410～ 19840727 19980406～ 19990325 19990406～ 19990630 20010903～ 20011031 20050406～ 20050921 20071001～ 20071031	68,680㎡	区画整理
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
天王台西遺跡	包蔵地	旧石器時代	石器集中地点 5 地点	ナイフ形石器・台形石器・ 二次加工剥片・石核・削 片など				
	包蔵地 集落跡	縄文時代	炉穴 28基 陥穴 5基 土坑 23基 石器製作跡 1地点	縄文土器（早期～晩期）、 石器（石鏃・削器・楔形 石器・磨製石斧・打製石 斧・礫器・磨石・敲石・ 石皿・台石）		同一地点で早期～晩期初頭 にいたる土器群が出土した。		
	集落跡	古墳時代	堅穴住居跡 16軒	土師器				
	集落跡	奈良・平安 時代	堅穴住居跡 3軒	土師器・須恵器				
	集落跡	中世・近世	方形堅穴 41基 地下式坑 3基 土坑 190基 溝 18か所 井戸状遺構 1か所 掘立柱建物跡 2か所	中世陶器・近世陶磁器・ 土製品・礫石		確実な中世遺構として方形 堅穴が集中的に検出されて いる。遺構に伴う陶器は少 ないが、12世紀後半から13 世紀前半に位置づけられる。		
要 約	大規模区画整理事業に伴う調査で、平成元年度から平成19年度まで6次にわたる調査となった。本遺跡からは旧石器・縄文・古墳・奈良・平安・中世・近世と各時代の遺物が出土した。旧石器時代では5地点で石器群が発見され、縄文時代では早期の炉穴群とともに土器包含層（早期～晩期初頭）が検出された。これは当時の人びとによって狩猟採集の場として利用されてきたものと推測できた。また中世の遺構・遺物から12世紀後半から13世紀前半における民衆の生活の一端が明らかとなった。							

千葉県教育振興財団調査報告第669集

千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XXIV

-印西市天王台西遺跡-

平成23年10月31日発行

編集 財団法人 千葉県教育振興財団
文化財センター

発行 独立行政法人 都市再生機構
首都圏ニュータウン本部
東京都新宿区西新宿6-5-1

財団法人 千葉県教育振興財団
千葉県四街道市鹿渡809番地の2

印刷 株式会社 弘文社
千葉県市川市市川南2丁目7番2号
